古曽志遺跡群発掘調査報告書

―― 朝日ケ丘団地造成工事に伴う発掘調査 ――

1989年3月

[redacted]委員会

古曽志遺跡群発掘調査報告書

―― 朝日ケ丘団地造成工事に伴う発掘調査 ――

1989年3月

島根県教育委員会

序

島根県教育委員会は，島根県住宅供給公社の委託を受けて昭和60年度から昭和63年度まで，松江市古曽志町朝日ヶ丘団地建設予定地内の埋蔵文化財調査を実施しました。この報告書は，その３年間の調査結果をとりまとめたものです。

島根県下でも松江市周辺は，出雲国の中心地として原始・古代より文化の栄えた地域で，現在でも数多くの文化遺産が残っています。とりわけ，宍道湖の一望できる松江市古曽志町の丘陵一体には大形古墳が集中しており，今回の発掘調査でも大形前方後方墳の古曽志大谷１号墳が新たに発見されました。団地予定地内にはその他にも方墳や，古墳時代から奈良時代にかけての集落跡，平安時代頃の須恵器窯跡群などもあり，今回の発掘調査によって宍道湖北岸地域の古代文化の一端を知ることができました。島根県ではこれらの成果を生かして，昭和63年度から古曽志大谷１号墳や須恵器の窯跡の復元整備を中核とした，古曽志町丘陵一体の公園整備を計画しております。

本書は，古曽志大谷１号墳などの発掘調査成果を収めていますが，これを通じて多少なりとも，広く一般の方々の埋蔵文化財に対する御理解が高まれば幸いに存じます。

なお，本書の刊行にあたり，島根県住宅供給公社をはじめ，ご協力を賜わりました関係各位に衷心より御礼を申し上げます。

平成元年３月

島根県教育委員会
教育長　**松　井　邦　友**

例　　言

1．本書は，島根県住宅供給公社の委託を受けて，島根県教育委員会が昭和60年～63年度に実施した松江市古曽志住宅団地（朝日ヶ丘団地）予定地内遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査組織は次のとおりである。

調査主体　島根県教育委員会

事務局　(文化課長)美多定秀，熊谷正弘，内藤仁男　(同課長補佐)安達富治，蓮岡法暲，井原譲，勝部昭　(同文化係長)矢内高太郎，野村純一　(主事)吉川広，吾郷朋之

調査員　(埋蔵文化財第二係長)石井悠，川原和人　(同主事)足立克己，丹羽野裕，熱田貴保，角田徳幸　(同兼主事)遠藤浩巳，飯田学

調査指導　山本清(島根県文化財保護審議委員)　池田満雄(同)　近藤義郎(岡山大学文学部教授)　小田富士雄(福岡大学文学部教授)　田中義昭(島根大学法文学部教授)　渡部貞幸(同助教授)　中村浩(大谷女子大学文学部助教授)

調査補助員　青山善之，石川良，江川幸子，岡宏，梶谷武，浪花芳明，橋本修治，松本丸人

遺物整理　奥田寛子，片寄絢子，狩野京子，権田利江，野田直美，和田かおり，和智敬子

3．挿図中の方位は，国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方向である。

4．自然科学分野からの分析，鑑定を次の方々にお願いした。

石材鑑定，土壌鑑定　三浦清（島根大学教育学部教授，島根県文化財保護審議委員）

熱残留地磁気測定　伊藤晴明（島根大学理学部教授）　時枝克安（同助教授）

須恵器，埴輪胎土分析　三辻利一（奈良教育大学教授）

5．発掘調査に際しては，島根県住宅供給公社，㈱不動建設，㈱佐藤組，古江公民館から多大な協力を得た。また次の方々より，御教示，協力をいただいた。記して深謝したい。

赤崎敏男，伊藤晃，稲田孝司，宇垣匡雅，岡田博，岡山真知子，甲斐忠彦，川西宏幸，川辺節義，神澤昌二郎，河本清，後藤宗俊，駒井正明，佐藤信之，清水芳裕，菅付和樹，桑原憲彰，高井健二，高島忠平，高畑知功，都出比呂志，中野和彦，中村幸四郎，新納泉，野間重孝，東中川忠美，平井勝，福田正継，福田義彦，藤野次史，麻柄一志，町田章，真野和夫，宮内克己，宮本一夫，矢島宏雄，吉留秀敏，渡部明夫

6．遺物の実測は，調査員の他 江川，梶谷，浪花があたり，遺物写真は丹羽野，角田が撮影した。

7．掲載図面は，足立，丹羽野が作成し，奥田，片寄，狩野，野田が浄写した。

8．本書の執筆は，上記調査指導の諸先生の助言を得て，調査員があたり，分担は目次に示した。

9．本書の編集は，足立と丹羽野が協議してこれを行った。

目　　次

第１章　調査に至る経緯 ……（足立克己）… 1
第２章　調査の経過 ……（丹羽野裕）… 2
　１．第１次調査（確認調査）…… 2
　２．本調査 …… 5
第３章　遺跡の概要 ……（丹羽野）… 6
第４章　位置と環境 ……（足立）… 10
第５章　調査の結果 …… 14
　第１節　古曽志善坊遺跡 …… 14
　　(1)　Ⅰ区の調査 ……（足立）… 14
　　(2)　Ⅱ区の調査 …… 19
　　(3)　Ⅲ区の調査 …… 24
　　(4)　石器 ……（丹羽野）… 27
　第２節　古曽志善坊古墳群 ……（丹羽野）… 31
　　(1)　善坊１号墳 …… 31
　　(2)　善坊２号墳 …… 35
　第３節　古曽志平廻田遺跡 …… 38
　　(1)　Ⅰ区の調査 ……（足立）… 38
　　(2)　Ⅱ区の調査 …… 70
　　(3)　Ⅲ区窯跡群 ……（丹羽野）… 82
　　(4)　Ⅳ区の調査 ……（足立）… 111
　　(5)　平廻田遺跡出土の石器 ……（丹羽野）… 115
　第４節　古曽志大谷古墳群 ……（丹羽野）… 120
　　１．古曽志大谷１号墳 …… 120
　　(1)　立地及び調査前の状況 …… 120
　　(2)　調査の経過 …… 120
　　(3)　調査の結果 …… 122
　　①　墳丘の概要 …… 122
　　②　墳丘の築成 …… 126
　　③　葺石 …… 139
　　④　埴輪 …… 145
　　⑤　後方部主体部 …… 165
　　⑥　前方部主体部 …… 165
　　⑦　造り出し …… 175
　　⑧　後方部崩壊部祭祀遺構 …… 183
　　⑨　墳外の遺構 …… 184
　　２．古曽志大谷２号墳 …… 186
　　３．古曽志大谷３号墳 …… 190
　　４．古曽志大谷４号墳 …… 190
　第５節　古曽志清水遺跡 …… 196
　　(1)　Ⅰ区の調査 ……（足立・丹羽野）… 196
　　(2)　Ⅱ区の調査 ……（足立）… 198
　　(3)　Ⅲ区の調査 ……（足立・丹羽野）… 202
　　(4)　Ⅳ区の調査 ……（足立）… 208
　　(5)　姥ケ谷古墳群について …… 214
　第６節　大谷根智地区の調査 ……（足立）… 215
第６章　自然科学分野の分析 …… 219
　第１節　古曽志大谷１号墳出土須恵器，埴輪の蛍光Ｘ線分析 ……（三辻利一）… 219
　第２節　古曽志平廻田遺跡の熱残留磁気測定（伊藤晴明・時枝克安）… 231
　第３節　古曽志大谷１号墳周辺の表層土の構造と黒色土層 ……（三浦　清）… 235
第７章　まとめ …… 238
　第１節　古曽志遺跡群出土の旧石器について（丹羽野）… 238
　第２節　古曽志大谷１号墳をめぐる諸問題 …… 240
　　１．古曽志大谷１号墳について …… 240
　　(1)　墳丘の築造方法と墳形 ……（足立）… 240
　　(2)　葺石 …… 247
　　(3)　埴輪 ……（熱田貴保）… 249
　　(4)　須恵器 …… 252
　　(5)　主体部 ……（丹羽野）… 255
　　(6)　副葬品 ……（熱田）… 256
　　(7)　造り出し ……（丹羽野）… 257
　　２．古曽志大谷１号墳と周辺の古墳 …… 258
　　(1)　古曽志町周辺の古墳の変遷（足立）… 258
　　(2)　出雲の中期古墳 ……（丹羽野）… 259
　第３節　古曽志平廻田窯跡群 ……（丹羽野）… 263

第1章　調査に至る経緯

古曽志遺跡群の発掘調査は，島根県教育委員会が昭和60年から３ヶ年にわたって実施したものであるが，調査に至るまでには次のような経緯があった。すなわち，島根県住宅供給公社（以下「公社」という。）は，松江市内の住宅需要を考慮し，松江市比津ヶ丘団地につぐ県内第二の規模をもつ住宅団地を建設しようと，昭和54年松江市古曽志町の丘陵地帯の造成計画を策定し，昭和55年４月，地方住宅供給公社法第28条の規定により，松江市と開発協議を行った。同年11月，市教委は同予定地内に古墳が存在し，開発前に発掘調査が必要な旨の回答を行い，これを受けて公社は，昭和56年４月島根県教育委員会文化課（以下「文化課」）という。）に造成予定地内の分布調査を依頼してきたが，昭和57年開催予定のくにびき国体に関連した開発事業の事前調査に追われていた文化課は，これに応じることができなかった。その後，この計画が土地利用対策要綱に基き，昭和57年４月に島根県土地利用調整会議に付議され，文化課は周知の古墳が１基あり，他にも遺跡の存在する可能性があるので確認調査が必要な旨を指摘した。

公社は，これに基き，この古墳を造成計画からはずすとともに，昭和59年４月11日に文化課に対し，古曽志住宅団地造成予定地内の遺跡の分布調査を正式に依頼してきた。これに対して文化課は，同年５月に現地踏査を実施し，台状遺構１，古墳10基，須恵器散布地１ヶ所を新たに発見したほか，表面観察で遺構遺物は認められないものの注意を要する箇所が４ヶ所あることを確認し，その旨通知するとともに，遺跡をなるべく計画からはずすように要望した。早急に事業を実施したい公社は，この分布調査結果をもとにさらに２基の古墳をはずし，造成面積を当初計画の28.6haから23.0haに縮小した実施計画を策定し，改めて発掘調査の実施について協議を求めてきた。

以後，協議の内容は発掘調査体制に移り，総面積で９万m²にもおよぶ調査対象地をどのように調査していくかが問題となった。そして度重なる協議の結果，同年10月，島根県教育委員会が事業主体となって昭和60年４月から発掘調査にはいることが決定した。そして具体的な調査面積や予算等を確定するため，調査はまず，立木伐採後の再度の分布調査と試掘調査から始めることが併せて確認された。

以上のような手続きを経て，昭和60年４月１日付けで公社と島根県の間で委託契約が締結され，４月19日から現地調査を開始した。

第2章　調 査 の 経 過

古曽志住宅団地（朝日ヶ丘住宅団地）造成に伴う埋蔵文化財発掘調査は，昭和60年度から昭和63年度にかけて行った。調査は，まず遺跡の有無や遺構の状況，範囲等を確認する第１次調査を行い，その結果を受けて本調査を行って，最終年度（63年度）に報告書作成を行った。

１．第１次調査（確認調査）

第１次調査は，昭和59年度に行われた分布調査によって明らかになった，遺跡（Ⅰ～Ⅲ区）の範囲や状況を明らかにすると共に，遺跡の可能性のある要注意箇所（A～D区）について，遺物，遺構の有無や状況を把握するために行った。調査は，63年４月23日から７月９日まで行い，その後も伐開や造成により発見された箇所について，随時行った。

(1)　Ⅰ区　分布調査により，古墳状の高まり５ヶ所とかなり大規模な台状の遺構１ヶ所が認められていた地点である。確認調査は，５月24日から６月13日まで，高まりの周辺と緩やかな斜面を中心に46ヶ所のトレンチを設定して行った。調査の結果，古墳状の高まりは５ヶ所中３ヶ所が古墳であることが確認され，台状遺構は，伐採後の観察により，50m近い前方後方墳であることがわかった。これらの古墳群は，字名をとって古曽志大谷古墳群と名づけた（台状遺構は１号墳）。一方，１号墳南側の緩斜面には遺物散布地が認められ，古曽志清水遺跡（Ⅰ区）と名づけた。

(2)　Ⅱ区　４月23日から５月23日まで約30ヶ所のトレンチを調査，２基の古墳と３ヶ所の遺物散布地を確認し，字名をとって古曽志善坊遺跡，古曽志善坊古墳群と名づけた。

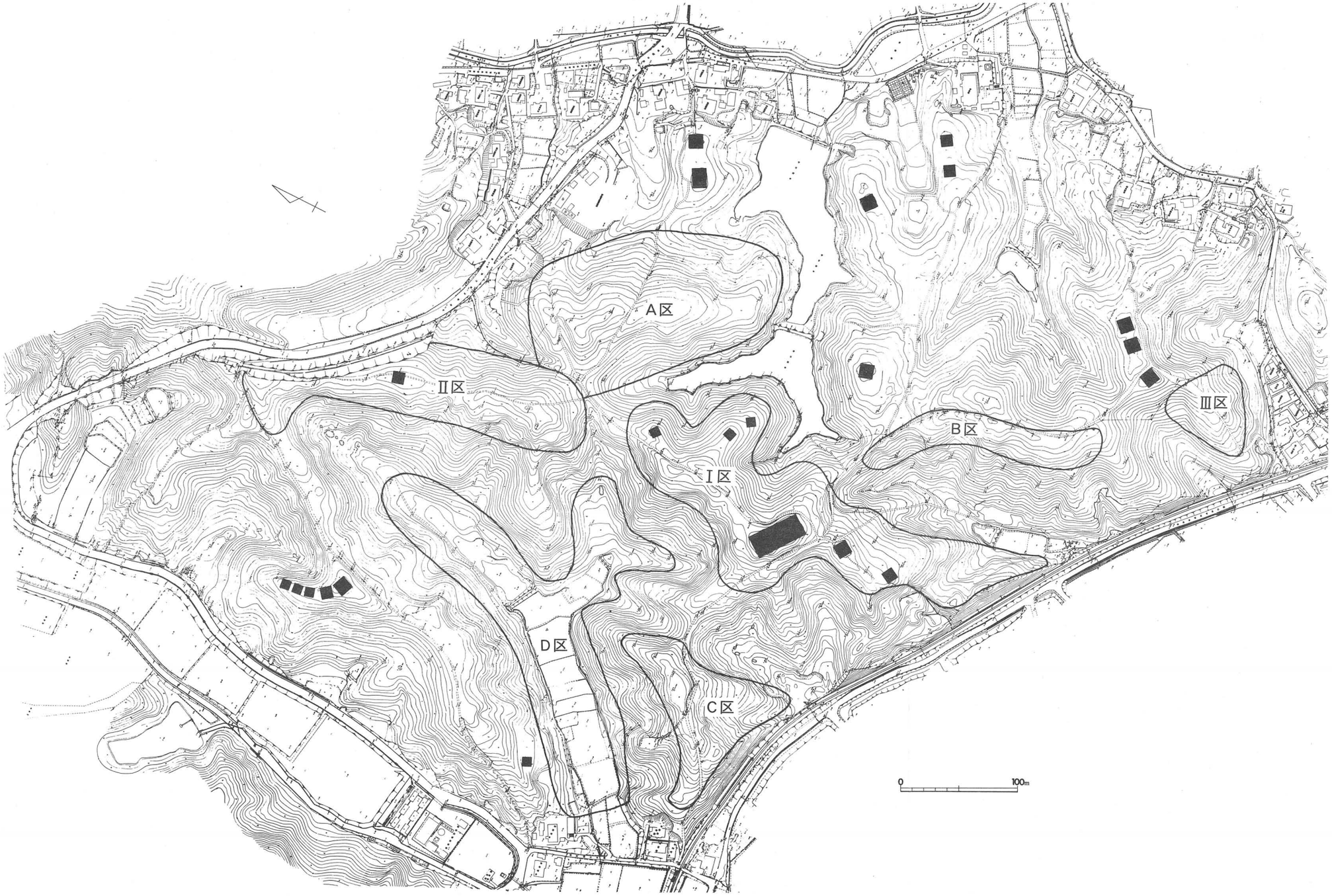
(3)　Ⅲ区　古墳が１基認められていた地区で（分布調査後設計変更により調査対象から外れた。）12ヶ所のトレンチ調査で散布地を確認，古曽志清水遺跡（Ⅳ区）と名づけた。

(4)　A区　全体的に緩やかな丘陵で，集落等を想定して50ヶ所のトレンチを設定，３ヶ所の集落跡を確認した。さらに１次調査終了後，工事用道路の工事の際に窯跡が発見され，さらに18ヶ所のトレンチ調査を行い，３基の須恵器窯跡を発見した。古曽志平廻田遺跡と名づけた。

(5)　B区　比較的緩やかな斜面で，６月14日から７月９日まで18ヶ所のトレンチを調査し，３ヶ所の散布地を確認，古曽志清水遺跡（Ⅰ～Ⅲ区）と名づけた。

(6)　C区　宍道湖に面した緩やかな斜面で，集落等を想定して６月18日から７月１日まで16ヶ所にトレンチを設定，遺構，遺物は検出されなかったので，この地区を走る「殿様道」の調査を３ヶ所のグリッドを設定して行った。

(7)　D区　工事予定地に大きく嵌入する谷で，谷の出口の宍道湖湖底から縄文土器が出土している（後谷遺跡）ことから14ヶ所のトレンチを調査したが，何等検出されなかった。



第１図　分布調査の結果に基く遺跡と要注意箇所

2．本 調 査

(1) 昭和60年度

① **古曽志善坊遺跡**　第１次調査の終わった７月17日より，北側のⅠ区から調査を開始した。Ⅰ～Ⅲ区では奈良時代を中心とする遺構，遺物を検出，また１号墳は一辺９ｍ程の方墳で，礫床を持つことがわかった。また１号墳の北側にも古墳らしき高まりがあることが伐採後わかり，周溝だけが残存，２号墳と名づけた。10月３日に終了した。

② **古曽志平廻田遺跡**　10月11日よりⅠ→Ⅱ→Ⅳ→Ⅲ区の順に調査を行った。Ⅰ，Ⅱ，Ⅳ区では古墳時代後期から平安時代初めの遺構，遺物が検出され，12月25日に終了した。一方工事中に発見されたⅢ区では，試掘の結果４基の須恵器窯跡の存在が推定され，保存のための協議が行われた。その結果，とりあえず標高が高く保存が困難な３号窯（当時は４号窯）のみ調査を行った。調査は窯内より焼成状態のまま須恵器が出土したことや，降雪等により大幅に遅れ，１月26日に終了した。

③ **古曽志大谷１号墳**　古墳の内容を把握するため12ヶ所のトレンチを設定，確認調査を行った。

(2) 昭和61年度

① **古曽志大谷古墳群**　１号墳は前年度の確認調査を受けて４月３日から全面調査を行った。調査中途で保存運動が活発になったことから，取扱いが保留となったため，この年度は表面調査に留まり，９月19日に終了した。

２号墳は７月28日に調査開始，９月２日に終了，３号墳は９月16日に開始し，10月８日に終了した。４号墳は９月16日に調査を開始，小石棺が検出され，移築等の取扱いが問題になったため，立ち割り調査は次年度に回し，10月21日に終了した。

② **古曽志清水遺跡**　Ⅰ～Ⅳ区を６月18日に調査開始，９月30日に終了した。うちⅡ区は，７月27日に調査区内に重機が誤って侵入し，かなりの部分が破壊されるというアクシデントがあり，部分的な調査しか実施できなかった。

(3) 昭和62年度

① **古曽志大谷古墳群**　１号墳は61年12月に，保存できないという結論がでたため，４月１日より最終立ち割り調査に入ったが，ナショナルトラストによる土地買い上げという保存運動の新局面が出たため，調査は一時中断し６月４日より再開，約１ヶ月で終了した。４号墳は小石棺の移築という取扱いの結論を受け，４月16日より立ち割り調査を開始，４月22日に終了した。

② **古曽志平廻田窯跡群**　取り扱い協議の結果，１，２号窯跡は現状保存，仮３号窯跡（当時）は調査後工事施工という結論となり，仮３号窯跡の調査を行ったが，既に流出していることが明らかになった。

第3章　遺跡の概要

団地造成予定地内の発掘調査は，結局５遺跡16調査区にも及んだが，各遺跡の概要は次のとおりである。

古曽志善坊遺跡

造成地北端の北西から南東に伸びる尾根の上に位置し，古曽志善坊古墳群をはさんで３ヶ所に分かれている。北側のⅠ区では，８世紀代頃の削平された尾根とそれに平行に走る数条の溝状遺構，縄文時代の竪穴住居状遺構１を検出した。またⅡ区では東向きの斜面から，やはり８世紀代の加工段５と溝状遺構１を検出した。この加工段には柱穴等が少なく，建物が建っていたかどうかは定かでない。南端のⅢ区では不定形の土壙10と溝状遺構等を検出した。出土遺物は少ないが，Ⅱ区よりはやや時期的に古そうな須恵器が出土している。

古曽志善坊古墳群

方墳２基で構成された古墳群である。１号墳は一辺９～10mで墳裾に幅１～1.5mの溝が廻る。墳丘の盛土は大半が流出していたが，それでも高さ約60cmが残っていた。主体部は楕円形の土壙に礫を敷いたもので，木棺の痕跡も確認された。遺物は出土していない。２号墳は，周溝の一部が残っていただけだが，溝流入土中から山陰須恵器編年のⅡ期の蓋坏が出土している。

古曽志平廻田遺跡

造成地の北東部に位置し，遺跡は寺廻田池の北側の尾根上にさらに東方まで広がっている。造成地内は４つの調査区に分かれており，Ⅰ～Ⅱ区では20ヶ所の加工段のうち10ヶ所から掘立柱建物跡が検出された。柱穴はⅡ区SB02以外は掘り方円形で，建物内には焼土の検出されたものもある。Ⅱ区SB02は，尾根の南端に建てられた本遺跡最大の建物跡で，一辺60～90cmの掘り方方形の柱穴が桁行３間（8.2m）×梁間２間（4.8m）に並んでいる。集会所あるいは倉庫のようなものではなかったかと考えられる。また，Ⅳ区でも東向きの斜面に加工段や溝状遺構，土壙，ピット等を検出した。これらはいずれも奈良時代の遺構で，須恵器や土師器片も多数出土している。Ⅲ区には須恵器の窯跡があり，当初４基と推定されたが，調査の結果，３基であることが判明した。このうち，１・２号窯跡は団地内に現状保存することに決まり，現在は若干の盛土を行う保護措置がとられている。３号窯跡は全長約3.7mの小形の登り窯で，燃焼室には３層にわたって炭化物層が，また焼成室にもこれに対応するように須恵器坏・皿類が出土した。須恵器は，その形態的特徴から10世紀代と考えられる。なお，１～２号窯跡下方では，２ヶ所で灰原を確認した。

第2図　古曽志遺跡群全体配置図

古曽志大谷古墳群

前方後方墳１，方墳３で構成された古墳群である。１号墳は，宍道湖に面した尾根の一番高いところに築かれた，全長45.5m，現状で高さ５mの前方後方墳である。二段築成で葺石をもち，墳頂や段の上，墳裾には円筒埴輪を廻らしていたと考えられる。前方部宍道湖よりに長さ5.5m，先端部幅9.5mの造り出しを設けており，ここでは埴輪列と須恵器や土師器片を確認した。墳丘は前方部・後方部ともに宍道湖側のコーナーが崩れており，このため後方部の中心主体部も流出したと考えられる。前方部墳頂には礫が敷かれており，その下から礫槨ともいうべき埋葬施設が発見された。棺内からは鉄製大刀１，刀子２，鉄斧１が，また棺外の礫の上からは鉄鏃が約40本出土した。２号墳は，１号墳の南側尾根の先端に位置する古墳で，８m×8.4mの方墳である。主体部は木棺直葬で，１m×２mの土壙内にⅢ期の須恵器蓋坏が２セット副葬されていた。なお，古墳の南側が一部前方後方形に削り出されており，あるいは前方後方墳であった可能性もある。

３・４号墳は１号墳の北側に位置し，３号墳は一辺約8.5mの方墳である。墳頂には10cm程度の盛り土が残っているが，主体部は検出できなかった。墳裾で須恵器片と土師器片が若干出土した。４号墳は３号墳の斜面下方にある，いわゆる山寄せの方墳である。墳丘は平面形が台形をしており，南北辺で8.8m，上辺5.7m，下辺７mを測る。主体部は凝灰岩質礫岩の切石を組み合わせた小石棺で，北側の壁が抜き取られている。法量は内法で72cm×35cm，高さ35cmである。遺物は溝流入土中より７世紀末ころの須恵器蓋片が出土するのみである。

古曽志清水遺跡

古曽志大谷２号墳が位置する尾根から姥ヶ谷古墳群の南側まで，４ヶ所にわたって遺構・遺物が発見された。西端のⅠ区では，弥生時代頃と考えられる加工段と柱穴をはじめ，ピット・土壙等が，また遺物包含層から縄文土器・弥生土器・奈良時代以降の須恵器・石器類・鉄器類等が出土した。Ⅱ区では善坊遺跡Ⅰ区と同様の溝状遺構が須恵器とともに検出され，Ⅲ区では奈良時代頃の土器類以外に，メノウ・黒曜石・安山岩の石核・フレイク類が多数出土している。東端のⅣ区では時期不明の溝状遺構・ピット等の他に家形埴輪片と鉄器が出土した。斜面上方の姥ヶ谷古墳群から転落した可能性が強く，出土例の少ない家形埴輪は貴重な参考資料である。

殿様道

以上５遺跡のほかに，団地造成予定地内を縦横に走る『殿様道』と呼ばれる遺構がある。この『殿様道』は尾根の上をそれに沿った形で，あるところでは山を削り，あるところでは盛土をしたりして造られた道である。道幅は４～５mあり，中央には幅２～３m，厚さ５cm程度に小礫が敷き詰められている。小礫中に瓦片・備前焼をはじめとする陶磁器片等が多数含まれており，近世以降のものと考えられるが，この大造成工事で古代の遺構も結構破壊されている。

第4章　位置と環境

古曽志遺跡群のある古曽志住宅団地（朝日ヶ丘団地）は，島根県松江市古曽志町1631番地１ほかから東長江町1310番地ほかにかけての広範囲に位置し，ちょうど松江市の中心から宍道湖北岸を６kmばかり西へいったところの長江干拓地の北側に相当する。遺跡周辺は，島根半島北山山系のほぼ中央に位置する朝日山の裾野に当たっており，付近は宍道湖岸まで低丘陵と細長い谷がいくつも並び，古曽志遺跡群もそうした丘陵の先端部に立地している。南側眼前には宍道湖が広がり，天気の良い日には遠く大山や三瓶山をも臨むことのできる風光明媚なところで，また，北には古曽志の沖積平野をひかえ，東は『出雲国風土記』にいう「佐太水海」から佐太川を伝って日本海まで抜けるルートに接するなど交通の要衝の地でもある。

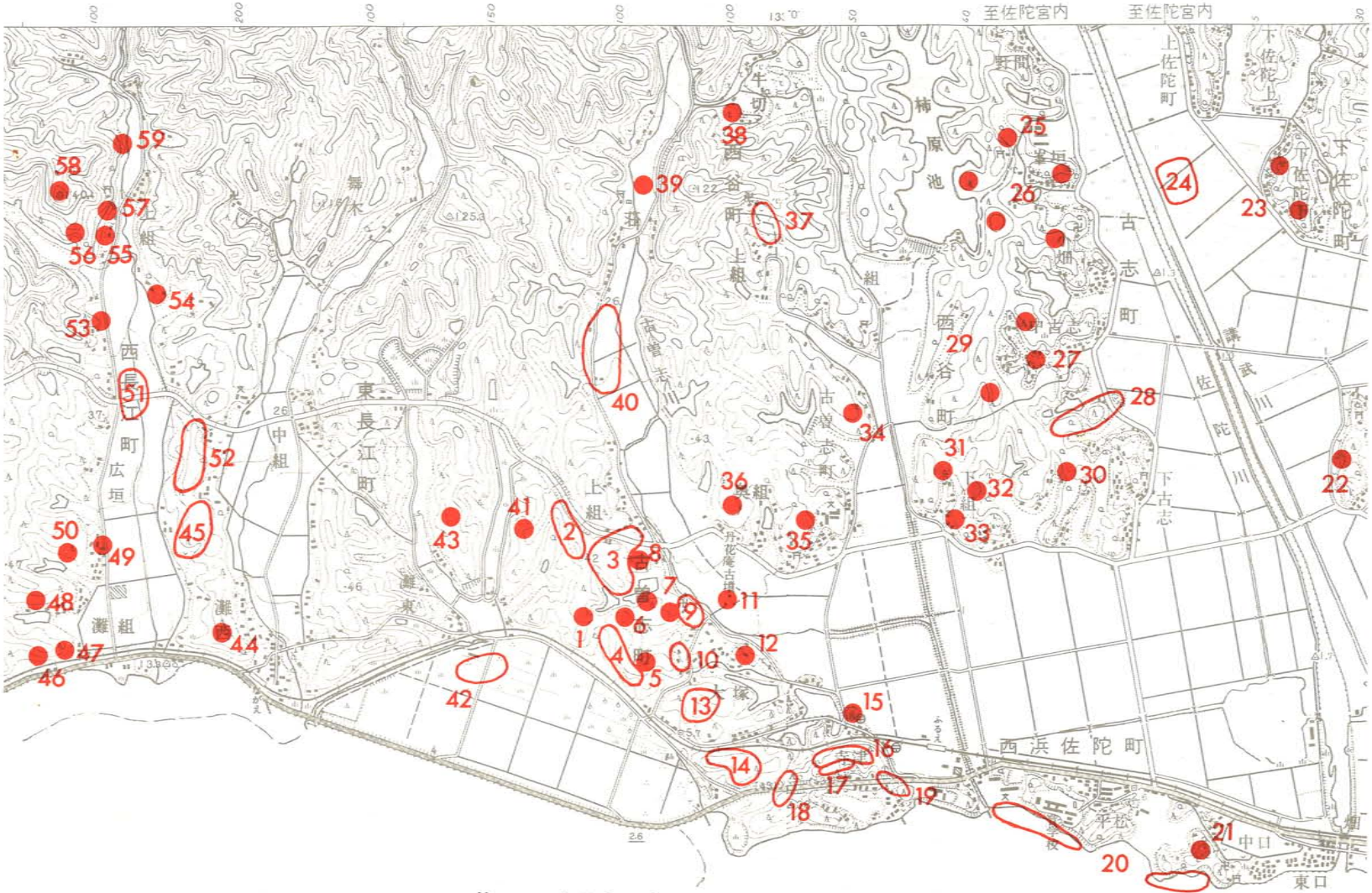
このように，古曽志町周辺地域は生活環境に適していると考えられるものの集落遺跡等は少なく，国指定史跡の丹花庵古墳をはじめ，古墳のほうがよく知られている。これまでに判明している最古の遺跡は東長江町の後谷遺跡で，旧石器時代の遺跡は本遺跡群の調査まで周辺では知られていなかった。後谷遺跡は，縄文時代早期末の土器が出土する宍道湖底の遺跡で，西浜佐陀町の宍道湖岸でも同様に縄文土器が採集されている。縄文時代中期から弥生時代にかけての遺跡も未発見である。古墳時代になると，先の各低丘陵に盛んに古墳が築かれるようになり，特に中期には大形古墳が集中する。古曽志遺跡群の東側の水田中には，出雲でも有数の方墳である丹花庵古墳がある。一辺47m，高さ3.5mの二段築成の古墳と考えられており，葺石や埴輪を有する。墳丘中央部には，凝灰質砂岩製の長持形石棺が埋置されており，蓋石の二段の鋸歯文は特に有名である。円墳では，松江市の西端に近い大垣町に，直径54m，高さ９mの県内最大の大垣大塚１号墳があり，やはり二段築成の墳丘に葺石，埴輪を廻らしている。北東側の長さ36m×33m，高さ5.5mの２号墳（方墳）とともに古墳群をなしている。丹花庵古墳の南側丘陵上の古曽志大塚１号墳は，大垣大塚１号墳につぐ県内第二の規模の円墳で，直径47m，高さ6.4m，二段築成で葺石，埴輪も認められる古墳である。そのほか，この大塚地区には一辺14m，高さ３mの小規模な方墳ながら，主体部に割竹形石棺を持ち，革綴短甲の破片等が出土した大塚荒神古墳があり，古曽志平野北側の古志丘陵にも直径30m，高さ4.8mの茶臼山１号墳（円墳）がある。また，古曽志大塚１号墳の南側，一畑電鉄の線路を挟んだ隣の丘陵の釜代古墳群には，かつてその西端にかなり大形の前方後方墳ないし前方後円墳が存在していたようだが，採土事業によって現在は消滅してしまっている。

古墳時代後期になると，古曽志町周辺では大形の古墳は築かれなくなり，かわって，古曽志町神主塚の全長19mの神主塚古墳のような比較的小形の前方後方墳や横穴墓が出現する。中期古墳同様，

後期古墳の調査例も少ないことから，埋葬施設については不明確なことが多いが，７世紀代には寺津古墳のように切石の小形石室を有するものもある。横穴墓も現在までのところでは西浜佐陀町寺津地区に集中しており，寺津横穴群や北小原横穴群，寺津停留所裏横穴等がある。特に北小原横穴は，松江市周辺に特徴的に分布する石棺式石室を模したと考えられる整正家形の玄室内に，組合せの家形石棺を２基並べ，玄門を「卌」の浮き彫りのある板石で閉塞した精巧なつくりの横穴である。なお，この地域の前方後円墳としては，東長江町に全長約34ｍの山崎１号墳が確認されているのみである。

古墳時代以降の明確な集落跡というものも判明していないが，奈良時代以降の遺物も含めた須恵器，土師器の散布地には，古曽志町で古曽志導栄寺遺跡・古曽志幸神遺跡，古曽志川上流の畑成遺跡・荘成遺跡，西谷町の西谷上組遺跡，西長江町では広垣遺跡，原廻谷遺跡などその数も多い。最近では，『出雲国風土記』意宇郡の条の国引きの説話に出てくる「狭田国」が，鹿島町から当地域を中心として島根半島中央部に存在したと考えられるようになり，こうした遺跡も古墳群とともに注目されつつある。この「狭田国」は律令時代になって，佐陀川を境に東の島根郡と西の秋鹿郡に分断され，当地域も秋鹿郡の神戸里になるが，奈良時代の重要な遺跡として注目されるのが，西長江町灘組の常楽寺瓦窯跡である。この長江地区は，良質な粘土の採取されるところがあり，江戸時代には松江藩の奨励で瓦が焼かれ，ごく最近まで瓦窯業の営まれていたところで，今回の発掘調査でも須恵器の窯跡を確認したことから，古代から窯業の盛んな地域であったといえる。常楽寺瓦窯跡で採集された瓦には，出雲国分寺軒丸瓦Ⅰ類（国分寺創建期の瓦），四王寺Ⅱ類軒丸瓦，同Ⅰ類軒平瓦等があり，これらは当瓦窯跡と意宇平野の諸寺との結びつきを示す資料で，当時の当瓦窯で焼かれた瓦は宍道湖から大橋川を下り，馬潟町手間あたりから国分寺方面へ運び込まれたと考えられる。西浜佐陀町古江中学校にも採集地不明ながら，国分寺軒平瓦Ⅱ類の瓦当が保管されており，時期的には前の瓦類とほとんど変わらないところから，この資料も常楽寺瓦窯跡で採集され，中学校に持ち込まれた可能性が強い。なお，佐陀川流域や古曽志川流域あるいは西長江町の谷部で，かつて条里制の痕跡が残っていたが今は消滅している。

中世に至ると遺跡はほとんど判明しておらず，わずかに古墓や山城が知られているのみである。西長江町桜谷の標高130ｍの山頂には，岡本町秋葉山にある鰐尾山城の出城といわれている西長江要害山城跡があり，谷を挟んで東側の丘陵北方には二つ山城跡がある。また，西浜佐陀町満願寺の裏山には満願寺城跡がある。この山城は，尼子経久に臣従した湯原信綱が1521（大永元）年に築城した平山城で，宍道湖と東の佐太水海の間に突き出した丘陵の最先端に位置し，宍道湖北岸の制海権を握る拠点であったといわれており，毛利元就の尼子討伐の際にも，この城をめぐってはげしい攻防戦が繰りひろげられたという記録がある。



第３図　古曽志遺跡群の位置と周辺の遺跡

第１表　古曽志遺跡群と周辺の遺跡一覧表

地図番号	遺跡名	備考	地図番号	遺跡名	備考
1	古曽志大谷古墳群	前方後方墳１，方墳３	31	奥屋敷裏山古墳	方墳，箱式石棺
2	古曽志善坊遺跡	須恵器，石器，加工段 方墳１(礫床)，残欠１	32	小笹保宅北方古墳	消滅
3	古曽志平廻田遺跡	掘立柱建物跡群 須恵器窯跡	33	屋敷古墳	方墳２，刀
4	古曽志清水遺跡	須恵器，土壙，石器	34	寺ヶ廻古墳	方墳
5	古曽志姥ヶ谷古墳群	方墳５，家形埴輪	35	古曽志下組古墳	
6	古曽志寺廻田西古墳群	方墳１，不明１	36	古曽志奥組古墳群	２基以上
7	古曽志寺廻田東古墳群	方墳５	37	西谷上組遺跡	散布地，須恵器
8	古曽志平屋敷古墳群	方墳２	38	長瀬金蔵畑名中古墳	半壊，円墳か
9	古曽志導栄寺遺跡	散布地，須恵器，土師器	39	畑前遺跡	散布地，須恵器
10	古曽志幸神遺跡	散布地，須恵器，土師器	40	荘成遺跡	散布地，須恵器
11	丹花庵古墳	国指定史跡，方墳(一辺47m) 長持形石棺，埴輪，葺石，剣片	41	細原尻古墳群	方墳５
12	大塚荒神古墳	方墳，革綴短甲片，埴輪	42	後谷遺跡	縄文土器，須恵器，石器
13	古曽志大塚古墳群	円墳１(直径47m)，方墳６	43	後谷古墳	方墳
14	釜代古墳群	方墳２，不明１	44	山崎古墳群	前方後円墳１，方墳１
15	神主塚古墳	前方後方墳	45	坂本古墳群	方墳４
16	寺津古墳群	方墳，円墳11	46	西長江遺跡	散布地，須恵器
17	寺津横穴群	２支群５穴，整正家形，石床	47	常楽寺瓦窯跡	国分寺瓦，四王寺瓦
18	北小原横穴群	６穴以上，大刀，金環 他	48	扇谷池北遺跡	須恵器
19	寺津停留所裏横穴	四注式妻入	49	広垣遺跡	須恵器
20	宍道湖底遺跡	縄文土器	50	原廻谷遺跡	土師器，須恵器
21	満願寺城跡	平山城	51	西長江地区条里制遺跡	消滅
22	船津横穴	須恵器	52	坂本北古墳群	方墳８
23	皆美山古墳群	円墳２，須恵器	53	岩屋古墳	原形不明，横穴式石室 須恵器
24	佐陀川流域条里制遺跡	消滅	54	西長江山崎古墳	方墳か
25	稲寄遺跡	須恵器，土師器	55	下垣井戸の上古墳	
26	茶臼山古墳群	円墳１，方墳４	56	下垣古墳	円墳，須恵器
27	中古志遺跡		57	塚さん古墳	墳形不明，横穴式石室
28	ちょう塚古墳群	方墳２，不明１	58	西長江要害山城跡	
29	中古志古墳群	方墳２	59	宗垣古墳	石室
30	下古志古墳	方墳１			

第5章　調査の結果

第1節　古曽志善坊遺跡

古曽志善坊遺跡は造成予定地の北側に位置し，北から伸びてきた尾根が南東と南西の二方向に分かれる部分に相当する。北東側には谷に沿って宍道湖北部広域農道が走っている。尾根上を中心に調査区を6ヶ所設定して調査したが，西から2番目と3番目からは各々古墳1基が発見されただけなので，両古墳は古曽志善坊古墳群として項を分けることにした。そして北端の調査区をⅠ区，南端をⅢ区，残りをⅡ区として以下に報告する（第4図)。

(1)　Ⅰ区の調査

Ⅰ区は二股に分かれる尾根の基点となるところで，調査前には南西方向の尾根に沿って平坦面が存在していた。調査区はこの尾根に合わせて南北に細長く設定し，南東部を一部拡張した。そして発掘調査の結果，尾根に沿った大がかりな地山の加工や溝状遺構，調査区南端の竪穴住居跡状遺構等を検出した（第5図)。

溝状遺構　Ⅰ区の中心的な遺構で，南西側の尾根を大規模に加工したのち，掘り込んでいる。付近は，表土下20～30cmまでは調査区全域で黄褐色粘質土が堆積するが，それから下については場所によって様相が大きく異なっていた。まず，尾根頂部から西側斜面では，黄褐色粘質土の下から乃木層と呼ばれている泥岩層の地山が検出され，地山は尾根頂部を幅4m程度残してその両側を削り，西側は高さ1.4～1.5mの段差で幅広の平坦面となるが，東側は2.8～3mと段差が大きくなっている。しかも，斜面の屈曲部あたりからさらに深さ1.2～1.3mの溝状の遺構が断面V字状に掘り込まれており，その長さは約29mにも達している。現存する溝状遺構の幅は約2.7mで，底部はさらに3条ないし4条の細い溝に分かれており，各小溝の幅は0.6～1m，深さは20～50cmである。これらの溝は南西に向かって傾斜しており，南端では小溝が集まって太い1本の溝のようになり，しかもL字状に折れ曲って東側谷斜面へと抜けている。これらの溝状遺構は，尾根を直角に越えるようにしてつけられた別の溝状遺構で一旦途切れるが，その北側でも2条程度の溝として残っていた。ただし，その南側はやや凹み加減ながら比較的平坦面が広がっていた。

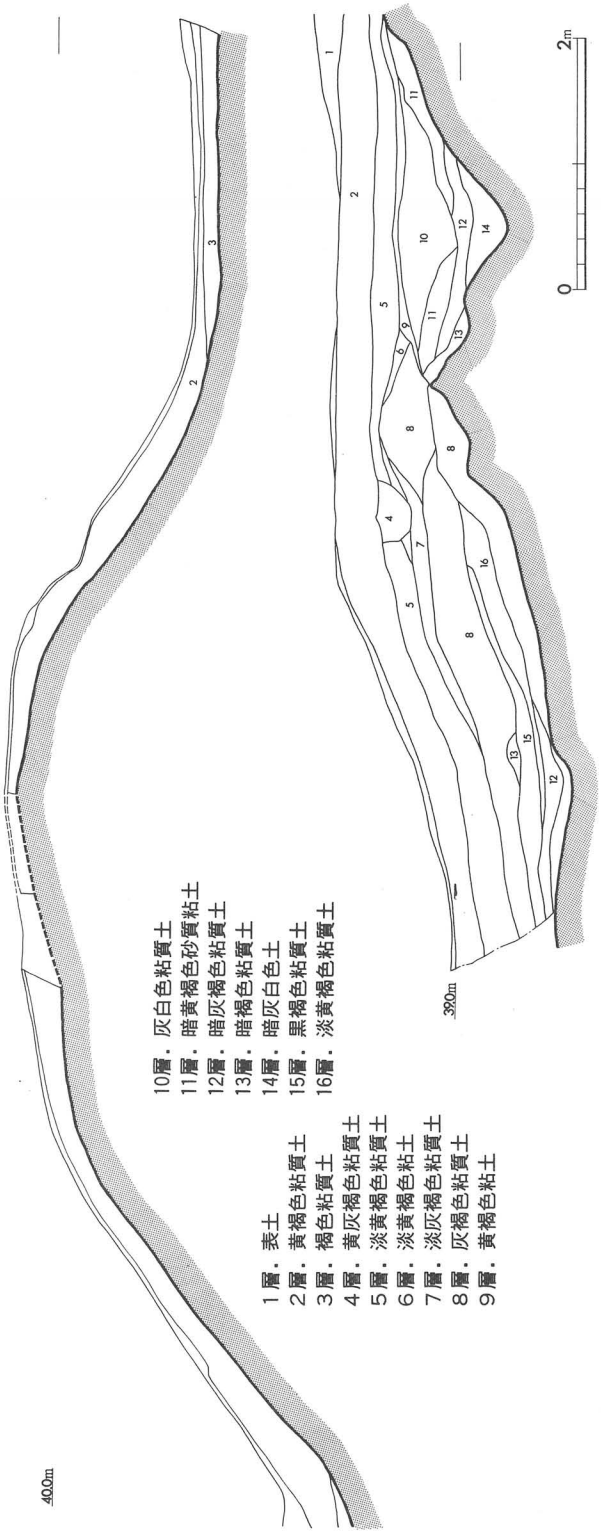
溝状遺構内の土層をみると，全体的に灰白色ないし黄褐色の粘質土が堆積していたほか，底面付近には，炭化物粒を多く含んだ暗褐色粘土層が認められた。そして，溝状遺構のほぼ全域に散在する形で，この粘土層から須恵器片が出土した。

第4図　古曽志善坊遺跡・古曽志善坊古墳群調査区配置図

第5図　古曽志善坊遺跡Ⅰ区地形測量図

これらの溝状遺構の東側には，さらにもう一段落ち込みが認められ，土層観察の結果，前の溝状遺構内に堆積した土層の一部から新たに削り込まれていることが判明した（第6図）。しかし，落ち込みの東端は調査区内では確認できず，これがやはり幅広の溝状のものになるか，このまま加工段風のものになるかは判断できなかった。なお，この落ち込みの中央あたりにも，長さ約7mと6mの短い溝状遺構が一列検出された。

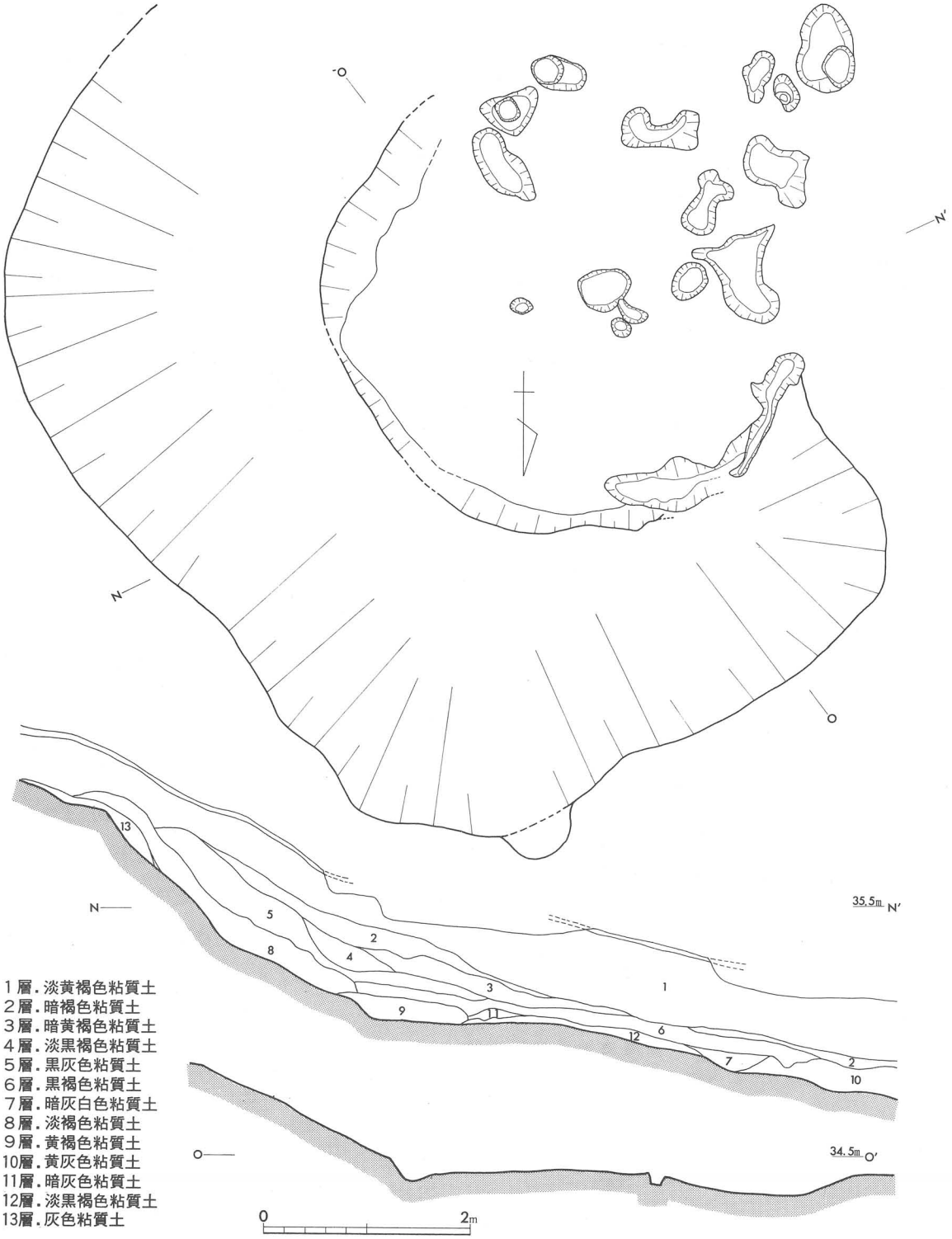
須恵器　遺構内の暗褐色粘質土中から須恵器片が多数出土した。甕片が大半を占め，その他に小形の壺，短頸壺等の破片も認められたが，図化できたのは第8図の3点のみである。1・2は小形壺あるいは提瓶か平瓶の口縁部と考えられるもので，頸部が直線的に開き，端部は一度大きく屈曲したのち再び立ち上がる。上端の直径8cmと7cmで，内外面ともに回転ナデ調整である。3は長頸壺の底部で，直径12.7cm程度の高台が付く。胴部外面はヘラケズリののち回転ナデ，高台内側には回転糸切り痕が残る。



第６図　古曽志善坊遺跡Ⅰ区土層断面図

竪穴住居跡状遺構　谷の斜面を長さ約8.5m，幅６mのやや長方形に，大きく緩やかに削り取り，さらにその底を直径約4.6mのほぼ円形に掘りくぼめている。深さは30cmで，北西側の壁の下に約2.5mにわたって幅20～30cm，深さ約10cmの溝の認められるところがある。床面は山手側はほぼ水平で，中央付近から谷に向けて徐々に傾斜している。その若干傾斜した部分から，不定形のピット状の凹みが10数個検出された。いずれの凹みも浅く，最も深いものでも15cm程度で，中には黒褐色粘質土が溜っていた。南端では壁はなく，床面に遺物は全く発見されなかった。谷斜面の水の集まりやすいところで，ピット群には柱穴列のような整った配列は認められないが，竪穴住居跡状の遺構と考えられる。

なお，遺構流入土の暗褐色土中から，溝状遺構内でも出土した須恵器甕片などが少量出土したほか，安山岩質の石材を利用した縄文時代の小形の石匙やフレイクも１点ずつ出土した。出土石器類については第１節の最後のところでまとめて報告する。

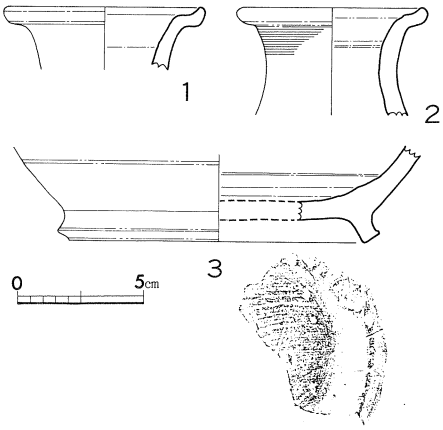


第７図　古曽志善坊遺跡Ⅰ区竪穴住居跡状遺構実測図

(2) Ⅱ区の調査

東向きのなだらかな斜面に位置し，試掘調査の時に遺物を検出した２ヶ所について調査区を設定した。

Ｎ区は，谷の自然傾斜面に暗褐色土の遺物包含層を検出したが，遺構は谷の肩に相当するところに，斜面を東に下るように幅0.6～１ｍの浅い溝状の遺構が存在したのみである。出土遺物はこの溝状遺構にはなく，遺物包含層から須恵器坏類のほか，縄文時代と考えられる石斧１，石鏃１，敲石１がある。



第８図　古曽志善坊遺跡Ⅰ区暗褐色粘質土出土遺物

Ｓ区では，表土下40～50cmで赤色粘土の地山に達し，この地山面に遺構が掘り込まれていた。検出した遺構は，調査区南端の溝状遺構１と，その北側の斜面凹部につくられた加工段６である。加工段は斜面上方から第１，第２……第６加工段とした（第９図）。

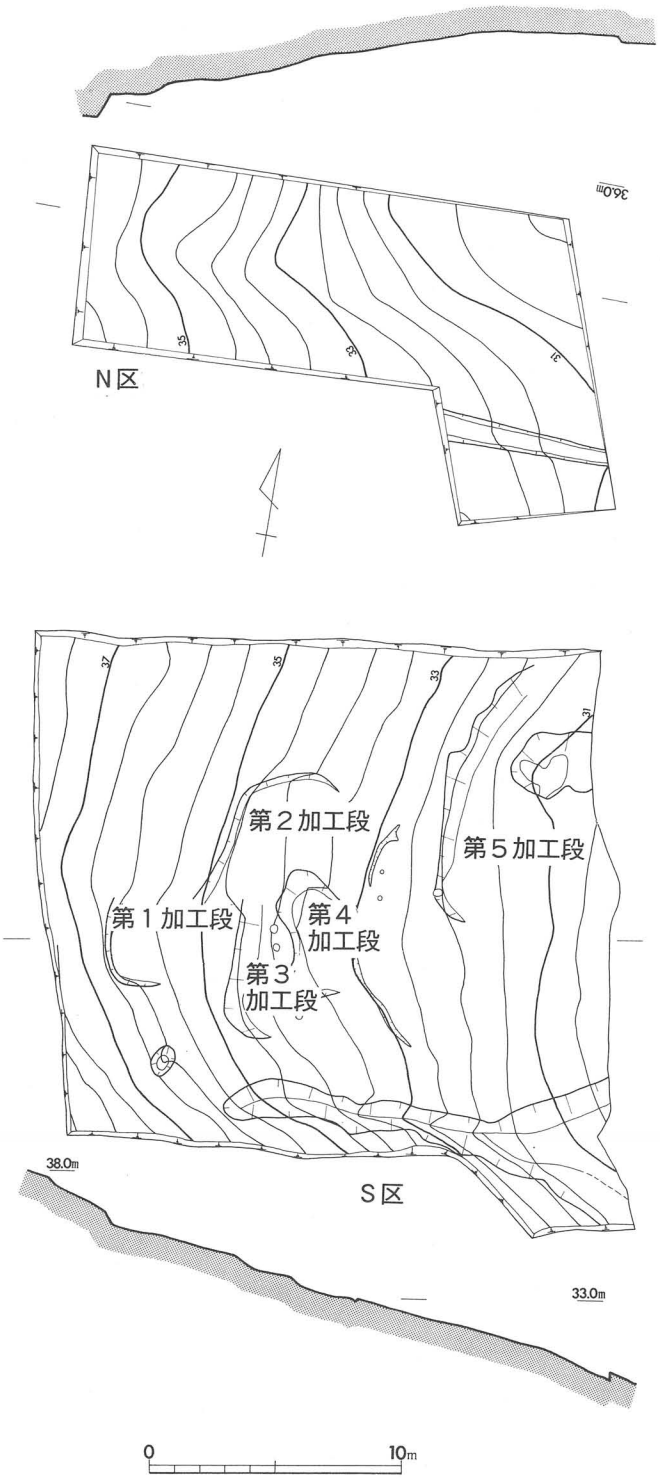
加工段　第１加工段は，幅２ｍ程度の加工段で，北側を試掘トレンチですでに失っており，現存長2.6ｍである。平坦面にはピットや遺物は検出されなかった。南東のほぼ同じレベルの斜面には平面卵形の土壙があり，長径1.2ｍ，短径0.6ｍ，深さ約30cmを測る。遺物は出土していない（第10図）。第２加工段は長さ約６ｍ，幅２ｍ弱で，第３・第４加工段と床面の高さを違えながら接近している。南端の壁は不明だが，中央付近で強くくびれる。ほぼ垂直に立ち上がり，高さは30cm前後を測る。第３加工段も長さ約６ｍ，平坦面幅２ｍ弱であるが，壁はかなりなだらかに落ちている。平坦面も若干傾斜があり，壁からやや離れた位置にピット６個を検出した。いずれも直径30～40cm，深さ25cm程度で，１個を除いて一列に並ぶが，壁の方向と合わず，これだけで建物が立っていたかどうかは判断できない。第４加工段は，これらのピットのすぐ下にあり，平坦面の長さ4.7ｍ，幅は約２ｍであるが，奥壁中央部が張り出し，北側端部も丸みを帯びている。床面ではピット等は検出されなかった。第５加工段は，明確な段差こそ認められなかったものの，長さ4.9ｍと3.4ｍの２本の溝が弧状に廻るものである。溝幅20cm，深さ10～15cmで，２本の溝は約1.8ｍの間隔で離れている。溝の内側には３個のピットが一列に並んでおり，端から端までちょうど２ｍである（第12図）。第６加工段はⅡ－Ｓ区のうち最も長いもので，やや弧を描く平坦面は長さ約10ｍを測る。南端に３個のピットを検出したが，建物跡等に伴うものとは考えられない。平坦面北半には一辺２ｍ×2.6ｍの長方形に若干凹むところがあったが，内からは何も発見されなかった（図13図）。

溝状遺構　Ⅱ区南端には，斜面を斜めに下っていく溝状遺構を検出した。全長約13ｍで，下端は

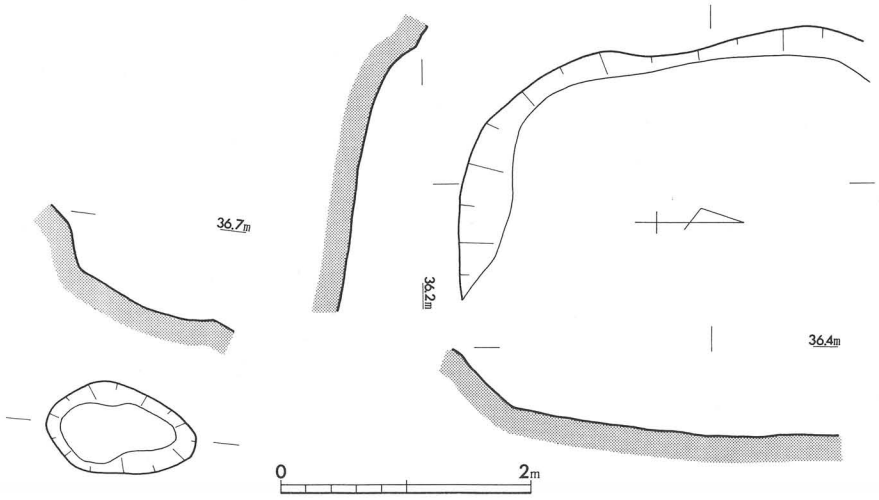
裾広がりになって自然傾斜とほぼ同じになる。底面は上半では平らな感じで，下半になって丸く仕上げられる。この溝は北側各加工段よりも一段高い位置にあり，南側尾根部からの水の流入を防ぐ機能をもっていたと考えられる（第14図）。

第２加工段から第５加工段にかけて，各加工段に流れ込むように暗褐色土が堆積しており，その中から須恵器片多数と土師器片が出土したが，土師器には図化できるものがなかった。

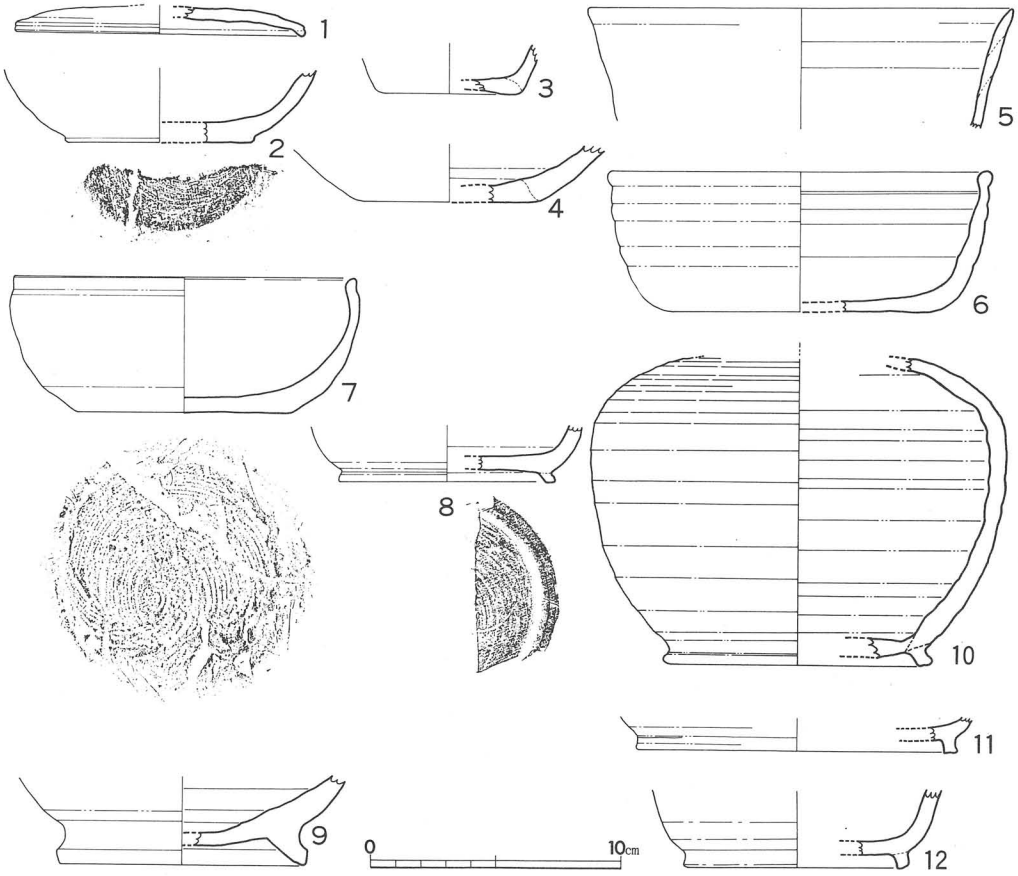
出土遺物　Ⅱ区で出土した遺物は，いずれも暗褐色の遺物包含層からのものであるので，ここでは一括して報告する。出土須恵器は蓋坏・壷類が中心である（第11図）。１は坏蓋で，口縁端部が若干立ち上がるが，内面の段はほとんどないものである。つまみ部を欠損し，復元口径11.5cmである。内外面とも回転ナデ調整だが，内面はやや摩滅して表面が滑らかになっている。２～７は坏身である。３は小形で体部がやや直立ぎみなところから，あるいは小形壷の



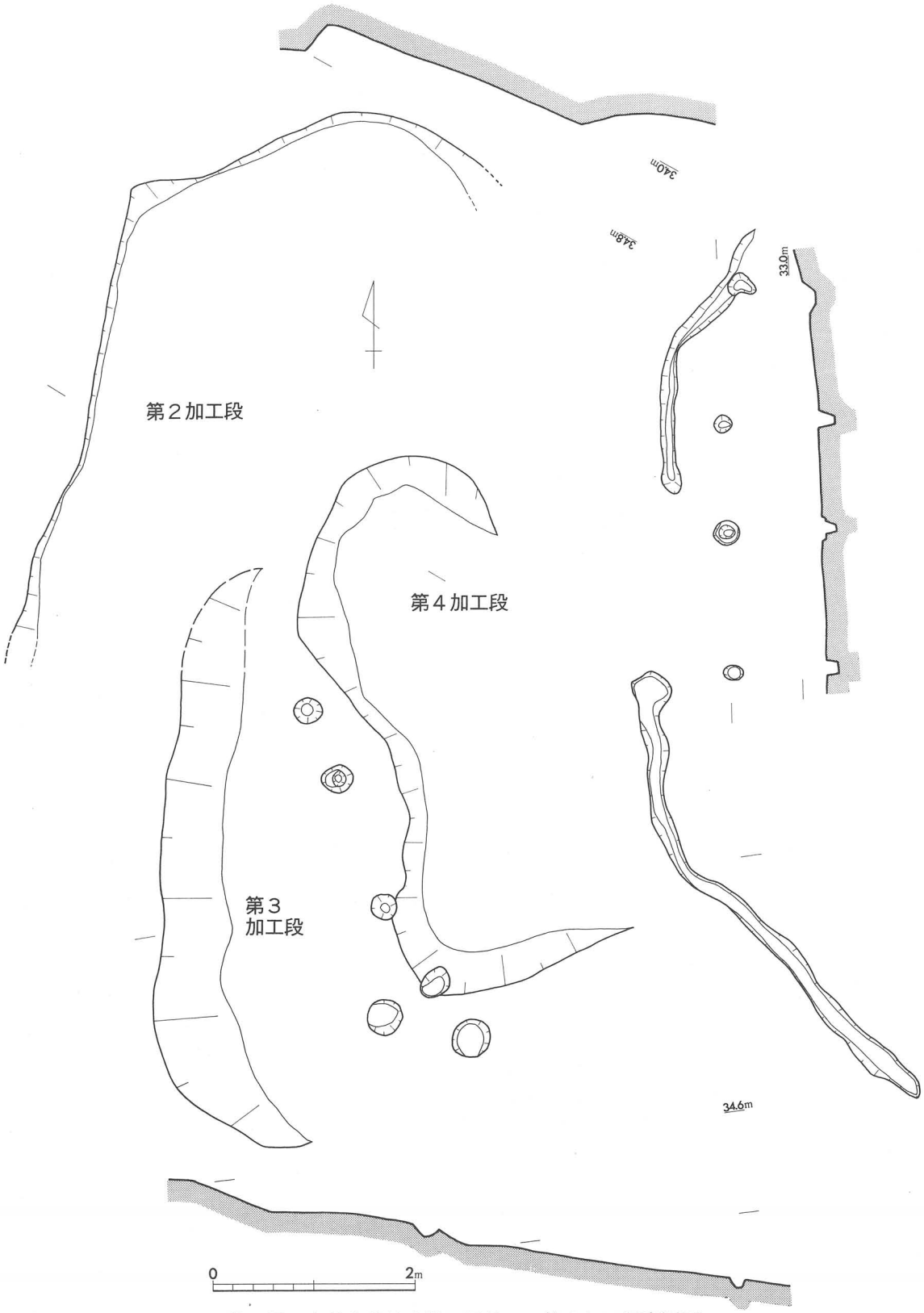
第９図　古曽志善坊遺跡Ⅱ区地形測量図



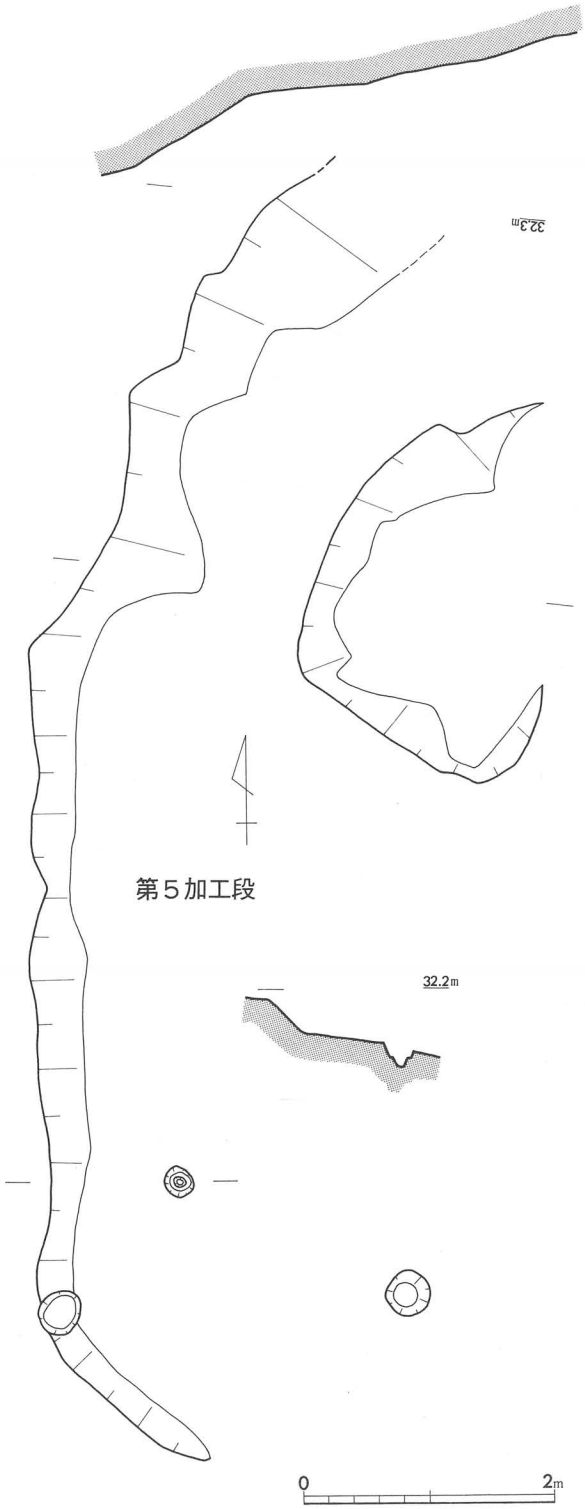
第10図　古曽志善坊遺跡Ⅱ区第１加工段・土壙実測図



第11図　古曽志善坊遺跡Ⅱ区暗褐色土出土遺物(6･12はＮ区，他はＳ区出土)



第12図　古曽志善坊遺跡Ⅱ区第２～第４加工段実測図

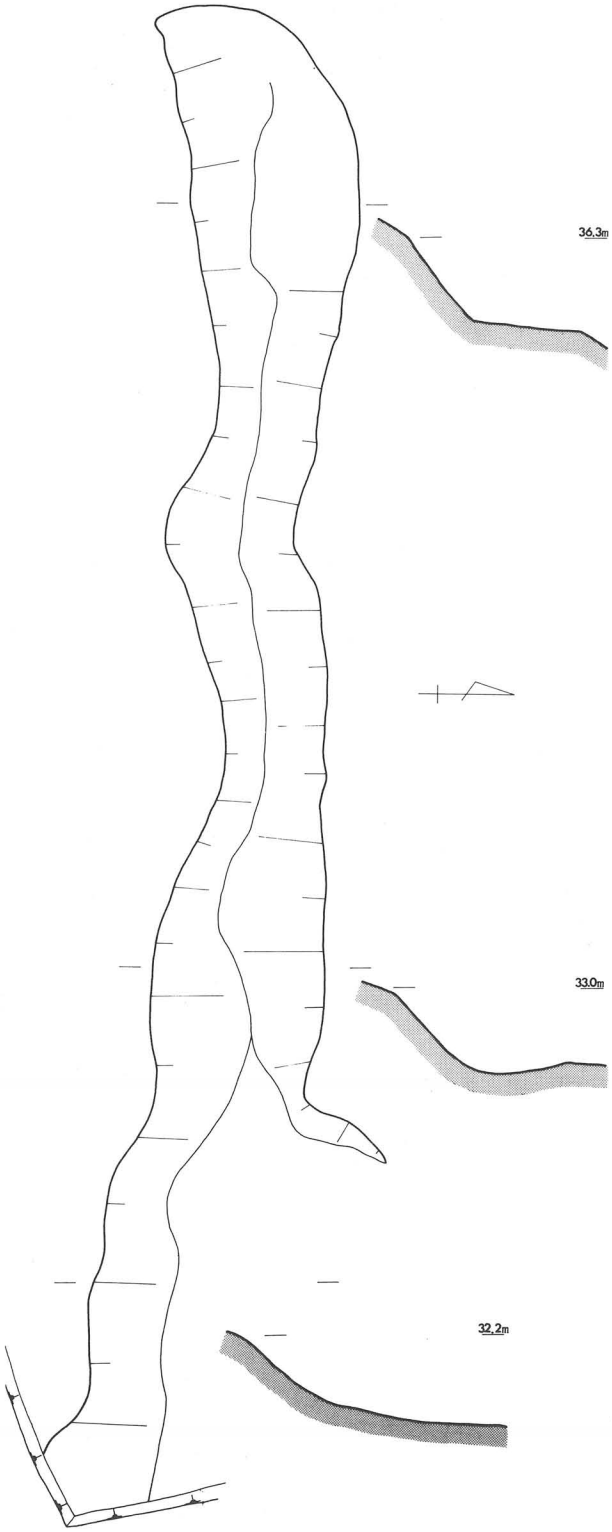


第13図　古曽志善坊遺跡Ⅱ区第５加工段実測図

底部かもしれない。５はやや大形の坏で体部は直線的に立ち上がる。口縁径17.0cmを測る。７は口径13.6cm，器高5.4cmの坏で，体部は丸く立ち上がり，口縁は一度内傾したのち直立する。内外面ともに回転ナデ調整で，底面は回転糸切り放し痕が残る。６も同様の坏だが器高が高く，体部の立ち上がりが７よりも直線的である。口縁端部は丸く収める。底面は回転糸切り後ナデ調整を行う。8・11・12は高台付坏の底部片である。いずれも回転糸切り後，高台を底部外縁近くに貼り付けたもので，高台は端部が外側に開くタイプである。高台の高さは８で３㎜，11・12で５㎜である。

10は長頸壷の胴部で，現存高12.2cm，胴部最大径16.6cm，高台径10.7cmである。外面全体にヘラケズリを施すが，肩部付近はケズリ幅を狭くして細く丁寧に作り，肩部より下はやや幅広のヘラケズリを施したのちさらに回転ナデ調整を行う。底部外面も回転ナデ調整が加わっている。９も長頸壷の底部と考えられるもので，丸みを帯びた底部外面に太めの高台を貼り付け，端部外面を垂直に立てて，鋭角な端部を作り出している。復元高台径9.8cmを測る。

これらの須恵器はいずれも８世紀代のものと考えられ，7・12以外はⅡ－Ｓ区加工段に堆積した暗褐色土から出



第14図　古曽志善坊遺跡Ⅱ区溝状遺構実測図

土したものである。したがって，これらの加工段との直接的なつながりを示すものではないが，各加工段の作られた時期をおおよそ推定するに足る資料である。

(3)　Ⅲ区の調査

遺跡の南端の調査区で，南東に伸びていた尾根が標高32m程度まで一旦低くなるところに位置し，調査区内は東と南に向く傾斜地である。調査区全体に厚さ20cm程度の暗褐色粘質土が広がり，その下には地山土に近似した明褐色の粘質土が堆積する（第16図）。両層を除去すると，赤色ないし黄褐色の地山が現われ，これに掘り込まれた形で土壙群と加工段，溝等を検出した（第15図）。

土壙　調査区のほぼ全域で合計９個の土壙を出土した。SK01は標高37.5mほどの南向き斜面にあり，長さ約2.7m，幅1.9mを測る。加工段風の浅いもので，北側から緩やかに落ち込み，底面は平らになる。南側はほとんど残っていない（第17図）。炭化物を多く含む黒色土および暗褐色土が堆積し，地山直上の明るい黄褐色土中から須恵器坏片が出土した。細片ですべて接合しても完全な形の半分にも満たないが，復元すると口縁径10.8cm，器高3.2cmで，体部がまっすぐ外に開いた形の坏

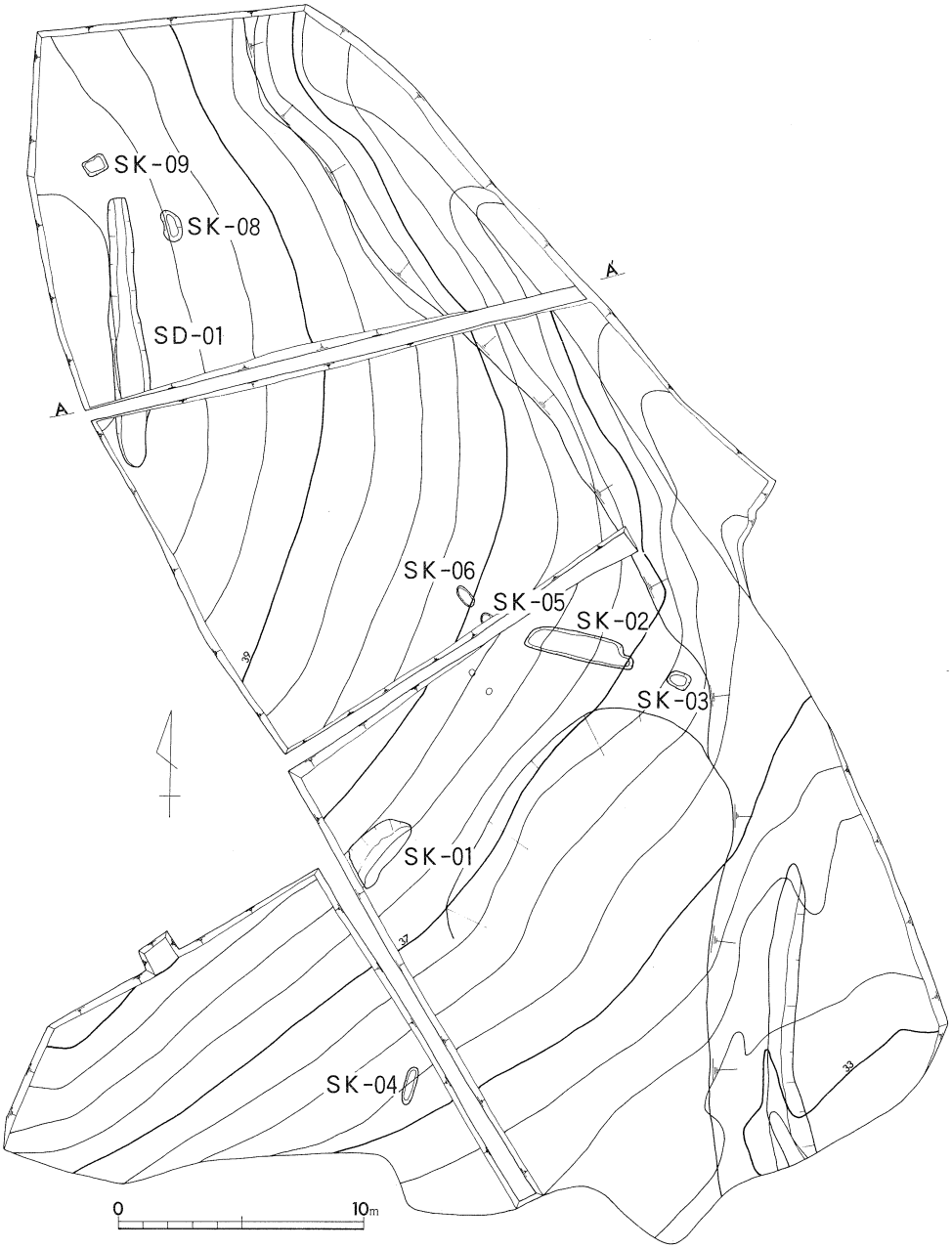
である（第21図２）。内外面ともに回転ナデ調整で，底部外面は切り放し後ナデを施す。

SK02はSK01の東側に，等高線に直交するように掘り込まれた，全長4.5m，幅1.1mの細長い土壙だが，深さ５～６cmの浅いものである。底面は全体的に平坦で，土壙内には暗褐色土が堆積していた。堆積土中から須恵器片・土師器片が出土したが，いずれも細片である。SK03はSK02の斜面下にある楕円形の土壙で，長径１m，短径0.65mである。堆積土はやはり暗褐色土で，須恵器・土師器の小片を含んでいる（第18図）。

SK04は南向き斜面に位置する小形の土壙で，長さ1.3m，幅40～50cm，深さ約25cmである。土壙内には３層の堆積層が認められたが遺物は出土しなかった（第19図）。SK05は試掘第15トレンチの北側にSK06と並んで検出した。直径約50cmの円形の土壙で，中には茶褐色土が堆積していた。SK06は全長85cm，幅35～40cmの長方形の土壙で，堆積土もSK05とよく似ている。SK05・06ともに遺物は出土していない（第20図）。なお，第15トレンチの西側でピットを２個検出した。トレンチですでに半分は失われているが，どちらも掘り方円形で，直径35～40cm程度である。ピット内からは遺物は２点しか出土していないが，トレンチ周辺の遺構を覆っていた暗褐色土中から須恵器・土師器が多数出土している。第21図１・４・８がそれで，１は口縁径10.5cm，器高3.1cmの完形の坏である。直線的に外に開く体部は，外面上半と内面が回転ナデ，外面下半はヘラケズリののち回転ナデ調整を行う。外底面は切り離し後，不定方向にナデ調整を行う。４は蓋片で宝珠状つまみを欠損する。復元口縁径14.6cmである。口縁端部は断面三角形に小さく収めて立ち上がりがほとんどない。８は大形の皿で回転糸切り後，高さのある高台を張り付けたものである。口縁の立ち上がりは大きく外反しており，復元口縁径22.1cmを測る。８世紀代のものと思われる。

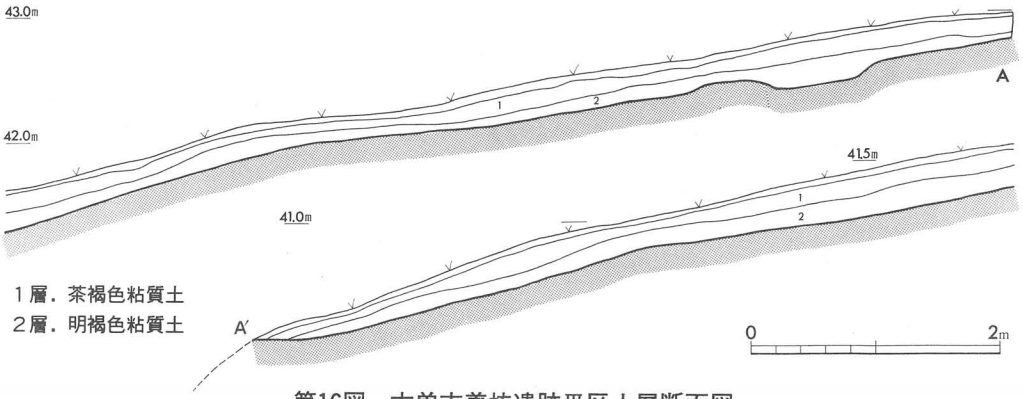
SK07は，暗褐色土が堆積していた溝状の落ち込みで，当初は数個の土壙が重なったものかと思われたが，調査の結果，すべてつながってしまった。SK08は尾根頂部にあり，全長1.55m，幅約0.6mの長楕円形の土壙である。深さ約15cmである（第22図）。これらの土壙はいずれも浅く，形態も均一でない。しかも出土遺物も極めて少ないため，何に使用されたのか，その性格を捉えることはできないが，包含層出土遺物からおおよそ８世紀代のものと考えられる。

SK09は，Ⅲ区北端の尾根頂部にあった土壙だが，前述した土壙群とは様相をやや異にする（第22図）。すなわち，平面プランは１m×0.8mの長方形で，底面は若干丸みを帯びている。土壙内には，底に２～３cmの薄い黄褐色土があるが，その上が炭化物層で，４～５cmの間層を挟んでさらにその上に焼土が堆積する。炭化物層，焼土層ともに他の土の混入はあまり認められず，二次的な堆積層とは考えにくい。しかし，土壙底面が焼けた痕跡は認められず，焼土と炭化物の間に間層を挟んでいる点も理解しにくい点であり，この土壙の性格も残念ながら特定できない。また，出土遺物もまったくなく，関連しそうな遺物包含層等もないことから，時期の限定も困難である。



第15図　古曽志善坊遺跡Ⅲ区地形測量図

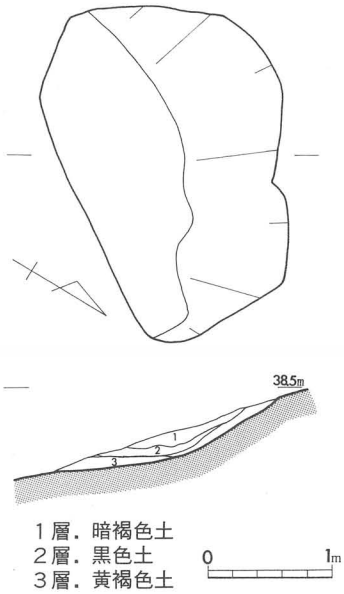
溝　尾根頂部よりもやや東に下がった緩やかな斜面に，等高線にほぼ沿うように地山を掘り込んでつくられた遺構で，全長約11m，深さ約15cmである（第22図）。溝北端は，意図的に塞き止めるかのように直線的な終り方をしており，逆に南端では底面が徐々に浅くなって自然に消滅していく感じである。溝幅は北端で約0.8m，中央部で1.4m，南端で1.2mを測る。全体に暗褐色土が堆積す



第16図　古曽志善坊遺跡Ⅲ区土層断面図

るが遺物は出土していない。しかし，堆積した土質の類似から，SK01～08とほぼ同時期と考えられる。

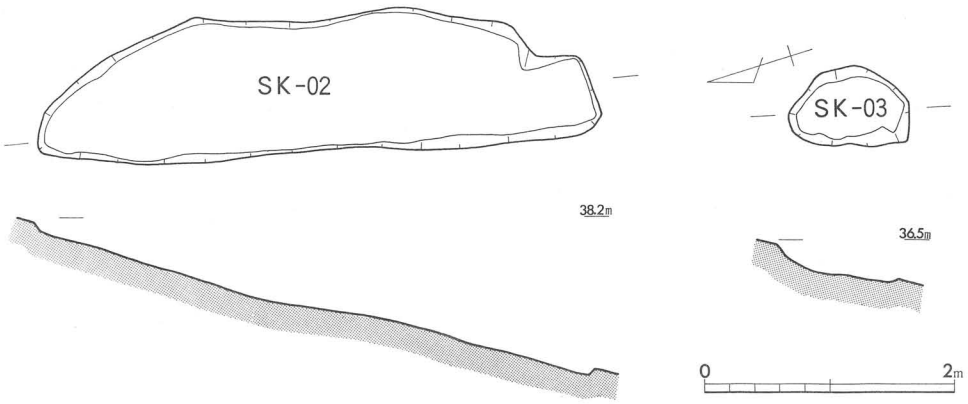
加工段　SK01～03の南側に長さ約12mにわたって，長楕円状に大きく加工した段が確認された。段の肩部は比較的明確だが，壁はあいまいで，斜面から底面にかけて緩やかに傾斜していき，斜面下側の境も明確でない（第15図）。暗褐色土・茶褐色土が堆積するが，遺物は発見されなかった。



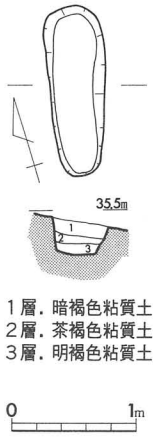
第17図　古曽志善坊遺跡Ⅲ区
SK-01実測図

(4) 石　　器

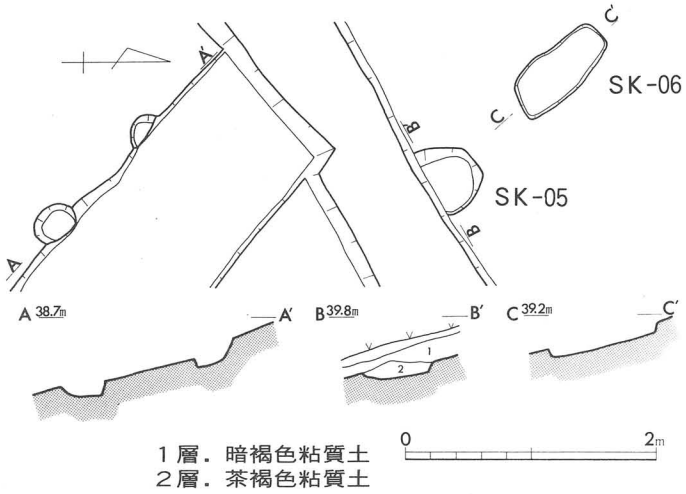
古曽志善坊遺跡の出土遺物は大半が８世紀代の須恵器・土師器類であったが，各区からそれらに混じって縄文時代の石



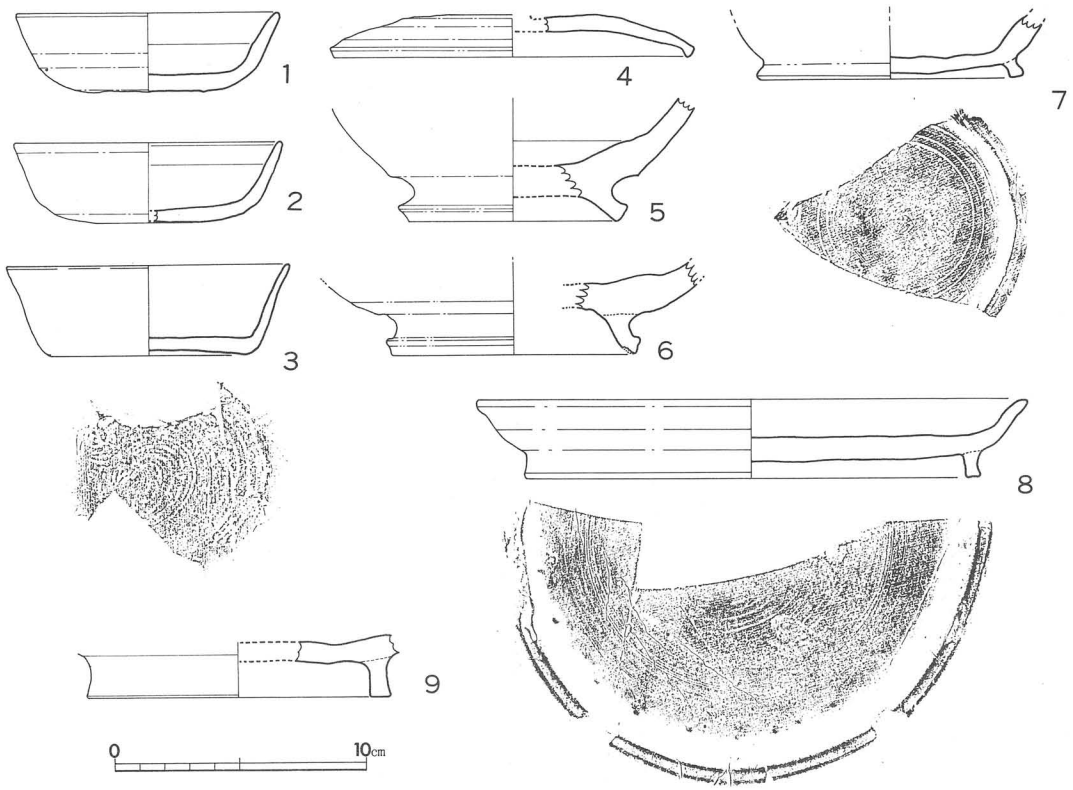
第18図　古曽志善坊遺跡Ⅲ区SK-02,03実測図



第19図　善坊Ⅲ区
SK-04実測図

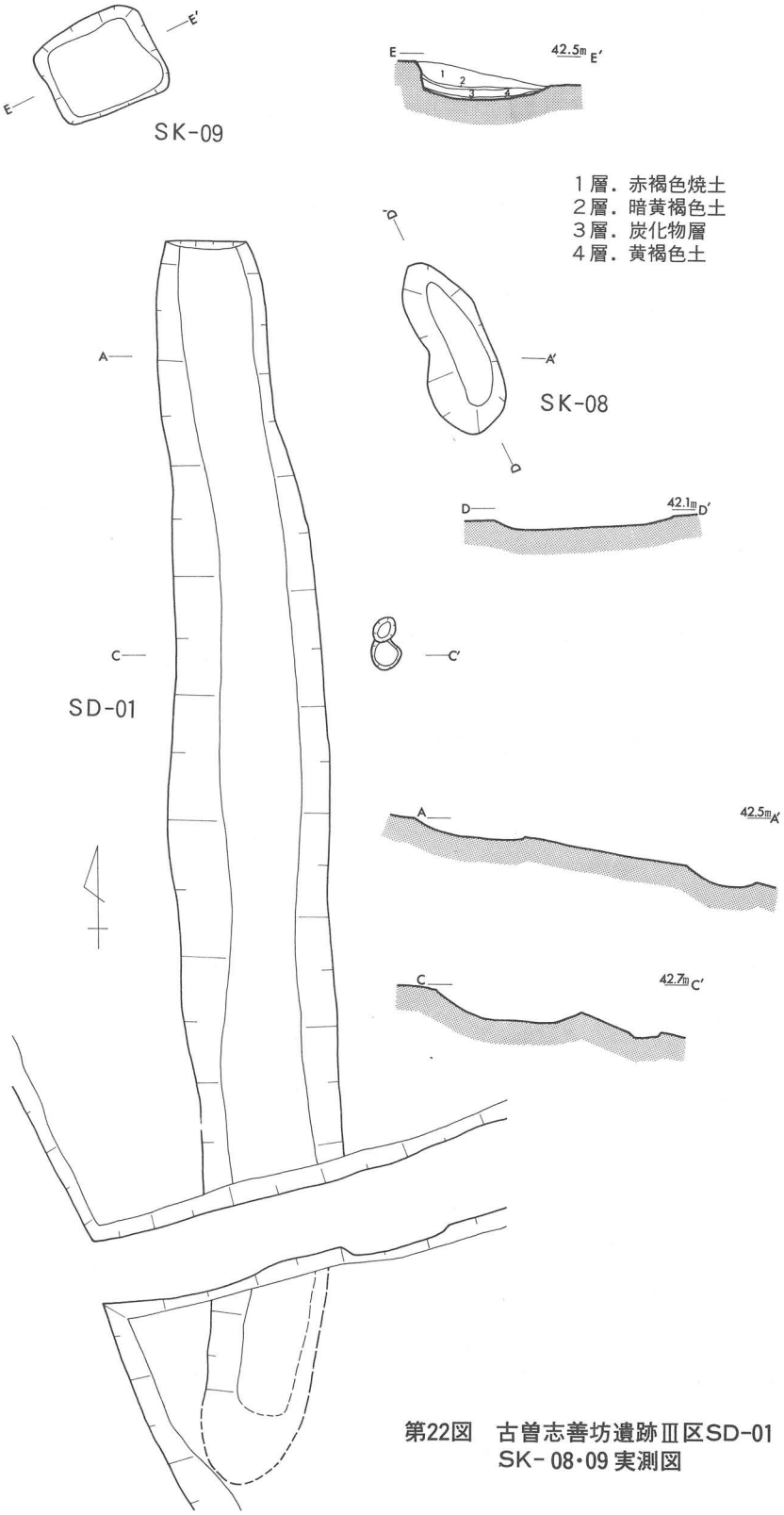


第20図　古曽志善坊遺跡Ⅲ区SK-05・06実測図



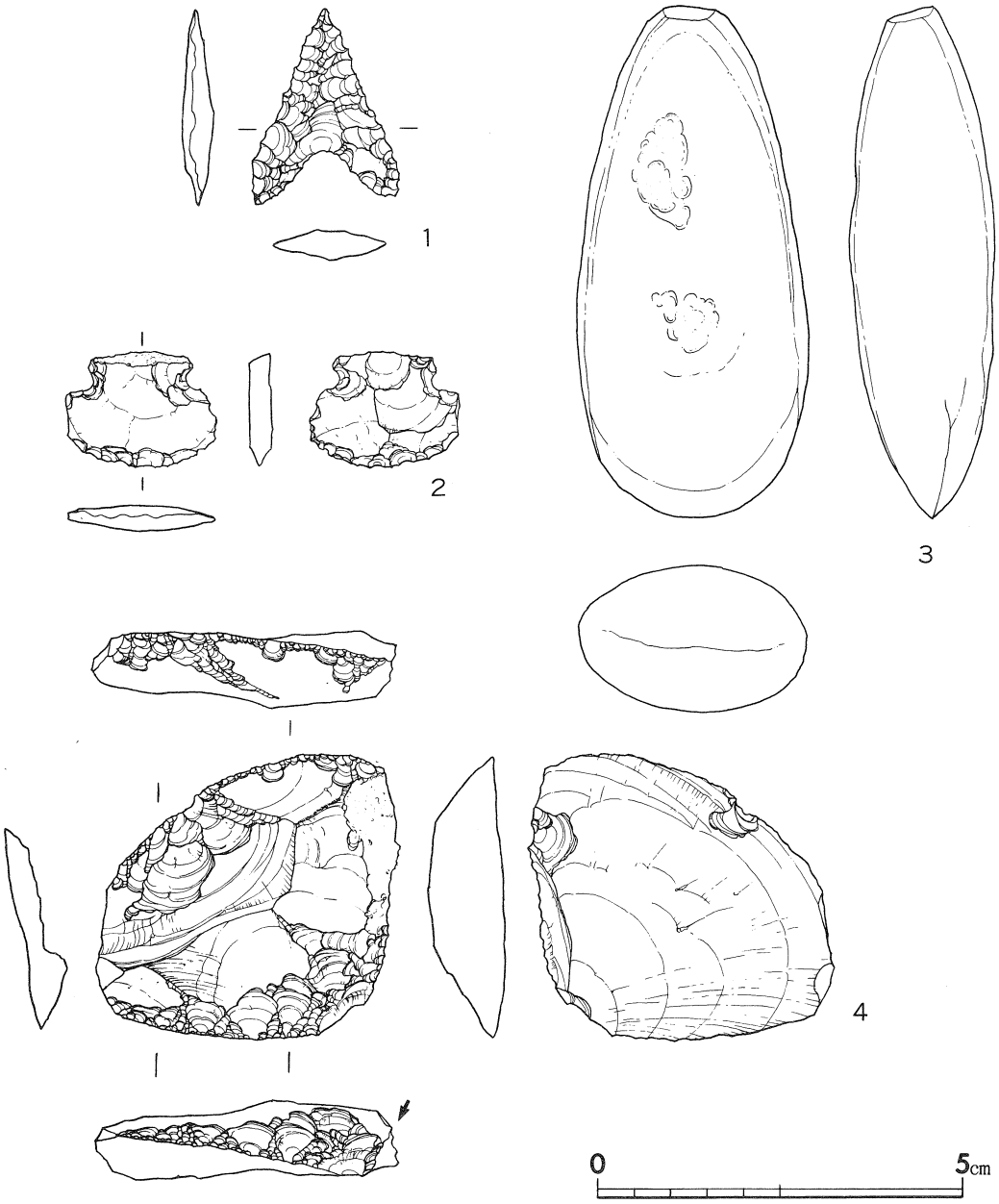
第21図　古曽志善坊遺跡Ⅲ区出土遺物（2はSK-01，その他は茶褐色粘質土出土）

器類が少々出土した（第23図）。1は黒曜石製の石鏃で全長2.7cm，最大幅2cmの完形品である。わたぐりが深く，両面ともに両側縁から二次加工を施し，主要剝離面が残っていない。2は安山岩製の小形の横形石匙で，全長3.3cm，最大幅2.5cmを測る。自然面の残る横長の剝片に，両面からつまみ部の刳り込みと刃部の調整を加えたものである。3は頁岩製磨製石斧で，全長11.2cm，最大幅5.1cmを測る。一部に敲打痕が残るが全面によく磨研されており，両刃の刃部には刃こぼれ状の欠損が認められる。4は黒曜石製のスクレイパーで，不定形の剝片



第22図　古曽志善坊遺跡Ⅲ区SD-01
SK-08・09実測図

の縁辺に加工を施して刃部としたものである。丸みを帯びた直角二等辺三角形を呈し，バルブの横に剝片の長さを調整するため背面側から切断した跡があり，背面側の同じ部分に石材の厚みをとるための加工を施している。二等辺の一辺には自然面が残り，もう一辺には全体に刃部加工が施されている。長辺には主要剝離の縁辺をそのまま刃として使用したところがある。刃部には全体的に細かな刃こぼれがあり，無調整刃部の背面の一部には使用による擦れ痕が観察される。



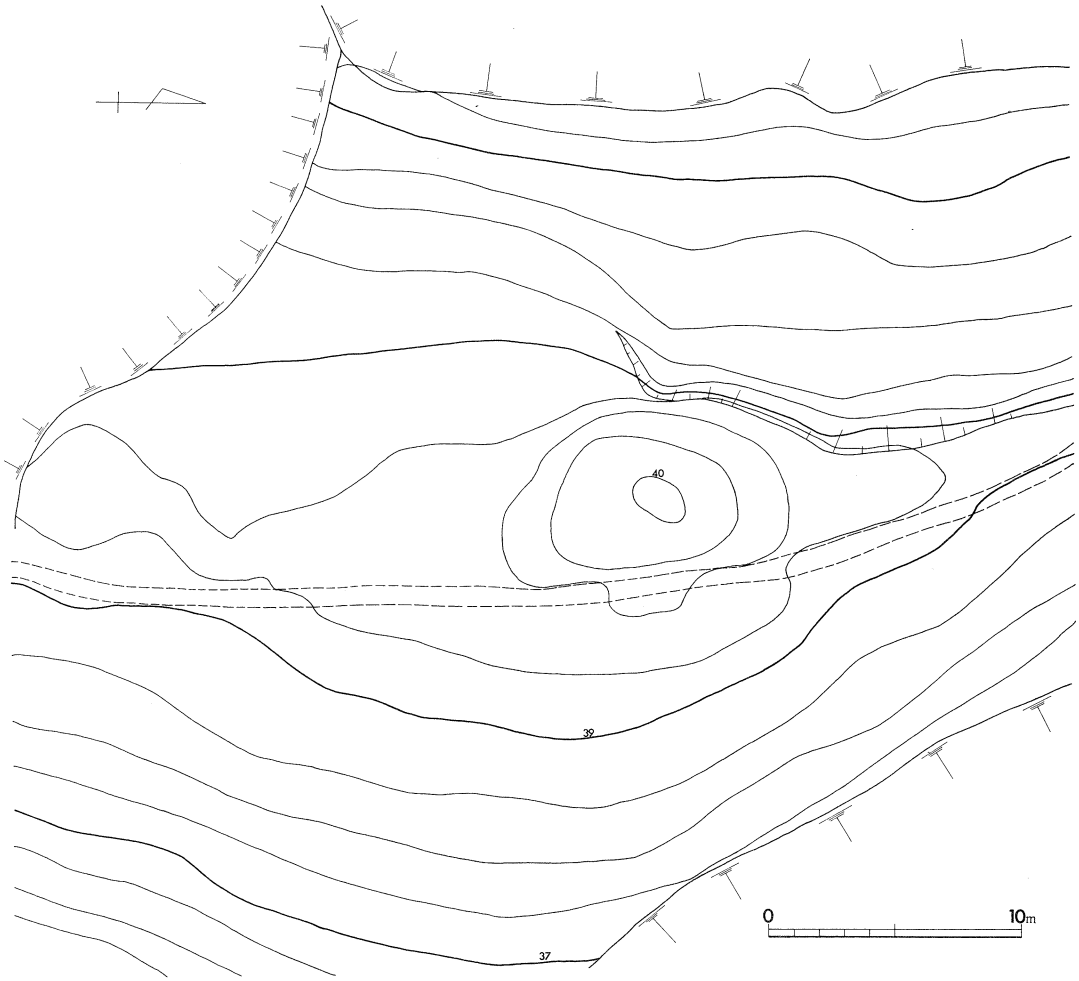
第23図　古曽志善坊遺跡出土石器実測図

第２節　古曽志善坊古墳群

調査区の北端，宍道湖北部広域農道に接する丘陵尾根上で検出された古墳群で，古曽志町の平野から西に入りこむ谷の最奥部に，また宍道湖（現干拓地）から北東に嵌入する谷（Ｄ区）の最奥部にあたる。古墳は約45m離れて２基検出され，先に検出された南側のものを１号墳，北側のものを２号墳と呼ぶ。

(1)　善坊１号墳

善坊遺跡Ⅰ区から南東へ約100m，南北に長い尾根上に検出された。この尾根の頂上部は比較的平坦で，あまり高低差なく前後に続いている。１号墳はこうした尾根頂上部のやや高まった部分に

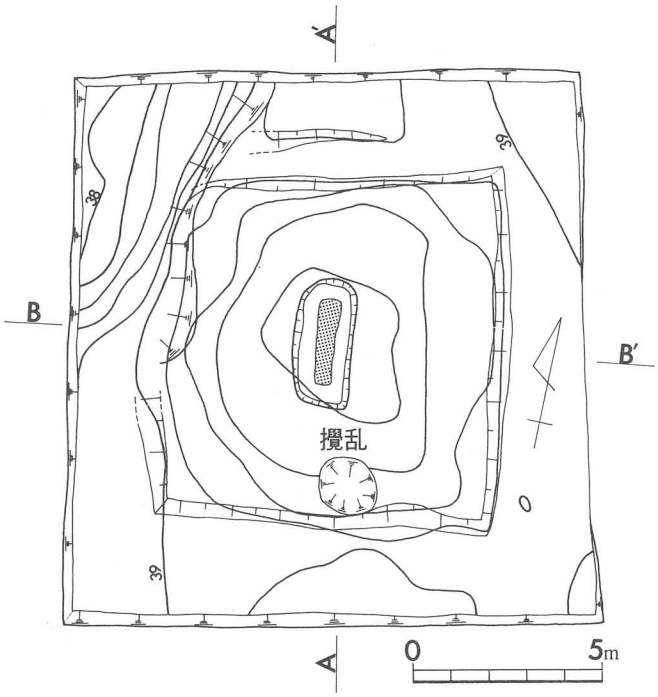


第24図　古曽志善坊１号墳発掘前地形測量図

築造されている。

調査前の状況は，径10m前後，高さ60cmほどの低平な円墳状の高まりが見られ，東側は道により若干の削平をうけ，西側は後世に大きく削り込まれていた。

墳丘　調査の結果，墳丘は南北辺約9.5m，東西辺約9.8mのほぼ正方形を呈し，高さは調査時点で約70cmを測る。墳裾は，削り出すように明確に方形の区画を行っており，特に南北方向（尾根に平行する方向）には幅約1.8m，深さ約0.23mの浅い溝を形成して，墳丘を際立たせている。墳頂部は広く，調査時で約８m四方を測り，比較的低平な墳丘だったものと考えられる。葺石，埴輪などの外部施設はまったく認められない（第25図）。



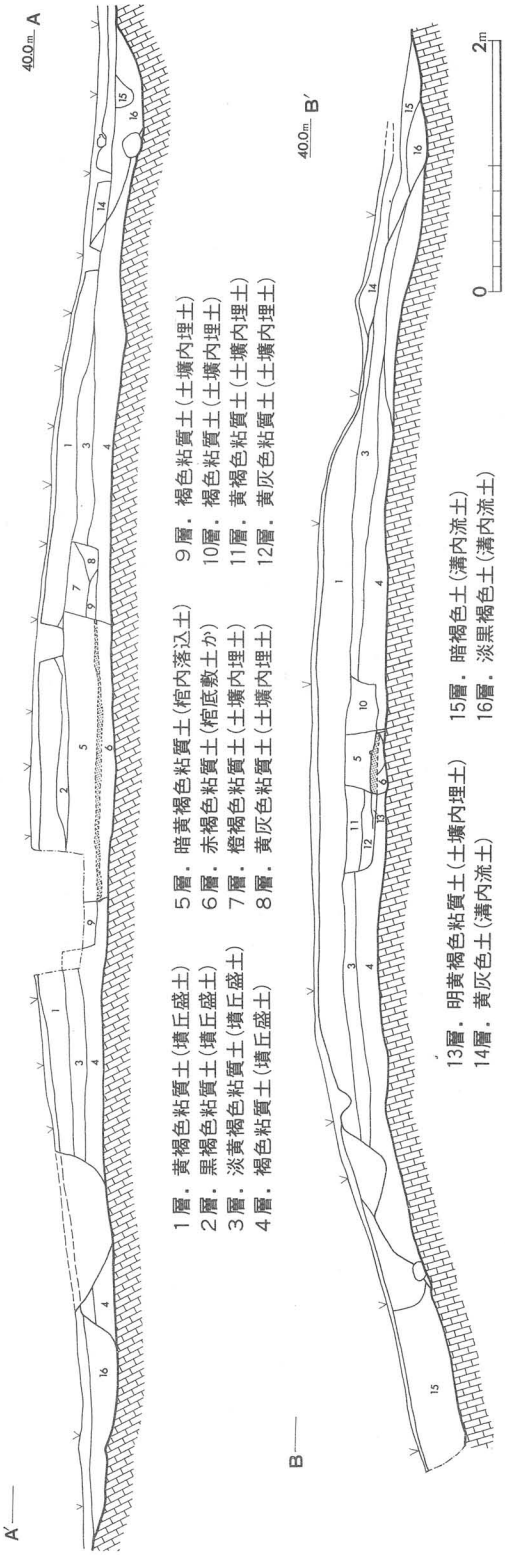
第25図　古曽志善坊１号墳調査後測量図

墳丘の築造は，自然地形の若干の高まりを利用しながら，大部分は盛土によって行っている。盛土の厚さは，厚い部分で約60cmを測るが，この尾根が全般的に流出して頂上部が緩やかになっていることから，この墳丘盛土もかなり流出していることが想定される。旧地表面は認められないため，築造の際，地山の整形を行ったものと考えられる（第26図）。

主体部　墳丘のほぼ中央，長軸南北方向（尾根方向）の主体部が検出された。土壙は，長さ3.26m，幅1.56mの平面隅丸長方形を呈している。土壙の西側の掘り方は，若干丸みを帯びているものの，東側はほぼ直線状を呈しており，正長方形を指向して掘り込んだものと考えられる。土壙の中軸は南北方向に一致する。

掘り方は，盛土３層上面で検出し，深さは検出面から約18cmを測る。しかし，盛土と土壙埋土はきわめて類似した土で，その区別が非常に困難だったことや，深さが，木棺の高さなどを考慮すると非常に浅いことから考えて，実際には盛土１層からすでに切りこまれていた可能性が高いと考えられる。

土壙中央からは礫床が検出された。礫床は長さ2.36m，幅は北側に向かって徐々に広がっており，北端で0.54m，南端で0.31mを測る。幅が広いほうが頭とすると，北側が頭位方向となる。礫床面



第26図　古曽志善坊１号墳土層断面図

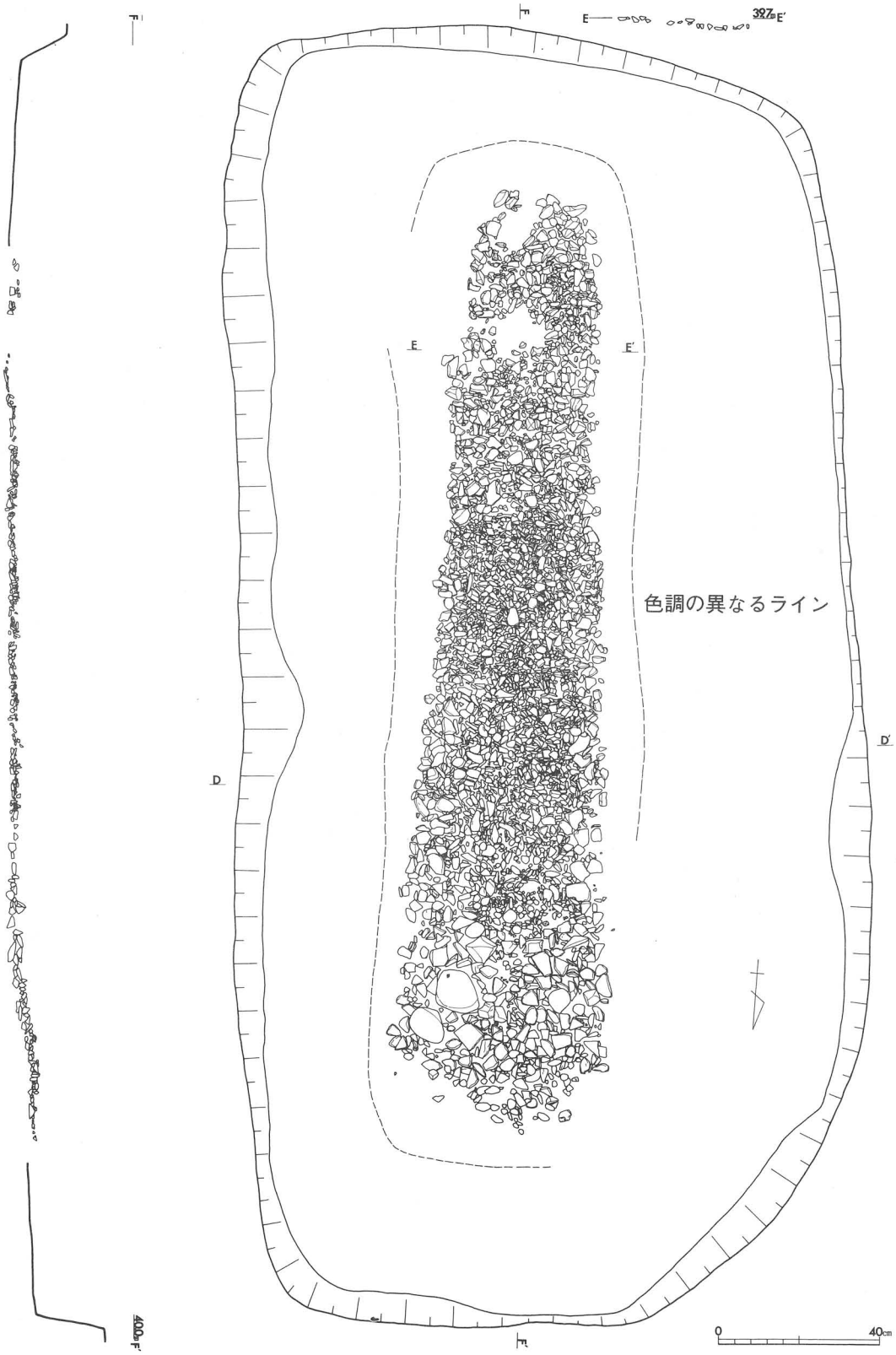
は，北側から南に向かって若干下っている。礫の密度は，全体的に見て薄いものではないが，層を成すような状況ではない。

礫の大きさや密度は，部位により若干異なっており，大きく３ブロックに分けることが可能である。北端から約50cmの範囲（頭位部分か）は径３cm～11cm前後の比較的大形の礫を中心に使用しており，石の密度は比較的薄い。その南側の約１mの範囲は径２cm以下のきわめて小形の礫を中心に使用，密度も高く中央に向かってやや窪んでおり，縁辺付近のやや高まった部分は，比較的大形の礫を配置している。最も南側の部分（足位部分か）は，径３cm前後の中形の礫を使用している。こうした礫のあり方の違いは，遺骸安置の際，体の部位による何らかの意識の違いを反映していることも考えられる。

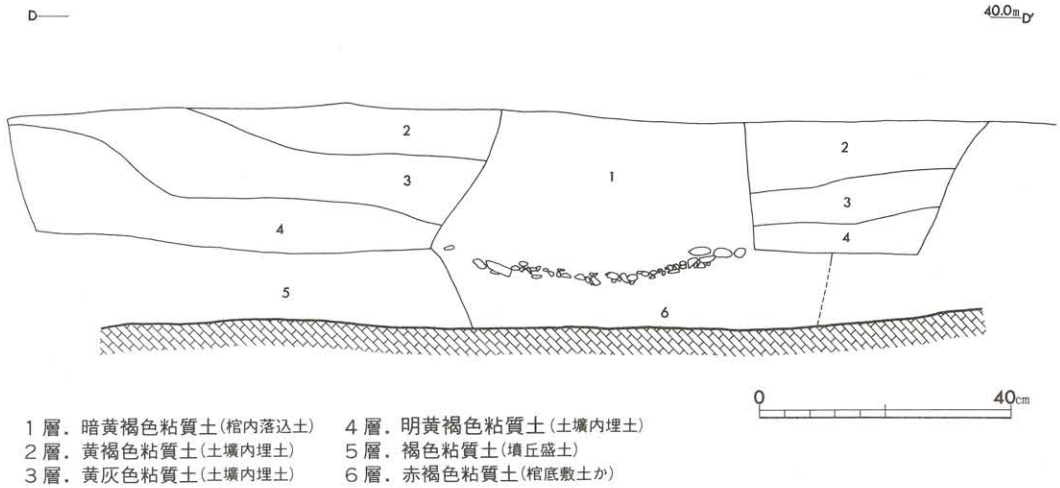
礫床の底は，礫床の縁辺に沿って長さ約2.3m，幅約60cm，約12cmの深さにさらに掘り込まれており，２段土壙状に底を掘り込んで木棺を据えたうえ，棺内部を埋め戻して礫を敷いたものと考えられる。

主体部内からは，遺物は出土しなかった。

この古墳の時期については，遺物がまったく出土していないため明言はできないが，隣接する２号墳や大谷古墳群の時期，さらに周辺に存在する同様の礫床を持つ古墳の時期等からみて，古墳時代中期～後期初頭頃の可能性が高いものと考えられる。



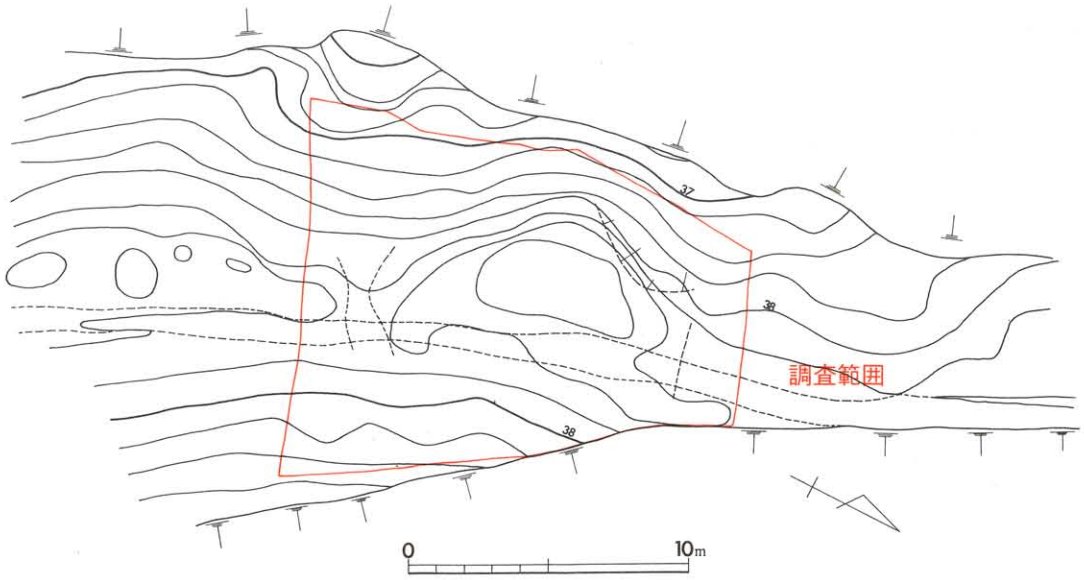
第27図　古曽志善坊１号墳主体部実測図



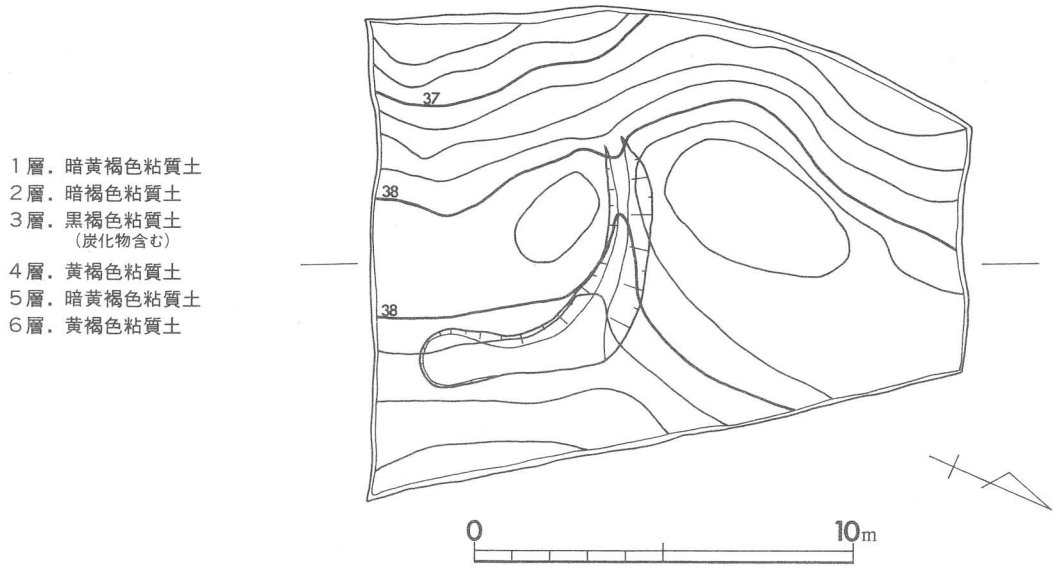
第28図　古曽志善坊１号墳主体部横断面図

(2)　善坊２号墳

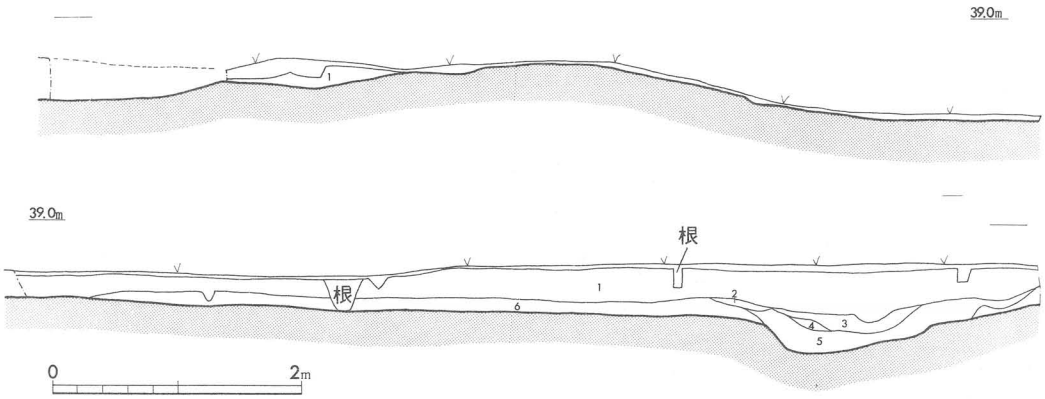
善坊２号墳は，１号墳の北西約45m，善坊遺跡Ⅰ区と１号墳のほぼ中間の尾根上に位置する。この２号墳は，分布調査段階ではまったく把握できていなかったが，樹木の伐開が終わった時点で再度丘陵の観察を行ったところ，わずかながら地形の高まりが見られたため，確認調査を行ったとこ



第29図　古曽志善坊２号墳発掘前地形測量図



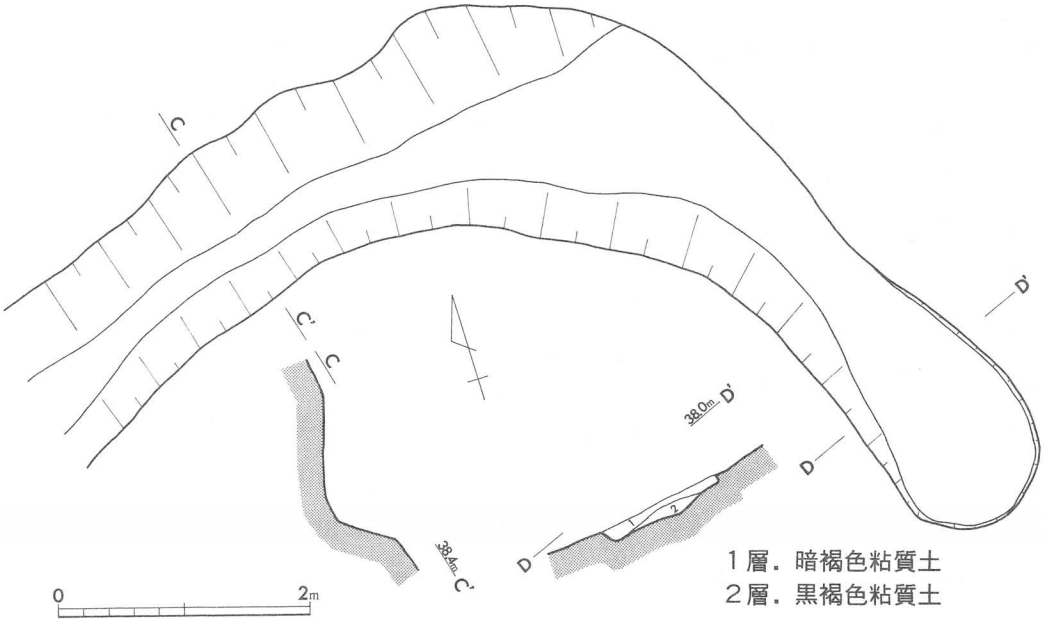
第30図　古曽志善坊２号墳発掘後地形測量図（上）および土層断面図（下）



ろ古墳の残欠の一部と考えられる遺構が確認された。

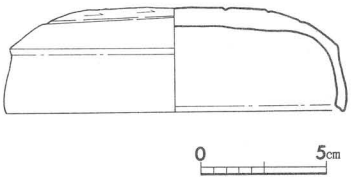
２号墳周辺は，１号墳に比べて尾根頂上部の幅が狭く，東側が宍道湖北部広域農道により大きく削られていた。尾根頂部の地形は，後世かなりの改変を受けたらしく不規則で，当初よりこの古墳の保存状況はよくないものと想定された。

墳丘　墳丘は，調査前の観察で，尾根を横切る浅い溝状の地形が観察され，その北側に長さ約10m程度のわずかな高まりが見られた（調査の結果，この高まりは古墳と直接の関係はないことがわかった。）ため，尾根を溝で区画した小規模なものを想定して発掘区を設定した。



第31図　古曽志善坊２号墳周溝実測図

発掘の結果，尾根頂上を区画するように横切り，さらに尾根の南側の方向に向かって延びるＬ字形の溝を検出した。この溝は，長さが尾根直行方向，平行方向とも約６ｍ，幅が尾根に直交する方向で約1.3m，平行する方向で約1.2m，現状の深さが深い部分で約40cmを測る。溝の底から須恵器蓋が出土しており，一辺10mに満たない小規模な方墳であった可能性が高い。保存状態がよくないため，主体部等の痕跡は何ら検出できなかった。



第32図　古曽志善坊２号墳出土須恵器

溝出土の須恵器蓋は，口径13.5cm，器高4.1cmを測り，比較的平坦な天井部と口縁部の境には浅い段を設け，口縁部は垂直に近い角度で下りる。天井部外面には回転ヘラケズリを施し，口縁端部内面には浅く段を表現している。山陰須恵器編年のⅡ期に対応するものと考えられ，およそ６世紀前半代のものであろう。

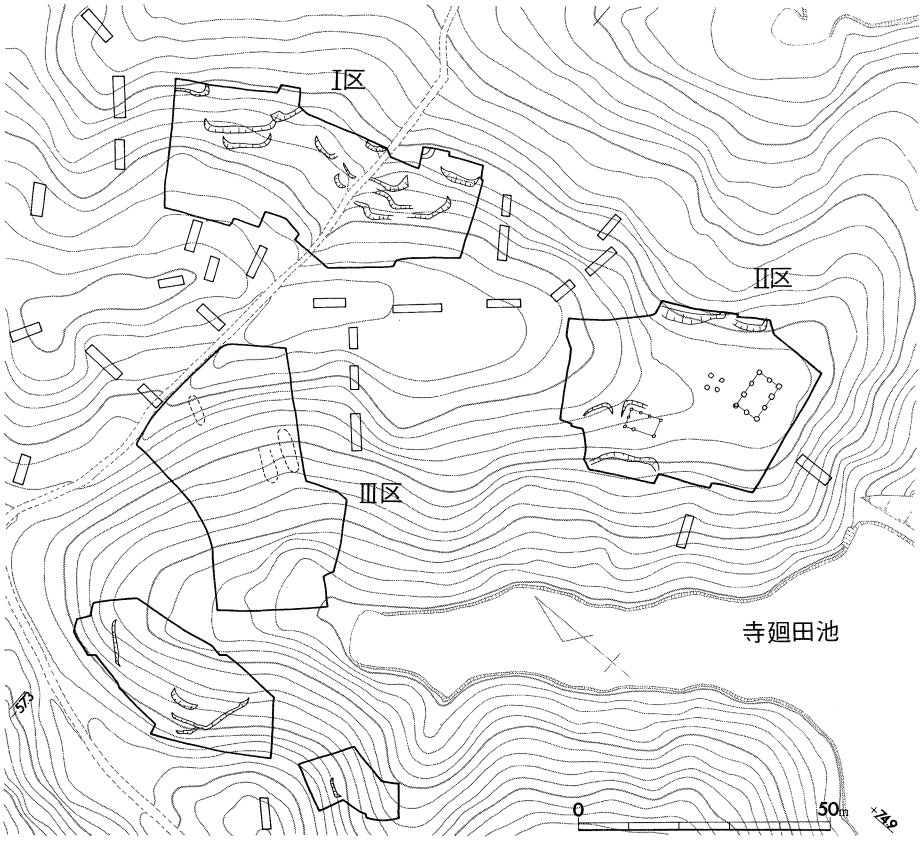
第３節　古曽志平廻田遺跡

北西から南東に伸びる尾根と，池を挟んでその西側の斜面の４ヶ所に分かれて遺構が残存していた。Ⅰ区は東向きのなだらかな斜面を利用した掘立柱建物跡があり，尾根先端のⅡ区でも同様の遺構が検出された。Ⅳ区は，Ⅲ区の向い側で，東向きのやや急な斜面に位置し，加工段や溝状遺構などを検出した（第33図）。

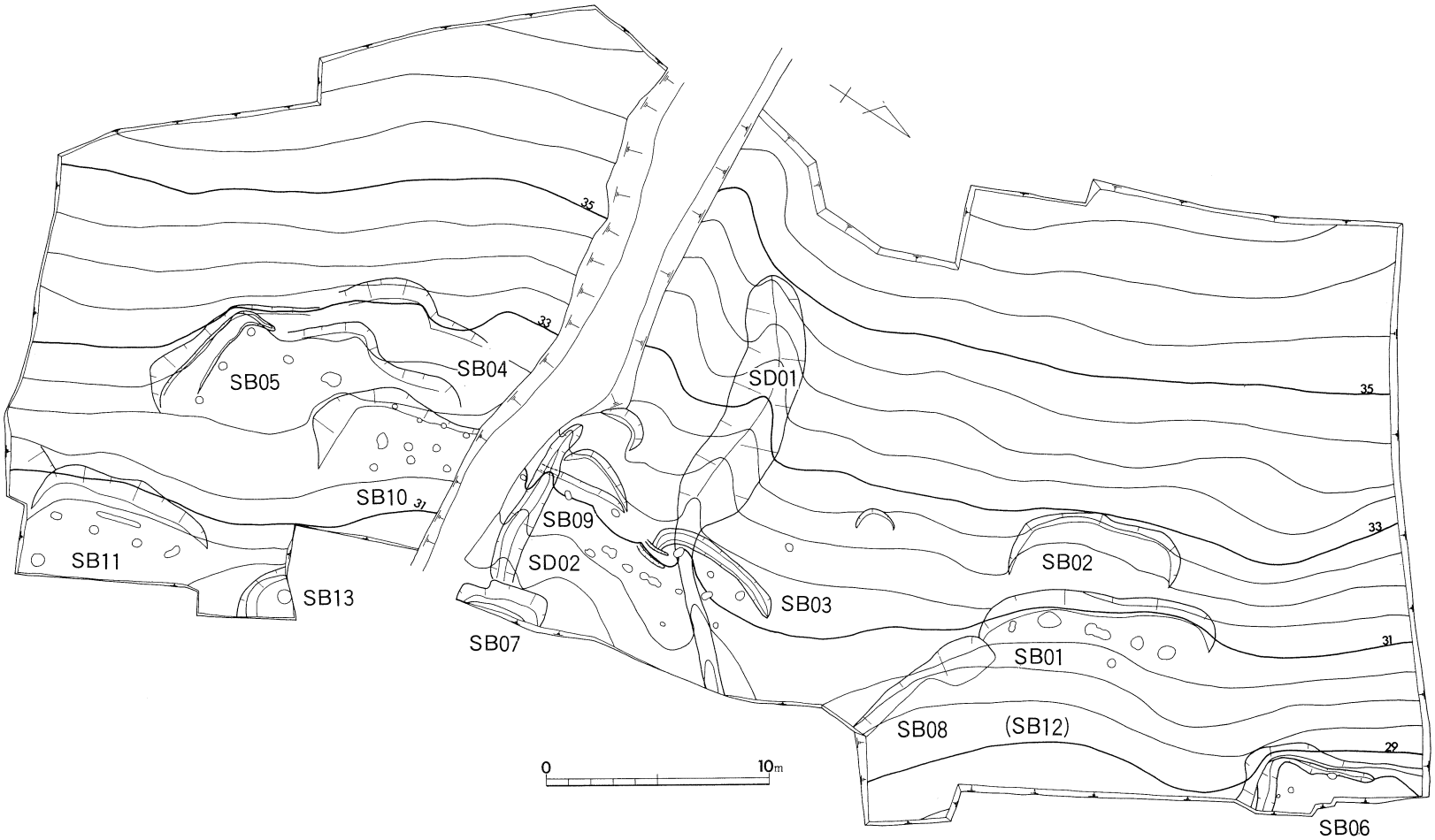
(1)　Ⅰ区の調査

調査区の中央近くを東西方向に殿様道が貫いてはいるが，東向きの緩かな斜面の長さ70m，幅25mの範囲の中に加工段を13ヶ所確認した。そのうち掘立柱建物跡を検出したのは８ヶ所である。建物跡の発見できなかった加工段も含め，ここでは各加工段すべてにSBの記号を付して報告する。

SB01　調査区北半中央，標高31m付近で検出した細長い加工段で，長さ約10mである。赤色地山粘土を1.2～1.3mの幅で平坦に加工したのち，斜面下側に貼土を行い，そこに柱穴を掘り込んで



第33図　古曽志平廻田遺跡調査区配置図



第34図　古曽志平廻田遺跡Ⅰ区地形測量図

いる（第35図）。床面には壁面から若干ずれた方向に，２棟分の柱穴列が重複して検出された。古段階のものは小形で，桁行２間（約４ｍ）×梁間１間（約1.2ｍ）分が確認できた。柱穴の掘り方は円形で，現存で深さ30～40cmである。新段階のものは古段階よりも柱穴・柱間ともに大きく，桁行２間（約5.5ｍ）×梁間１間（約2.4ｍ）分を検出した。北側の梁の柱穴はすでに失われているようで検出できなかった。加工段の南半で壁面から床面にかけて，ちょうど床面や柱穴を覆うように拳大の円礫がかなり広がっており，もともと壁面を補強するために積み上げられていたものが流出したものと推測された（第36図）。

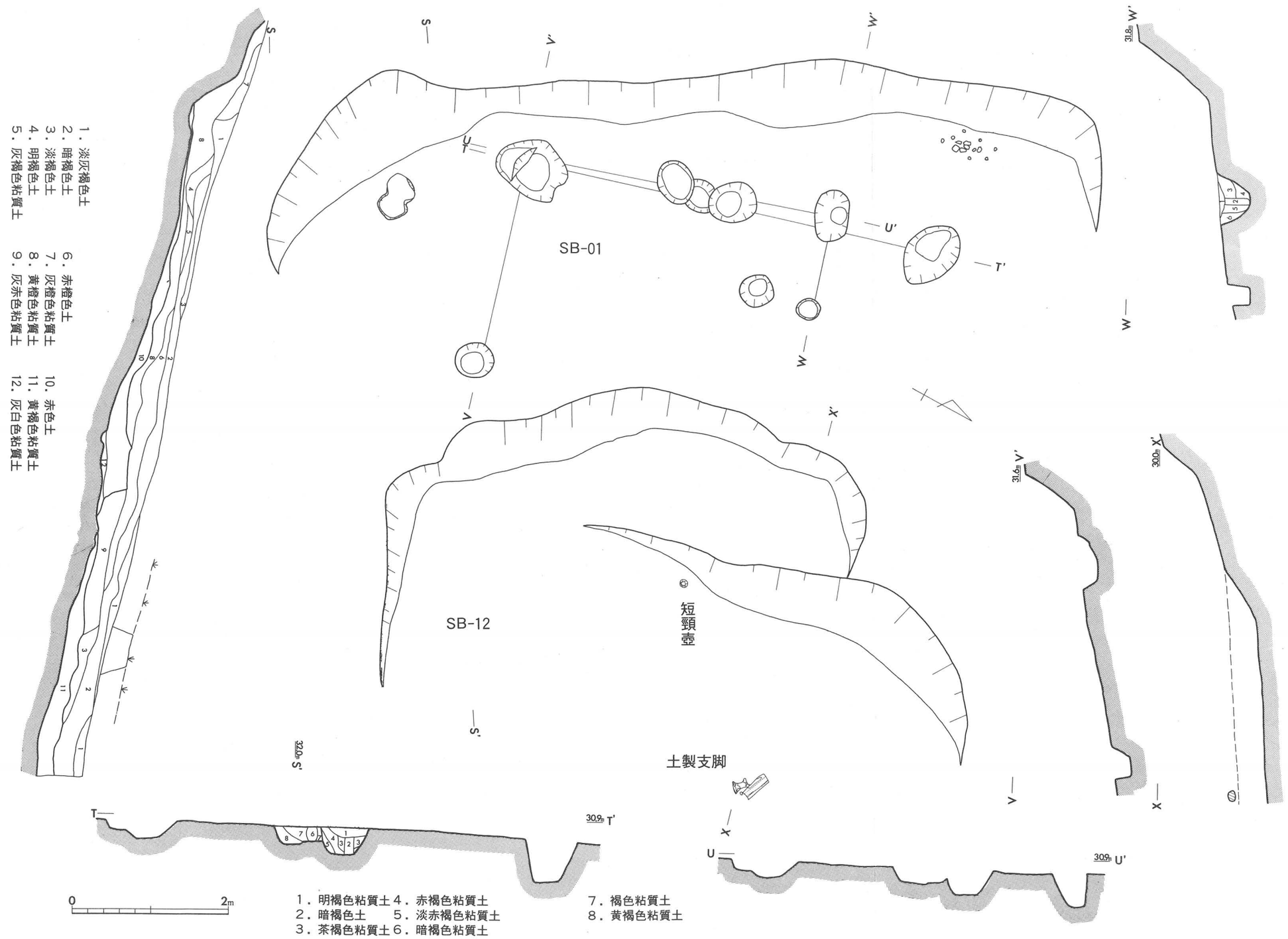
床面とそれに続く10層上面から須恵器が出土した。第37図１は坏片で，体部は丸く立ち上がり，口縁は若干内傾したあと直立する。復元口径10.6cmである。10は器高約14cmの平瓶である。体部は肩がはり，沈線が２条廻る。胴部には回転ナデ調整後，カキ目調整を行う。頸部～口縁は体部にほぼ垂直に付けられており，口縁端は朝顔状に大きく開口し，頸部にも沈線を２条廻らせる。把手は半分以上を欠損するが，ヘラケズリによって整形を行った精巧なものである。

SB01では，流入土の暗褐色土中からも遺物が多数出土した（第37図２～９）。大半が須恵器蓋坏と壷類で，図の４は宝珠状つまみの付く蓋片である。２・３は１と同形態の坏身で，底部外面は回転糸切り放しのままである。５も坏だが口縁が大きく外に開くもので，６・７は高台付坏である。８・９は長頸壷の胴部で，外面下半はヘラケズリ調整を行っている。

SB02　SB01の斜面上に位置する加工段で，全長7.5ｍ，平坦面幅約２ｍを測る。壁は全体に直線的でなく，平坦面もやや傾斜がある。柱穴は発見できなかった（第34図）が，埋土の暗褐色粘質土中から須恵器類が出土した（第37図11～15）。11は坏，12・13は鉢形を呈するもので内外面ともにナデ調整である。14の蓋は口縁部の立ち上がりがほとんどなくなった段階のものである。

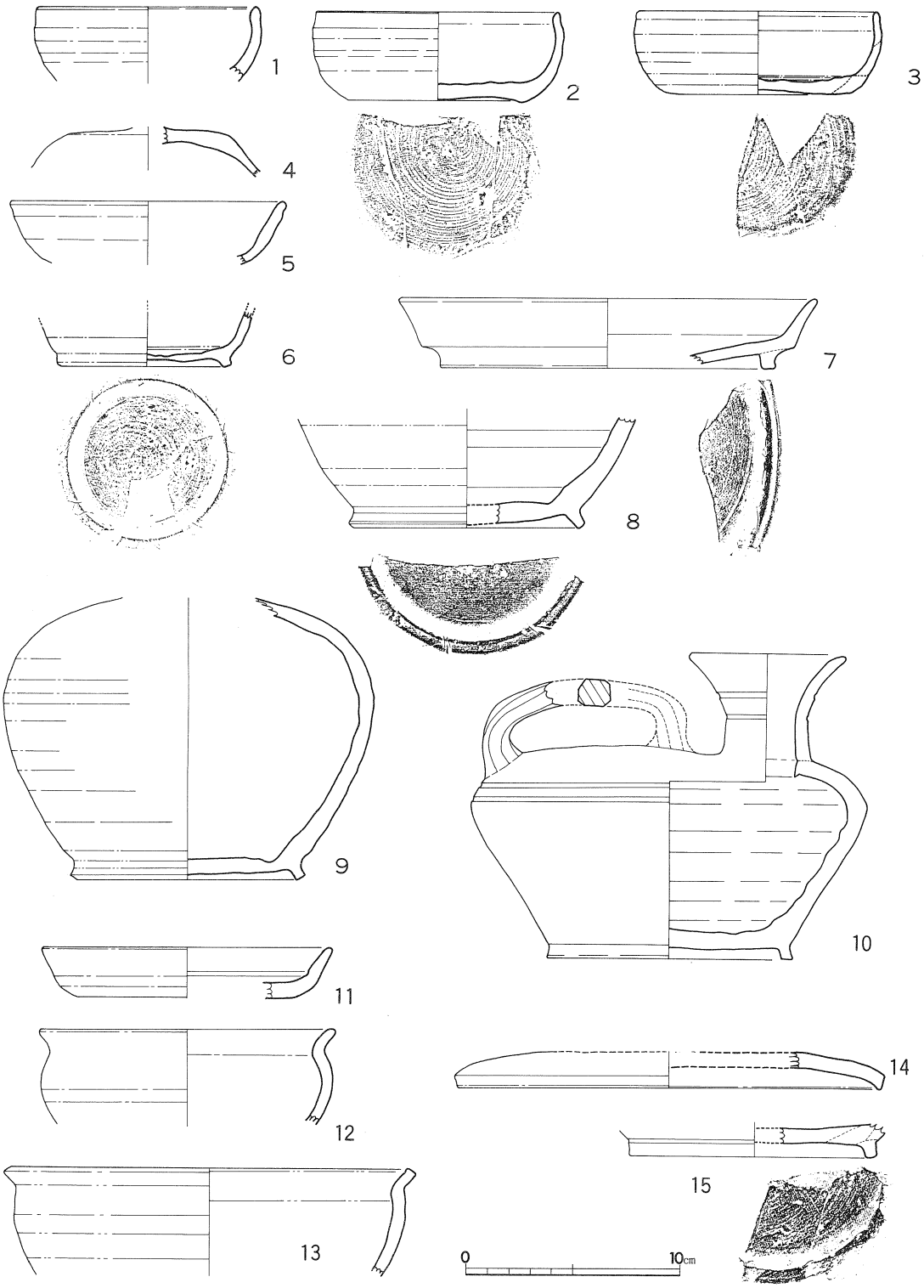
SB12　SB01の斜面下側に位置し，さらに二段の加工段に分かれている。どちらも長さ5.4ｍ程度で，壁の高さは40cmである。もともとSB01の張り土（盛土）の上から段を掘り込み，SB01と同様に斜面の下側を地山粘土で盛っていたようである。平坦面に柱穴等は検出できなかった（図35図）。

上の加工段の床面に相当すると考えられる11層（黄褐色粘質土）上面で，くど石らしき長さ35cmの方柱状の石とともに土製支脚や須恵器類が出土した（第42図１～10）。１は宝珠状つまみの付く蓋だが，口縁端部下に立ち上がりの痕跡と考えられる小さな突起が出ている。２は復元口径15.6cmの皿状のもので，３は内面に窯体片が付着した壷の底部である。４はほぼ完形の土師器短頸壷で，底部と胴部の境や肩部が角ばり，口縁端は短く尖っている。遺存状態が悪く，器面調整がわかりにくい。５～７は坏，９は平瓶の胴部片で，胴の最も張ったところに断面M字形の突帯を貼り付けている。10は，短い頸部から直ちに張りの強い肩になる壷である。肉厚な作りで，底部まではさほどなく，肩部から頂部までヘラケズリと思われる。８の土製支脚は，２本の腕と反対側に小突起がつ



第35図　古曽志平廻田遺跡Ⅰ区SB-01,12実測図

第36図　古曽志平廻田遺跡Ⅰ区SB-01小礫群出土状況



第37図　古曽志平廻田遺跡Ⅰ区SB-01,02出土遺物実測図
(2～9; SB-01暗褐色土，1.10; SB-01床面〔10層上面〕，11～15; SB-02)

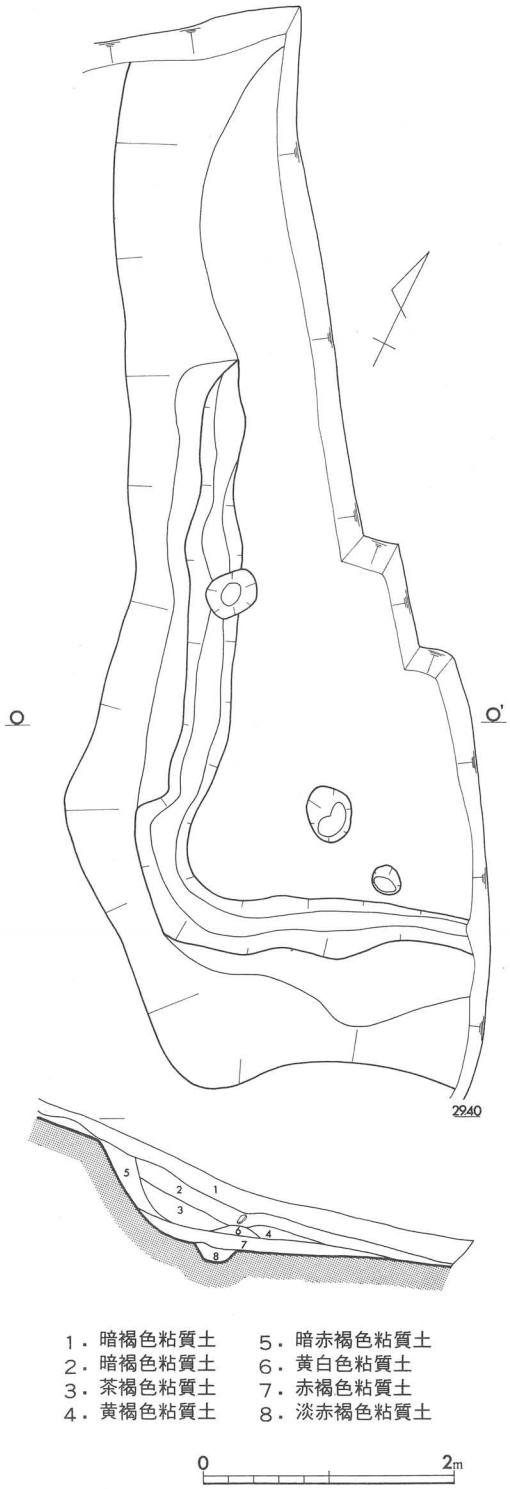
くもので，脚部は大きく裾が広がる。底面は5㎝程度持ち上げている。表面は指のほかに木製の工具のようなものでナデている。

SB06　Ⅰ区北端にあり，一部調査区域外に伸びている。高さ80㎝の壁をL字状にまわしており，長辺は長さ約8ｍである。土層観察の結果，加工段に二時期あることが判明した。最初のものは壁下に幅30㎝，深さ10㎝の溝を廻らし，平坦面はほぼ水平で，平坦面幅は現状で2ｍ程度である。平坦面には直径30㎝以下のピットが3個あったが，建物が組めるような状況ではなかった。新段階のものは，最初の平坦面に地山粘土で盛土をし，壁下には壁から40～50㎝離れた位置に粘土の土手を作って，溝に替わる排水施設を設けている（第38図）。

平坦面からは遺物は出土していないが，2層暗褐色土中から須恵器が少々出土した（第39図1・2）。1は小形の宝珠状つまみ付蓋で，口縁径7㎝，器高2.2㎝である。天井はほぼ水平で，体部は短く外に開く。口縁端部には特に変化をつけていない。2は坏で体部は丸く立ち上がる。

SB08　SB01の南東側に，等高線にやや斜めに掘り込まれた加工段だが，平坦面を際立つほど明確に作り出していない。壁南端はさらに南に伸びており，壁の長さは現存で約8ｍである（第34図）。

加工段には直接伴わないが，流入土の黒褐色土中から多量の遺物が出土している（第39図3～19）。図示したのはいずれも須恵器で，



第38図　古曽志平廻田遺跡Ⅰ区SB-06実測図

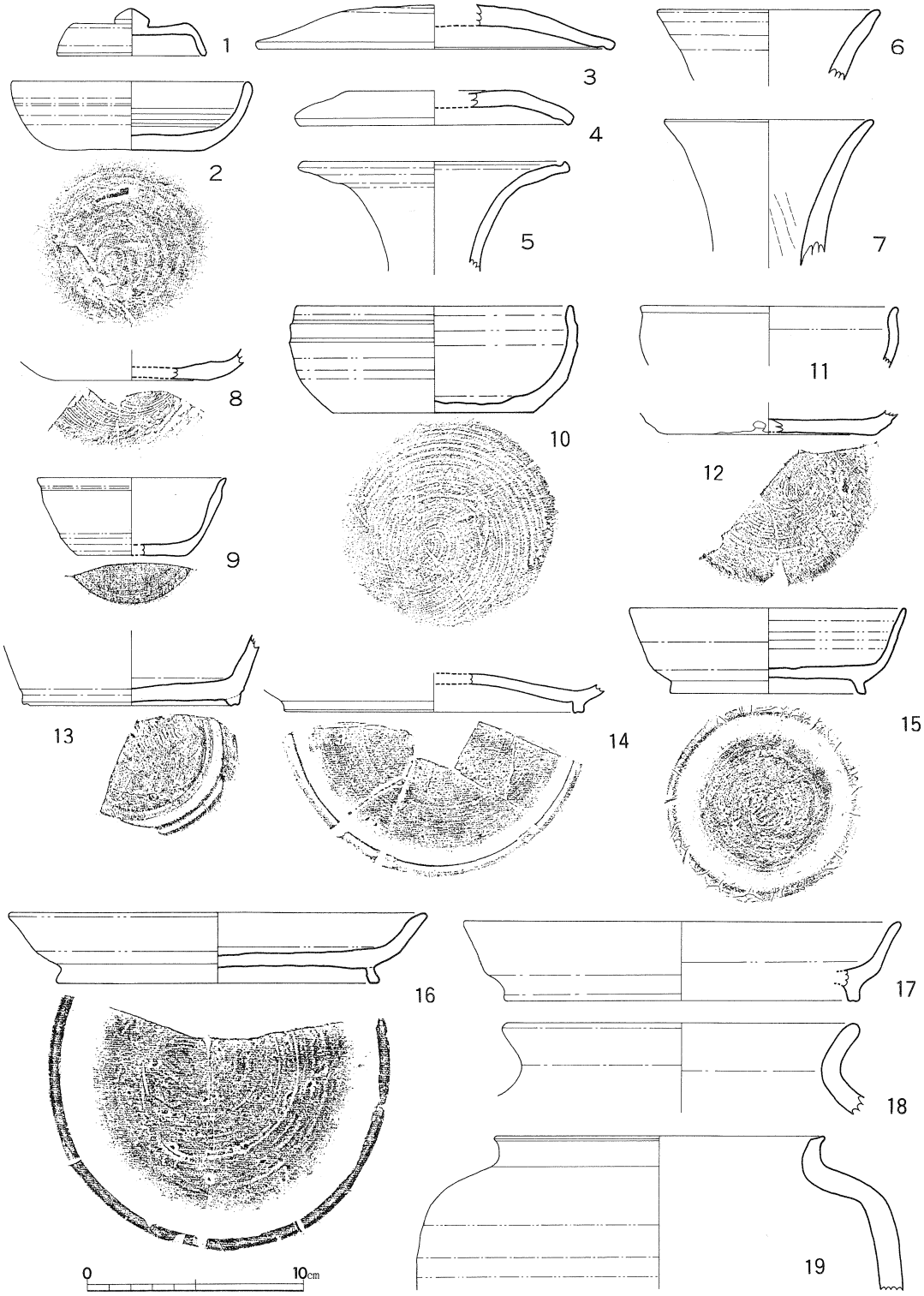
3・4はどちらも宝珠状つまみのつく蓋で，口縁端部を丸く収め，3は内面に浅い沈線を，4は段をつくったものである。8～12は坏，13・15は高台付坏である。9は，復元口縁径8.8cmの小形のもので，口縁端部を薄手につくり，外面を若干段状にしている。胴部下側と底部外側は丁寧にヘラケズリを施している。14・16・17は高台付皿で，坏を含め，高台には高さが低く断面M字形のもの（13・14・17）とやや薄肉で高く，端部が若干外に開くもの（15・16）の二通りがあるようである。5～7は長頸壷の口縁部片で，5は上面端部近くに沈線を施したもの，7は頸部内面に絞り痕の認められるものである。18・19も壷の口縁部で，18は頸部から短く反転させ，端部を丸く収めるもの，19はSB09から出土した壷と同様の肩の張ったものである。

SB03　Ⅰ区のほぼ中央にあり，斜面に縦方向に走るSD01によって切られている。明確な平坦面や壁面を検出することはできなかったが，幅50～60cmの太い溝とその内側に柱穴列を検出した（第40図）。溝の長さは約6.4mで弧状に掘り込まれており，深さは約10cmである。建物跡は桁行2間（約3.4m）×梁間1間（約1.7m）を確認した。柱穴は掘り方円形で直径40cm前後，深さは約50cmである。柱穴内の土層観察では，上半と下半の二つの柱痕跡が認められ，最初の柱を抜き取ったあと，同じ柱穴を利用して建物を立て直したことが考えられる。また，溝の底面からも深さ約5cm程度しか残っていない柱穴が発見されれており，あるいはさらに別の建物跡が存在していた可能性もある。

SB07　SB03とSB09の間に位置し，壁は廻らず，溝の痕跡が2条と桁行2間分の柱穴列を検出したのみである。2条の溝は長さ1.2mと1.3mで，深さは10cmに満たない。柱穴掘り方円形で深さ20～60cmあり，柱間規模は3.5mである（第40図）。SB03・09と重複関係にあるが，どちらも前後関係を確認することはできなかった。遺物は伴っていない。

SB09　複数の加工段があり，最下面には溝と柱穴列を検出した。加工段のうち，西端の最も高いものは，壁面高約60mで北側はL字状に曲がるが，南端を殿様道で削られており，旧状を推定しえない。平坦面の広さは現存で幅1.2～1.3m，長さ約2mである。この面では遺物は出土しなかった。2・3段目は，加工段の長辺が南西から北東の方向で前の加工段と向きを違えている。2段目は段差が10cmに満たず，ほんのかすかなものである。3段目は，L字状に高さ40cm程度の壁面が残っており，平坦面にはこれよりも古い段階の溝や柱穴を埋める形で赤褐色粘土の貼土を行っている。平坦面の広さは4m×1.6m程度で，貼土上面では溝や柱穴は出土されなかった。3段目の加工段に堆積した暗褐色粘質土から須恵器片が多数散在して出土した（第41図）。第42図11～15はその一部で，11は土製支脚片である。12～14は宝珠状つまみ付き蓋で，14には口縁内面に若干段が認められるが，13にはそれがまったくない。15の坏は，口縁端部の内側に面をつくり出している。

SB09の最古段階は，1段目と同じ方向に掘り込まれた溝と，その内側の柱穴列である。溝は現存長4.6m，幅30cm，深さ10cm程度で，端が若干カーブする。柱穴は直径40～60cmの円形で，建物規



第39図　古曽志平廻田遺跡Ⅰ区SB-06・08出土遺物実測図(1・2;SB-06褐色土，3～19;SB-08黒褐色土)

模は桁行２間（4.2m）×梁間１間（1.8m）分である（第40図）。これに伴う遺物は出土していないが，SB09内の変遷状況は，先の土層堆積状況から，最下段（溝・掘立柱建物跡）→２・３段目→１段目という順序が追える。

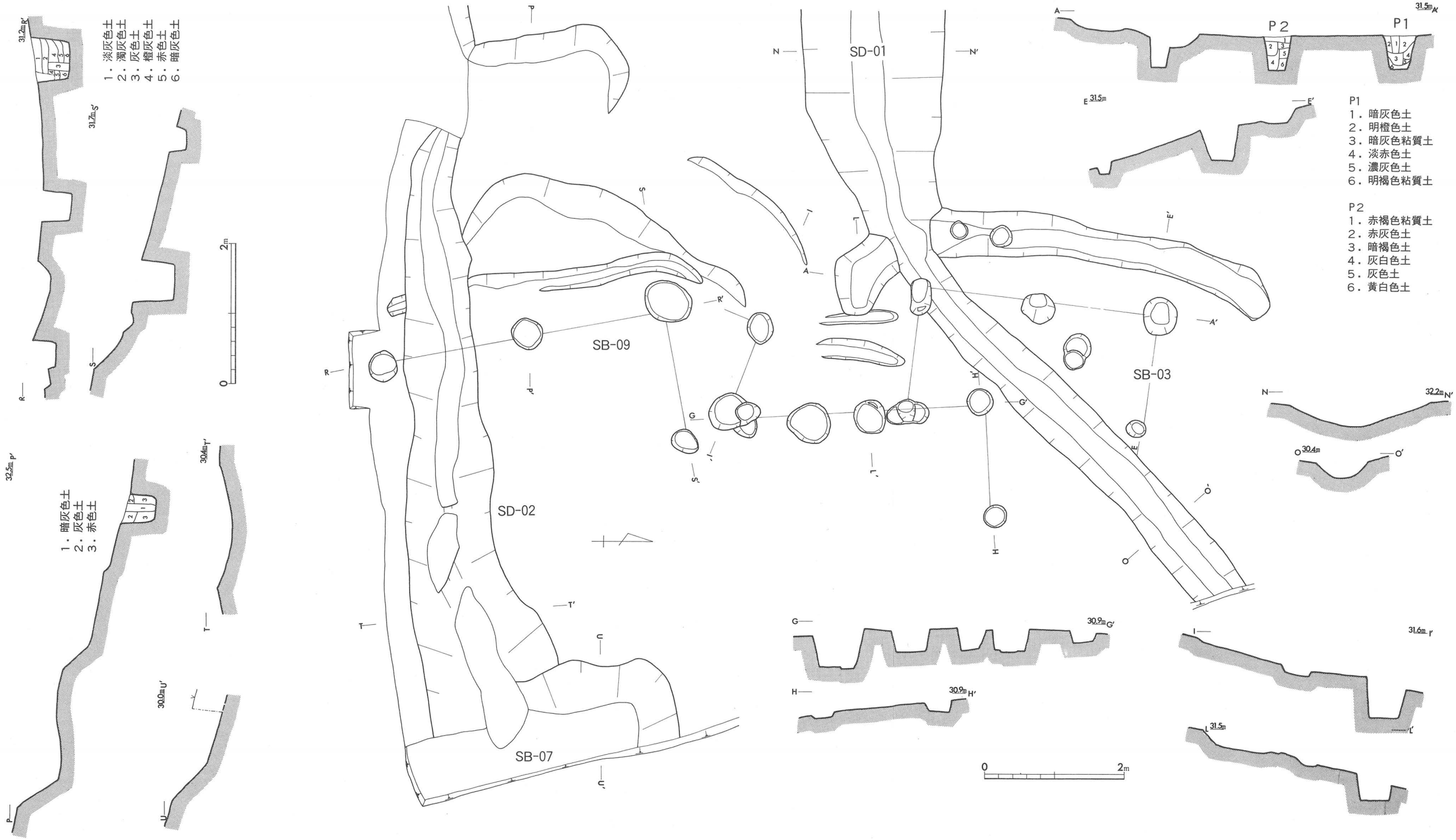
SB04　殿様道の南側，標高33mあたりに検出した細長い加工段である。自然の斜面との段差は約40cmだが，壁は直立せずかなりなだらかで，しかも直線的でない。南側を直径1.7m前後の円形の土壙で破壊されているため，正確な数字ではないが，長さ6.6m，幅2.4m程度の平坦面があったと考えられる。溝・柱穴等は確認されなかった（第43図）。

SB10　SB04の東に位置し，上下二段の加工段を検出した。下段は北と東をすでに失っているが，現存で長さ5.8m，幅2.5mの平坦面である。壁の高さは西側で約30cm，南側で50～70cmで，南壁のやや膨んだところには，全長１m，最大幅40cmの平面楕円形の棚状の段がしつらえてある。下段埋土の土層堆積状況から，下段には少くとも３枚の生活面があり，最古段階は地山を削り込んでつくった最初の平坦面で，以後建て替えの際には，平坦面をかさ上げし，貼土をしなおしていったようである。第２次・第３次の生活面は第43図の土層図で，それぞれ５層下面と４層上面，２層下面に相当する。ここで注目されるのは壁下の溝の作り方で，最古段階では溝を掘らずに壁から少々離れて粘土の土手をつくっているが，第２段階では最初から溝のように凹めており，第３段階では溝が消滅している。この傾向が当遺跡の加工段に一般的に言えるかどうかはわからないが，興味の持たれる点である。

さて，下段の各生活面での掘立柱建物跡等については，残念ながら層ごとにプランを検出するのは不可能で，最下面の地山まで掘り進まないと，柱穴を検出することはできなかった。しかも確認できた建物跡はわずか２棟分である。そのひとつは桁行２間（約3.3m）分で西側の壁面とほぼ平行するものである。柱穴はほぼ円形で直径40cm程度である。もう一方はこれよりも若干方向がずれており，桁行２間（約2.6m）×梁間１間（約1.2m）分のやや小さめの建物跡である。両者の前後関係については把握しきれなかった。

上段は下段の西側，SB04との間に設けられており，平坦面幅0.7～1.1m，長さ4.4m程度である。上段平坦面からは柱穴を１個しか検出していないが，ちょうど下段壁面に，上段壁面に平行に並ぶ柱穴を検出した。建物規模は桁行３間（約3.6m）分であるが，さらに北に伸びる可能性もある。上段の平坦面は下段の土層では１層下面に相当し，下段を埋めて上段を作り直したと考えられる（第43図）。

SB10上下両段からは遺物も多数出土した。上段では地山平坦面に堆積していた赤褐色粘質土とその上層の暗褐色土から出土する（第44図）が，暗褐色出土遺物は，すぐ上の段のSB04から流入した可能性が強い。第46図１・３・５・７はその暗褐色土から出土した須恵器で，１は完形の蓋である。

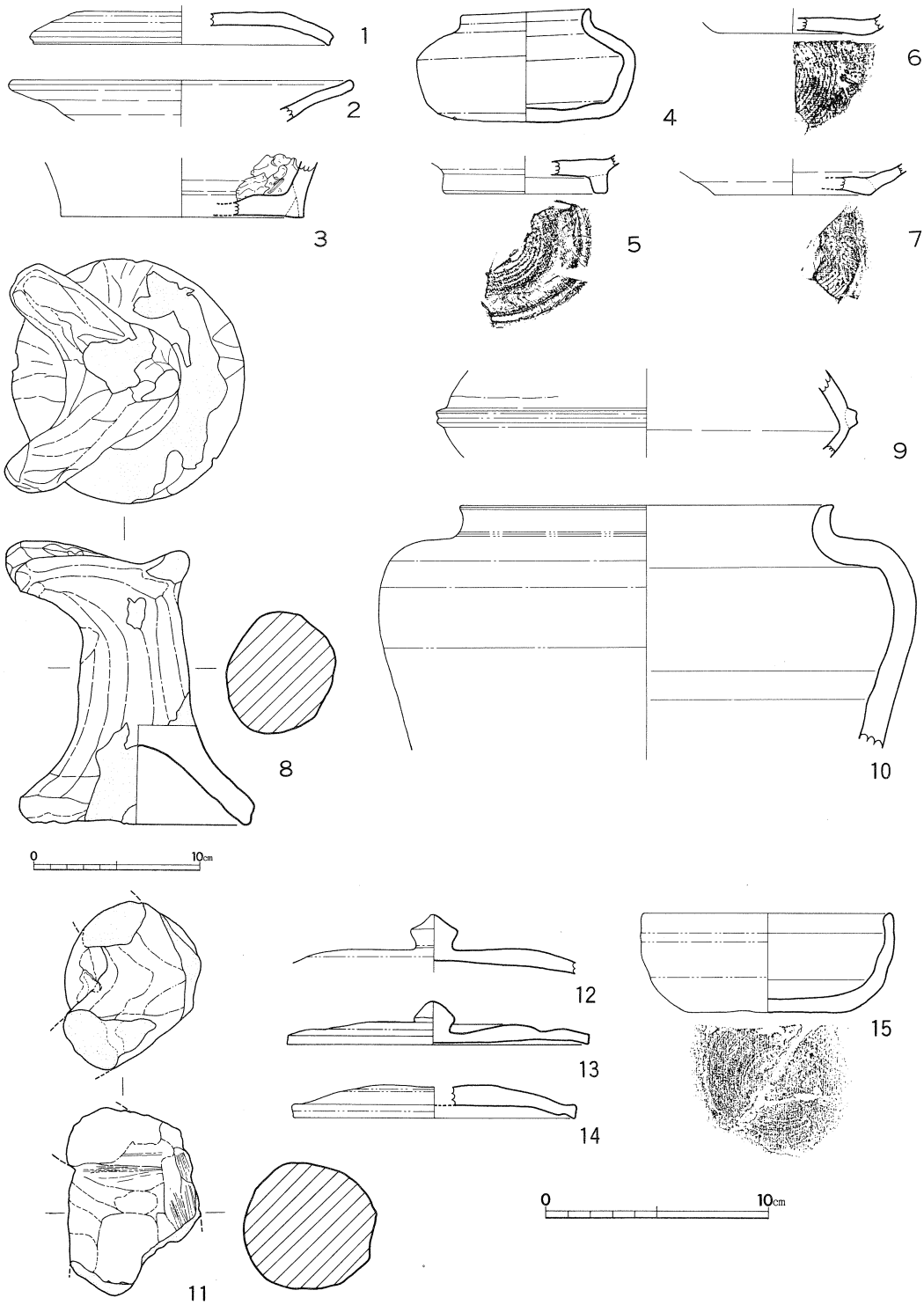


第40図　古曽志平廻田遺跡Ⅰ区SB-03・07・09，SD-01・02実測図

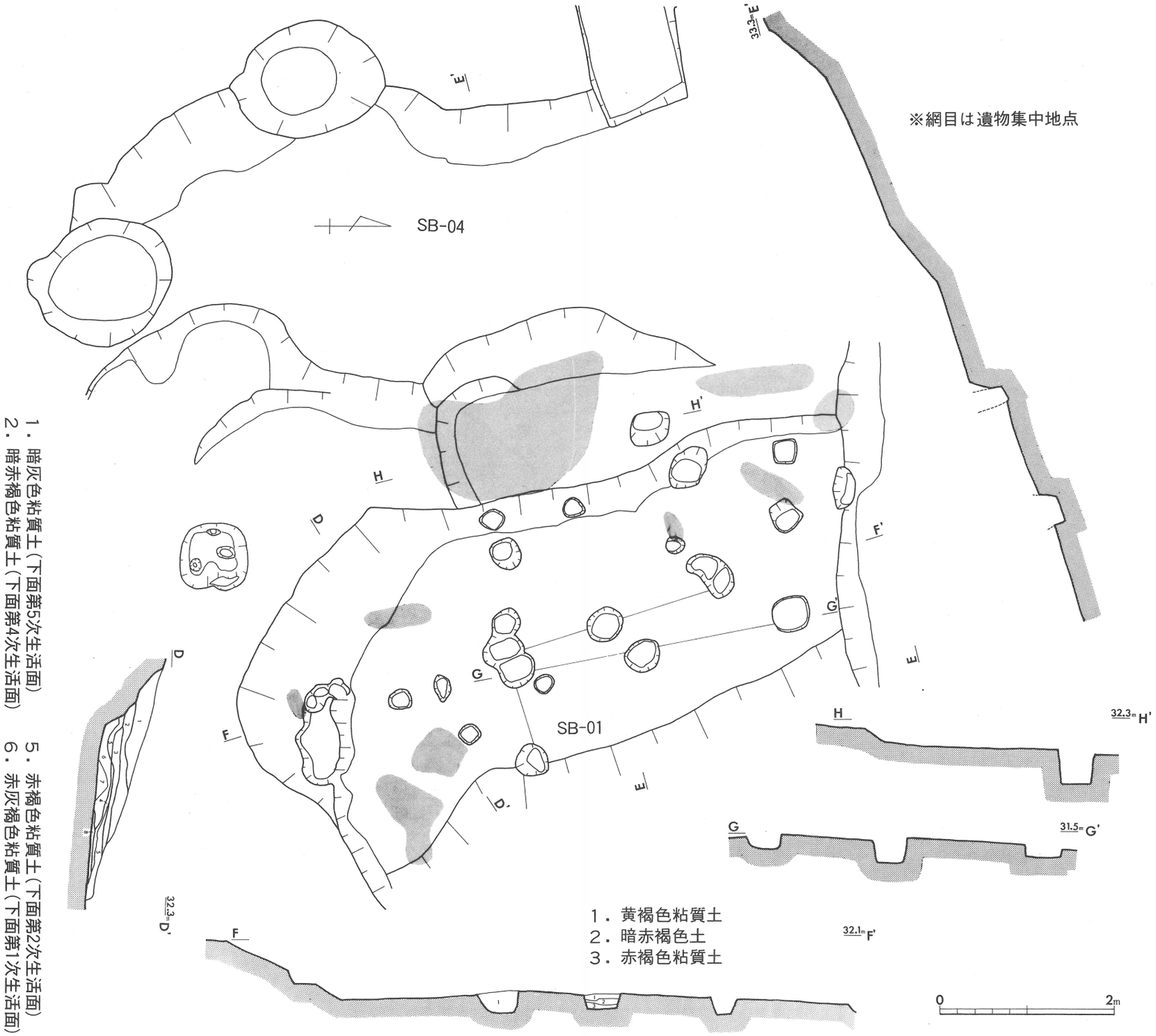
口縁には小さな突起状の端部がつく。3の皿には内面にかなり使用の痕跡が残っている。2・4・6は赤褐色粘質土出土須恵器で，2は口縁内面が沈線状に凹む小形の蓋である。復元口縁径9.6cmである。6は大形の胴部にやや外反ぎみの短い口縁がつく壷で，胴部外面には平行タタキ目文が残る。

下段では，平坦面の南端すなわち掘立柱建物跡の南側の，第2次生活面（第3層下面）から須恵器坏類と土師器片がまとまって出土した（第45図）。第46図8～12はその須恵器類で，口縁径や器高はまちまちだが，いずれも底部回転糸切り痕を残し，体部はやや外に開きながら立ち上がり，口縁部はほぼ垂直に近くなるという形態を示す。ただし，8・10・12の口縁部が徐々に薄く作られるの

第41図　古曽志平廻田遺跡Ⅰ区SB-09遺物出土状況

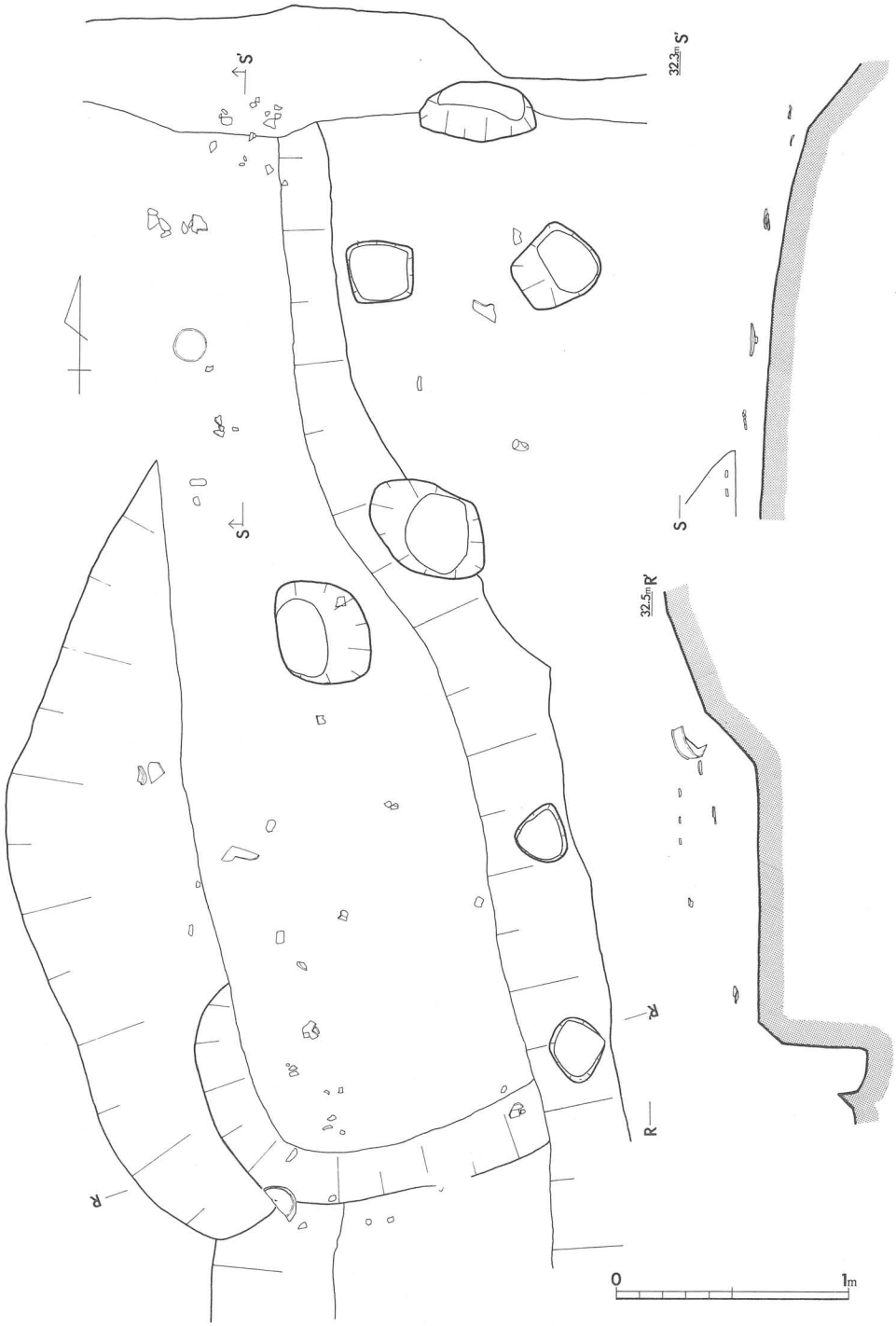


第42図　古曽志平廻田遺跡Ⅰ区SB-09・12，SD-02出土遺物実測図(土製支脚のみ1/4)
(1～10；SB-12暗褐色土，11～14；SB-09，15；SD-02)



1．暗灰色粘質土(下面第5次生活面)
2．暗赤褐色粘質土(下面第4次生活面)
3．暗灰色粘質土(下面第3次生活面)
4．暗赤褐色粘質土
5．赤褐色粘質土(下面第2次生活面)
6．赤灰褐色粘質土(下面第1次生活面)
7．暗灰色粘質土
8．赤褐色粘質土

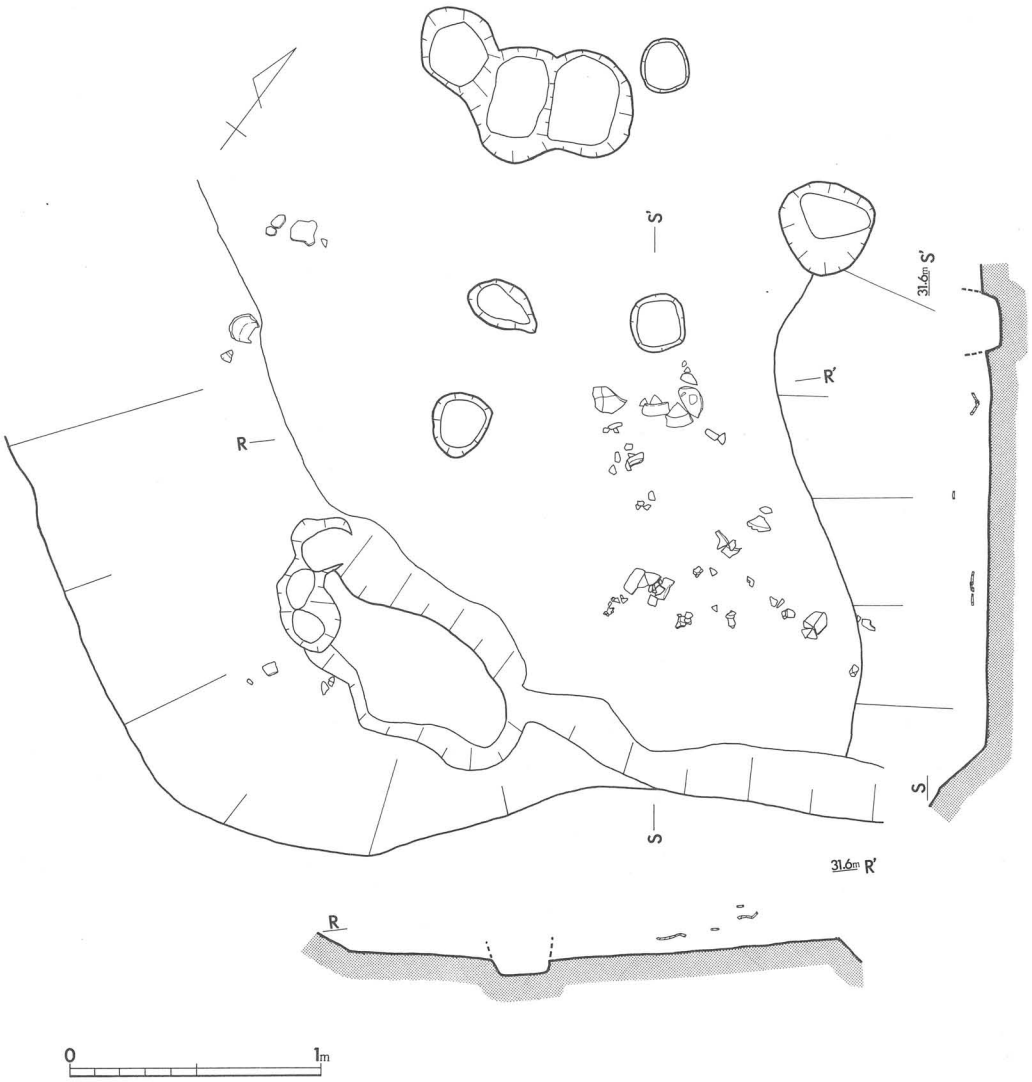
第43図　古曽志平廻田遺跡Ⅰ区SB-04･10実測図



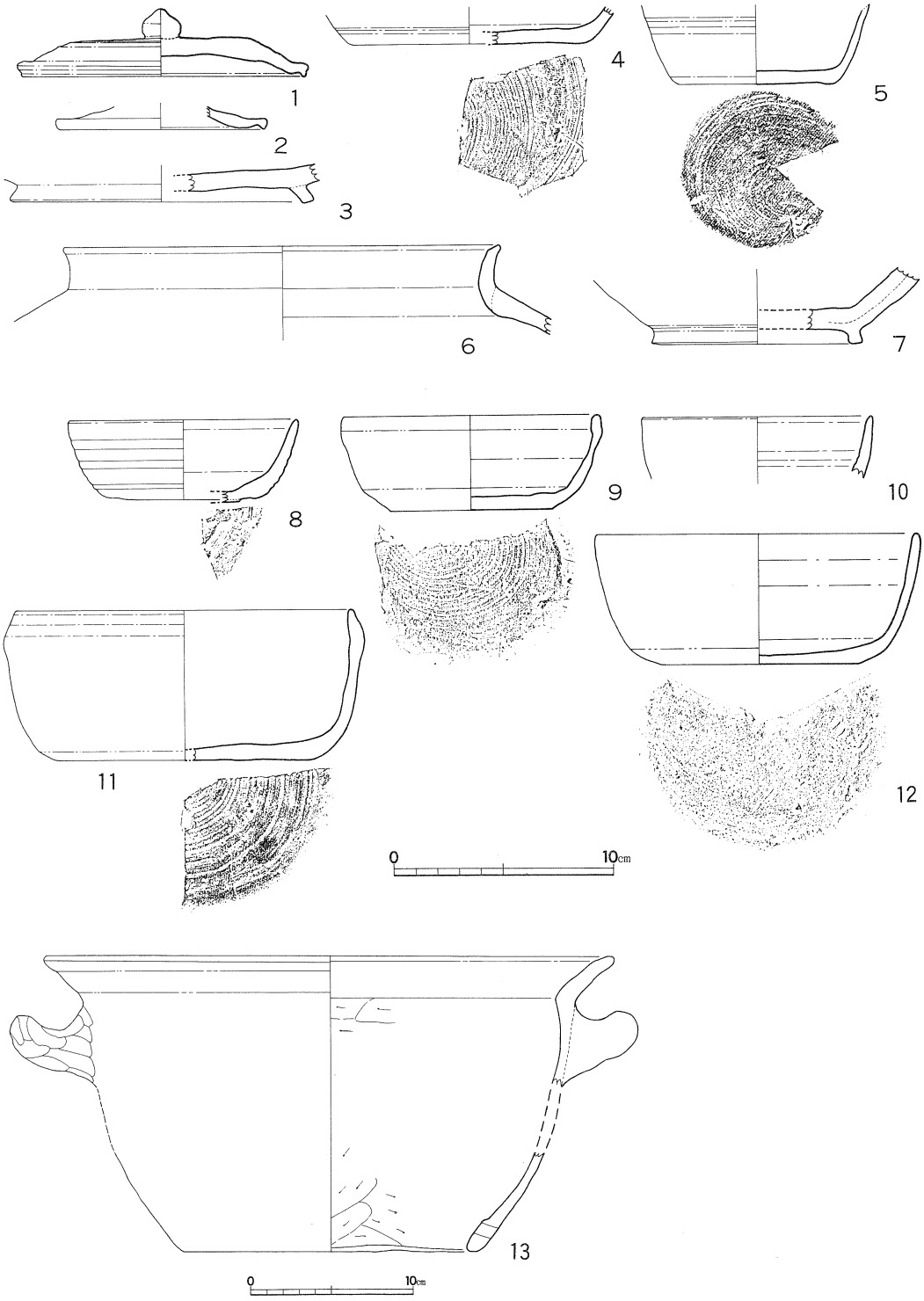
第44図　古曽志平廻田遺跡Ⅰ区SB-10上段遺物出土状況

に対して，9・11は逆に多少肥厚したようになっている。また，12の底部内面には使用による摩滅痕が認められる。土師器片は甑（第46図13）で，1個体分ではあるが，全体を復元できるまでには至らなかった。口縁部は甕形土器のそれのようにくの字状に屈曲し，胴部は張らず，底部に向って徐々に窄まる。頸部直下に把手が2個付き，底部付近には焼成前に開けられた穴が認められたが，穴の数は不明である。口縁部は内外面ともに横ナデ調整で，胴部内面は全面にヘラケズリを施している。外面の調整については遺存状態が悪く不明である。

SB05　SB10の南側に位置し，北側をSB10に切られており，東側もすでに一部流出していると考



第45図　古曽志平廻田遺跡Ⅰ区SB-10下段遺物出土状況



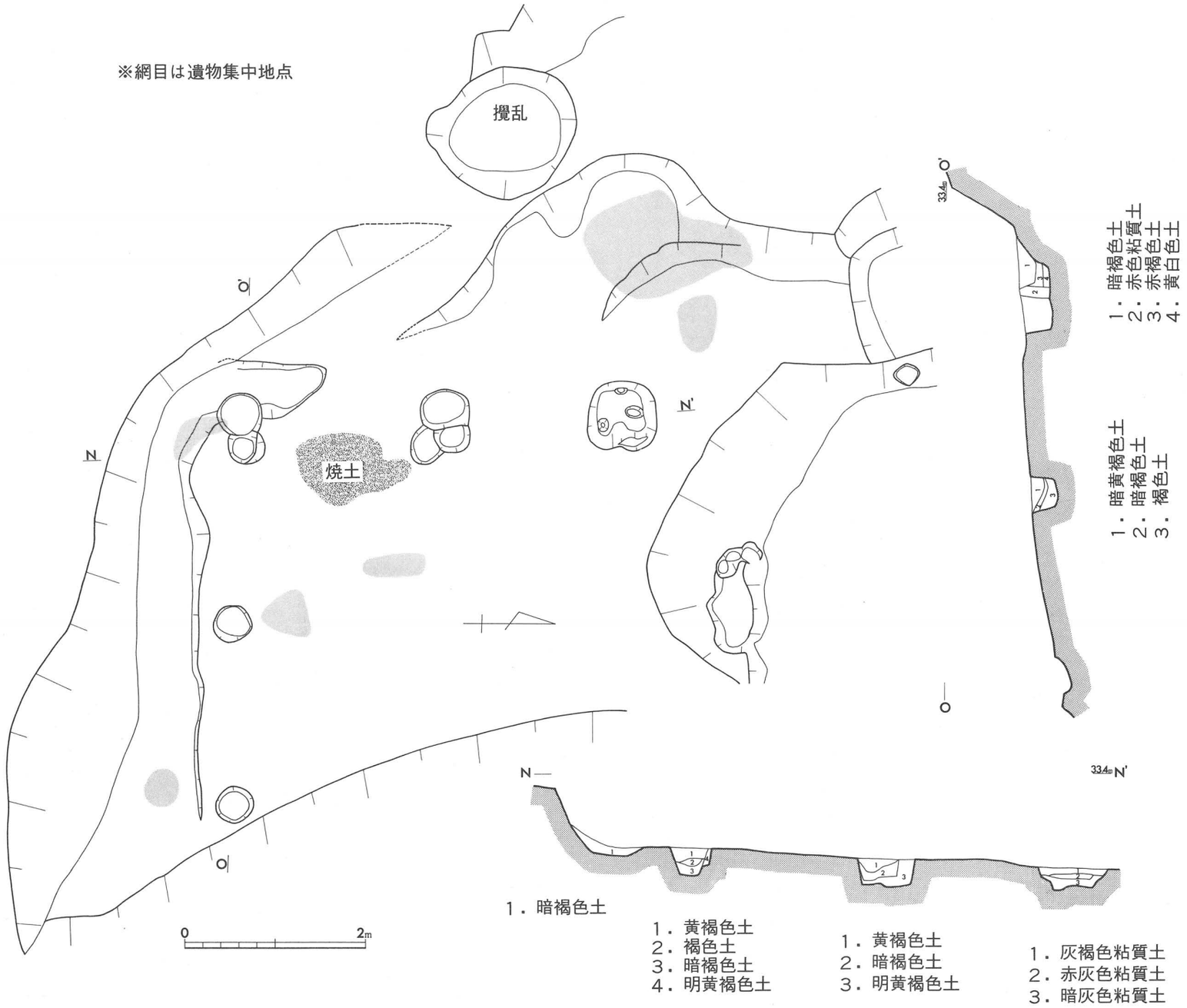
第46図　古曽志平廻田遺跡Ⅰ区SB-10出土遺物実測図
(1・3・5・7; 上段暗褐色土，2・4・6; 同赤褐色粘質土，8～13; 下段3層下面)

えられるが，それでも５m四方以上の平坦面を有している。壁は鈍角に開き，西壁は一度途切れてさらに段になる。南側の高さは約１mで，壁下に幅40～100cmの溝が廻るが，西壁では壁下に沿わず，柱穴列に沿うように直角に曲がり，間で途切れている。この溝は加工段をつくり出したのち，平坦面に貼土をして壁下だけ溝としたもので，柱穴は貼土上面から掘り込まれている。ただし南西コーナーの柱穴には，溝に切られた格好で検出されたものもあるので，のちに溝を掘り直したことがあるようである。掘立柱建物跡は，南壁面が加工段の南壁と平行になるような方向に建てられており，ほとんど同じ位置に３棟分検出された。建物規模は現存で桁行２間分（4.2m）×梁間２間（3.6m）である。建物内の南西隅で炭化物が80×90cmの範囲に確認され，その中のおよそ40cm四方から焼土が検出された。この焼土層は，厚さが３～４cmもあり，かなりの熱を受けたことが考えられる（第47図）。

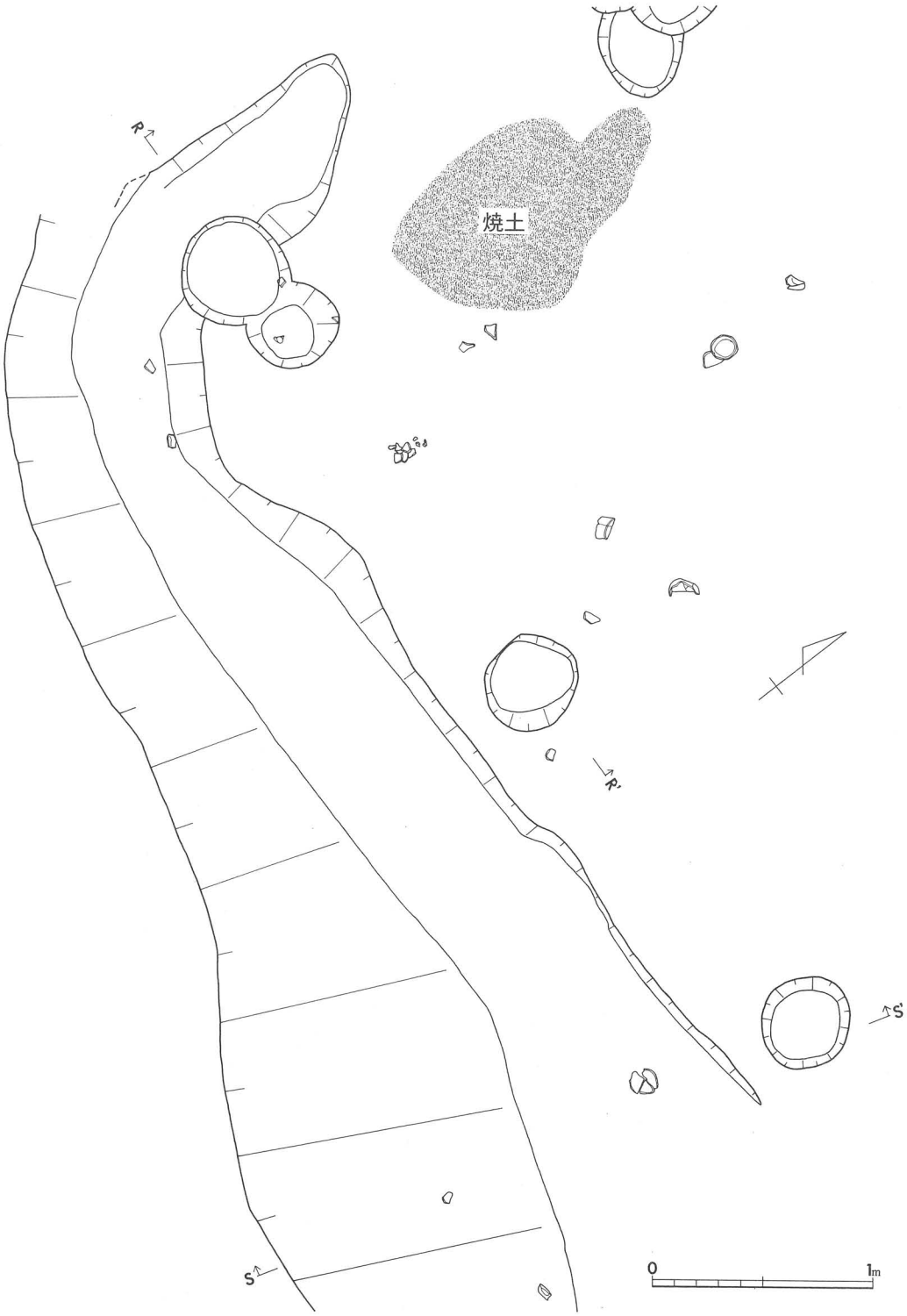
SB05からの出土遺物は少なかったが，平坦面の２ヶ所から集中して出土した。１ヶ所は，炭化物と焼土を検出した地点の東側で，溝に沿って坏類が散在していた（第48・49図）。これらのうち，貼床上面で出土したものは２点である。第53図６・７がそれで，６の坏は口縁端面が内側を向いた土器である。７も坏と考えられるが，床面がゆがんで内側に盛り上がっている。これら以外の須恵器は床面から25～30cm高いところで出土しており，掘立柱建物跡との直接的な関係を摑みきれない。もう一ヶ所の出土地点は，平坦面の北端，SB04との境の段になったところ（第49図）で，底面よりもやや浮いた状態で須恵器・土師器が出土した（第53図４・８・11）。このうち，４・８は底部外面に回転糸切り痕の残る須恵器坏片だが，全形を窺い知るほどの破片は認められなかった。11は土師器甕形土器で，胴部はさほど張らず，くの字状の口縁部は外反しながら開いている。口縁部内外面ともに回転ナデ調整で，頸部から下は外面刷毛目，内面ヘラケズリ調整を施している。

なお，SB05平坦面から東側斜面にかけて堆積していた暗褐色粘質土の中からも遺物が出土した（第53図１～３・５・10）。特に，３は徳利状の小形壷と考えられるもので，胎土に微細な黒っぽい粒子を含み，焼成も良好である。

SB11　SB05の南東斜面下方で検出した比較的大形の加工段である。平坦面の長さは約10.3mで，東側は調査区域外のため未調査である。掘立柱建物跡は２時期あり，新段階のものは古段階の地山床面に暗黄褐色土の貼床を行い，その上面から柱穴を掘り込んだものである。加工段の壁は山の斜面をなだらかに削っただけのもので，平坦面中央付近の壁裾から少し離れた位置に長さ約２mにわたって溝を検出したが，土層を観察する限りでは，この溝は貼床したあと掘り込んだものではなく，最初から溝のところだけ貼床をせず，そのまま溝を作り出したものと考えられる。検出した掘立柱建物跡は，桁行３間（約5.6m）×梁間１間（約2.2m）分で，柱穴は直径50～60cmの円形である（第50図）。平坦面南西隅の壁裾から柱穴付近を中心に，建物の廃絶後に堆積したと考えられる黒褐

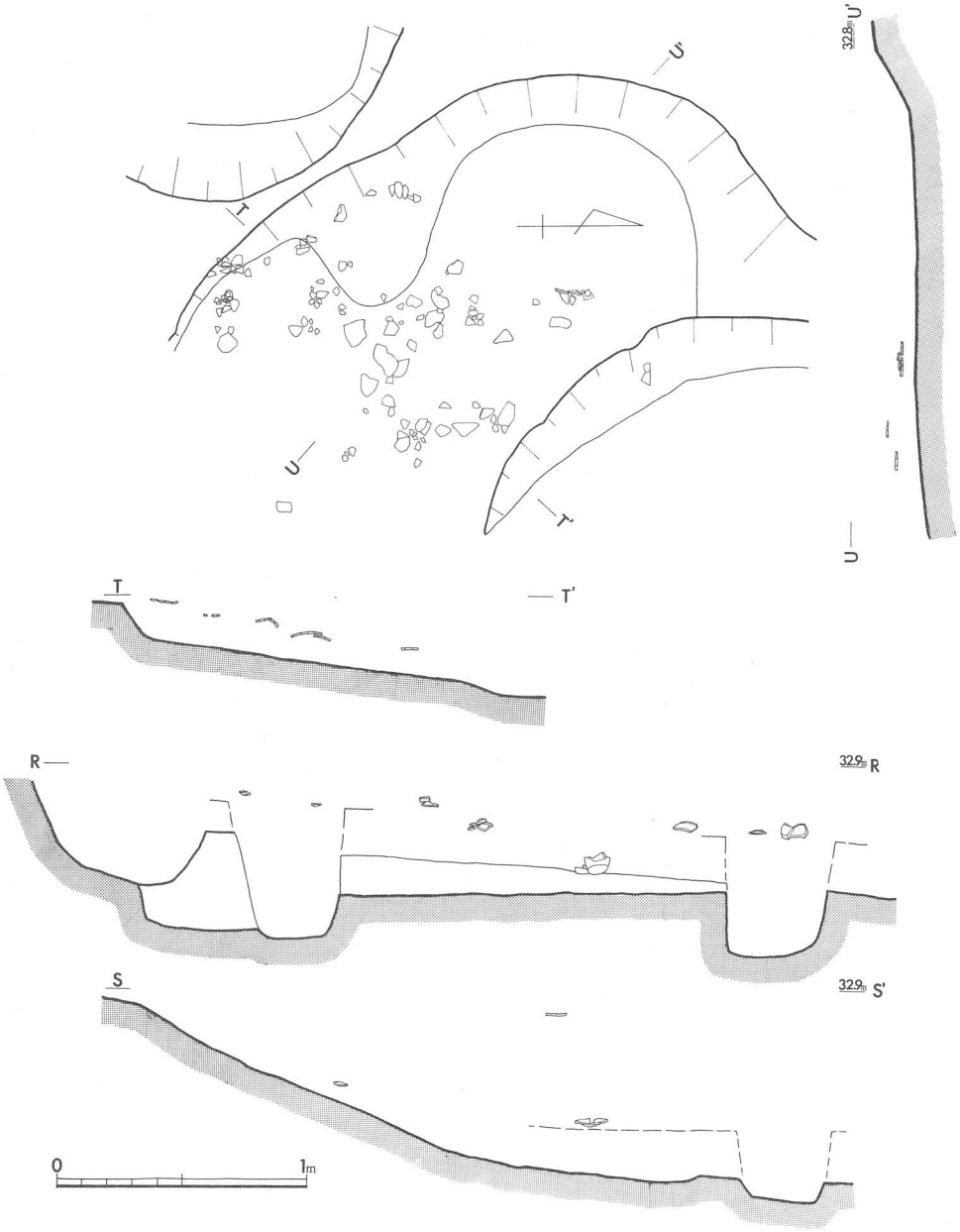


第47図　古曽志平廻田遺跡Ⅰ区SB-05実測図

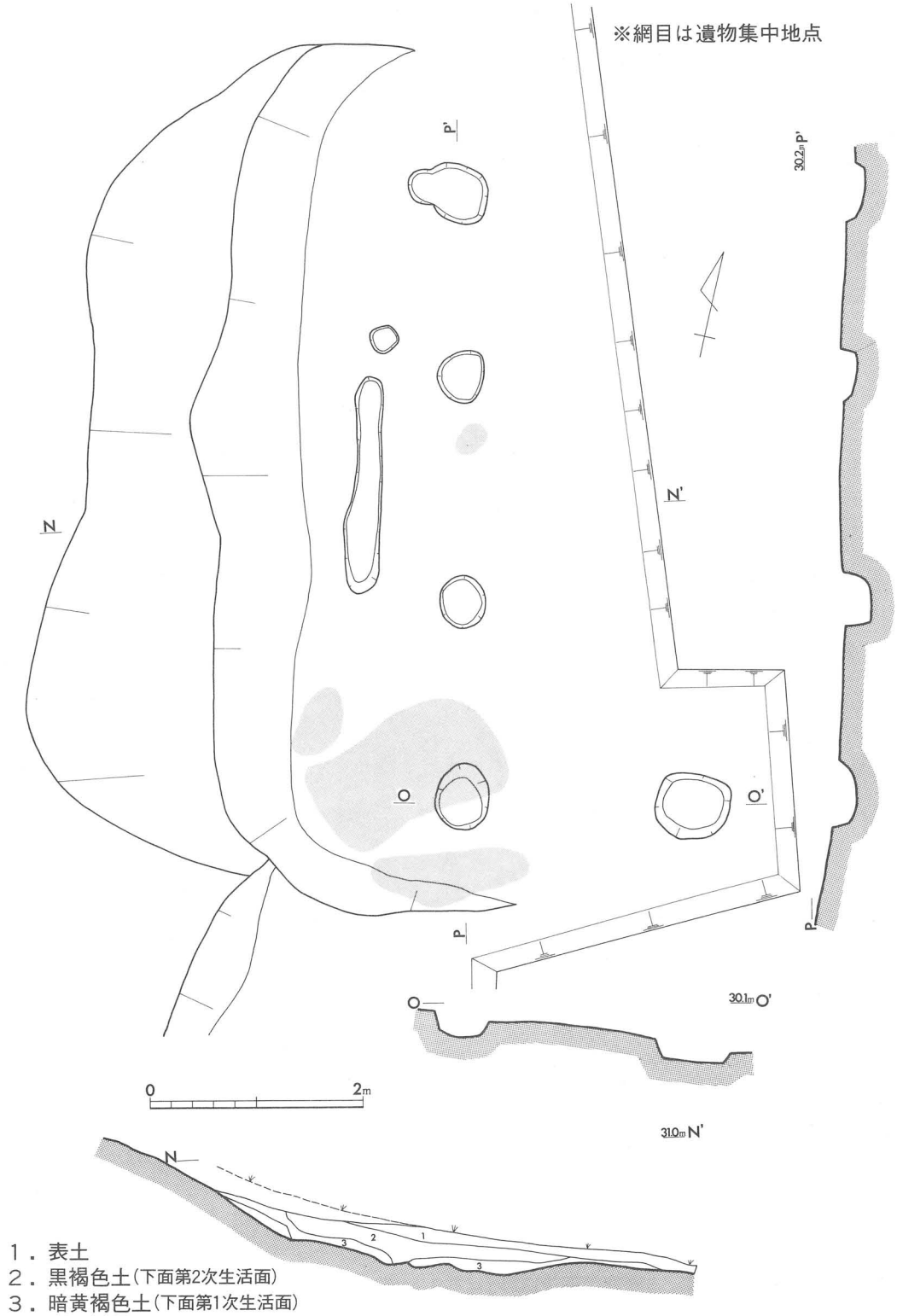


第48図　古曽志平廻田遺跡Ⅰ区SB-05遺物出土状況(1)

色土中から須恵器類が出土した（第51図）。須恵器はいずれも破片で，石などとともに散在しており，特に大きなまとまりとかは認められなかった。第53図12～15はSB11出土の蓋坏類で，12・14は壁面やSB13のピット埋土から出土した輪状つまみ付きの蓋である。つまみは高さ約0.8cmとやや高めで，端面を若干凹めているのが特徴である。天井部は平坦で外面回転糸切り後回転ナデ調整を行っ



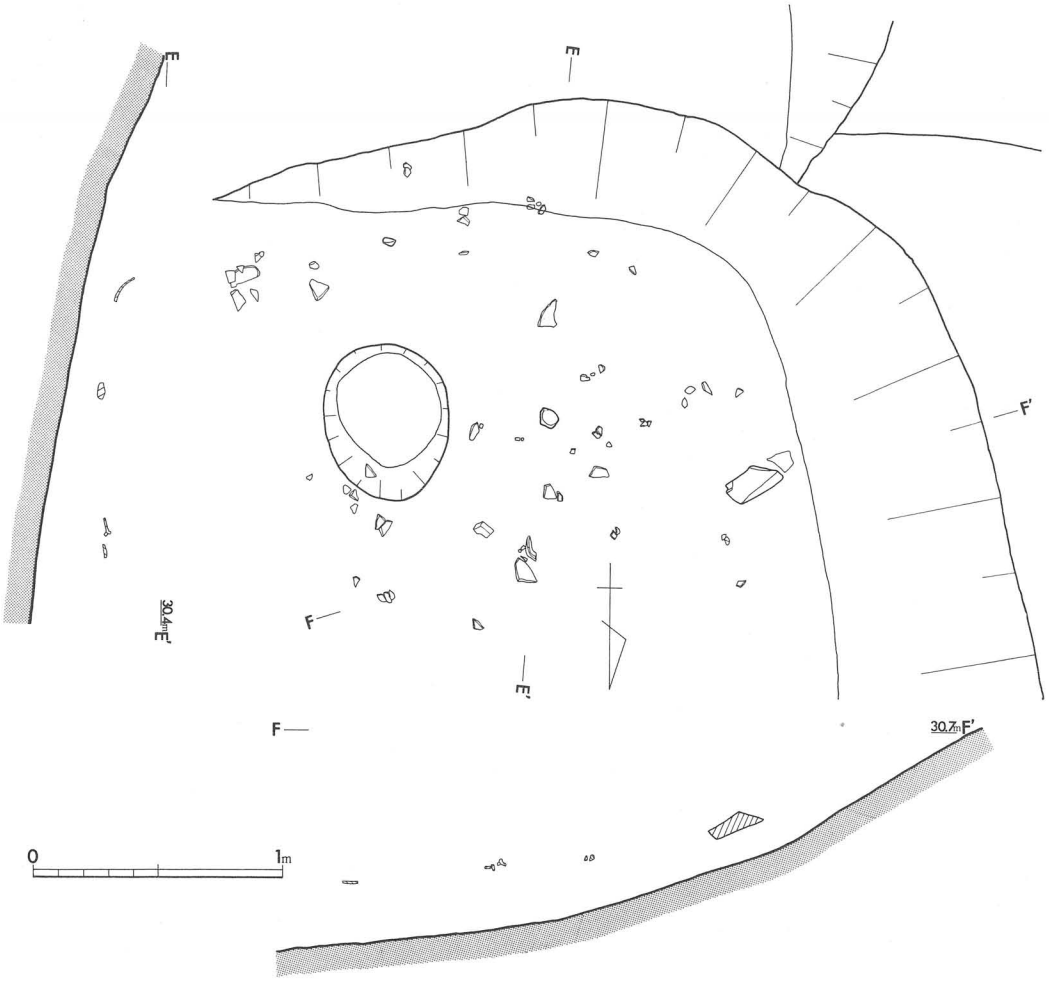
第49図　古曽志平廻田遺跡Ⅰ区SB-05遺物出土状況(2)



第50図　古曽志平廻田Ⅰ区SB-11第２次建物跡実測図

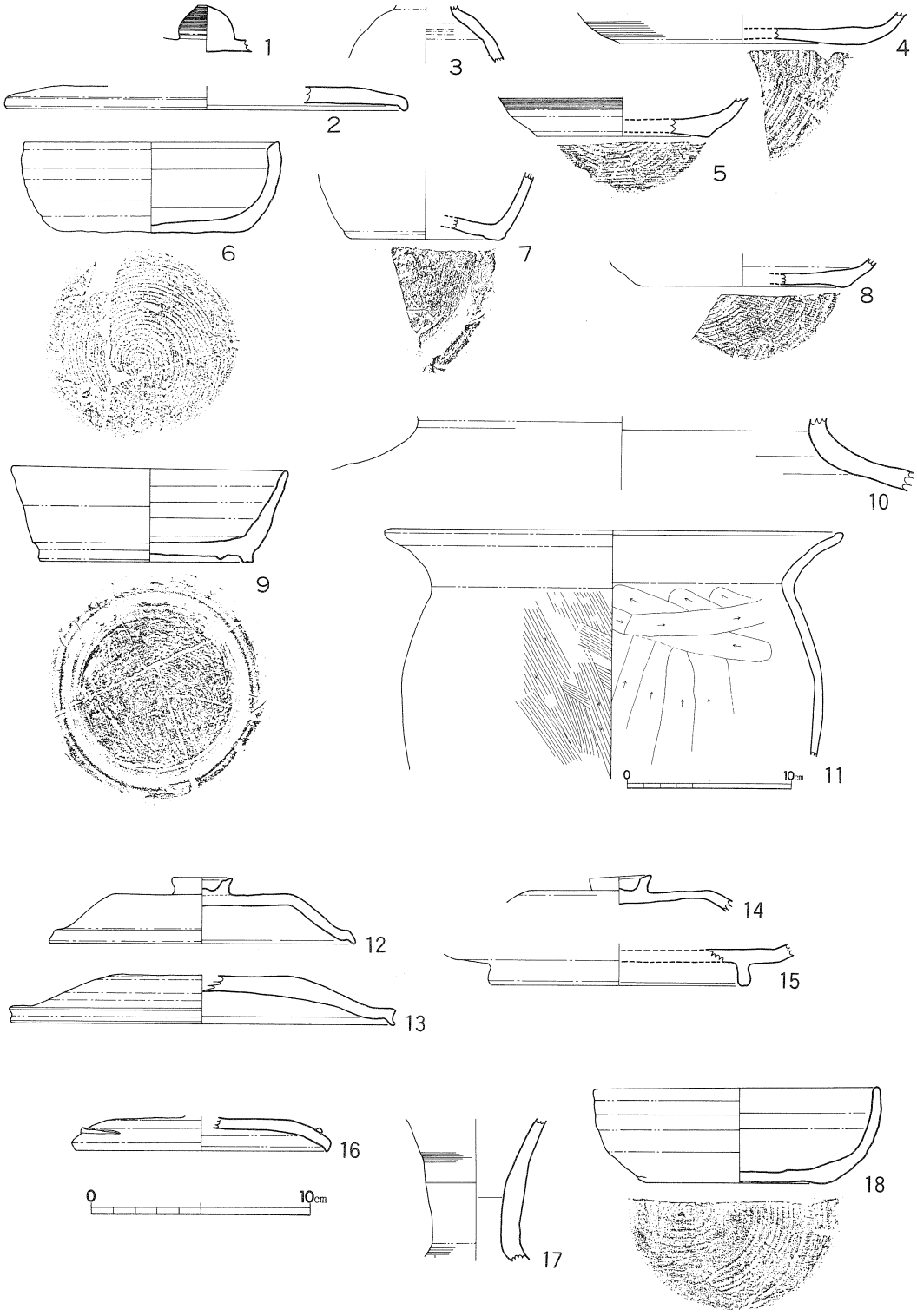
て糸切り痕を消している。口縁端部は短く屈曲して段をつくる。13・15は平坦面南西隅から出土した蓋と高台付坏で，坏内面は使用により表面がかなりツルツルしている。

SB11の第一次建物跡は，桁行４間（約7.7m）×梁間１間（約2.2m）分を出土した（第52図）。柱穴は直径60～70cmの掘り方円形で，深さも40～50cmと比較的しっかりしている。いずれの柱穴にも掘り方の浅い柱穴が重なっているので，一度建て直しを行ったと考えられる。深い方の柱穴の土層で確認した柱痕跡は，直径15cm程度の円柱である。古段階の床面や柱穴からは遺物は発見されなかった。



第51図　古曽志平廻田遺跡Ⅰ区SB-11第２次建物跡遺物出土状況

第52図　古曽志平廻田遺跡Ⅰ区SB-11第1次建物跡実測図



第53図　古曽志平廻田遺跡Ⅰ区SB-05・11・13出土遺物実測図
(1～11；SB-05．うち5～9は床面，12～15；SB-11．うち12・14は表土，13・15は第1次建物跡床面，16～18；SB-13 床面)

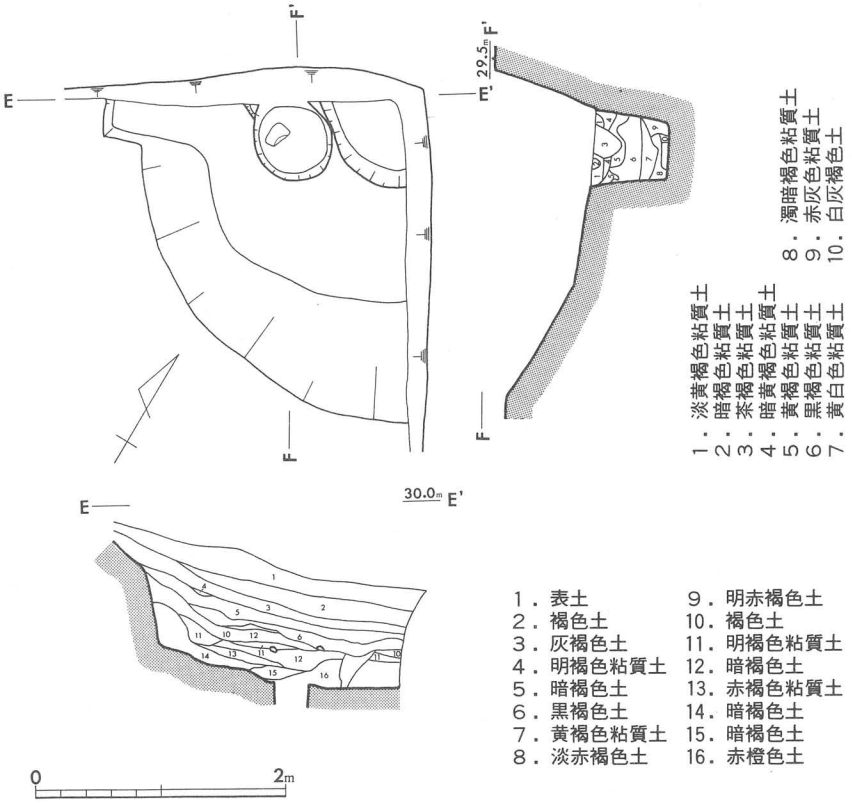
SB13　SB11の北側で検出した加工段で，直径・深さとも約60cmの大形の柱穴も検出したが，平坦面や建物跡の規模を明らかにすることはできなかった（第54図）。床面から若干遺物が出土しており，第53図17は須恵器長頸壺の頸部片，18は坏身である。16は柱穴の流入土（黄褐色粘質土）から出土した蓋で，外面に焼成時の重ね焼きによる別個体口縁端の付着が認められる。

以上の加工段・掘立柱建物跡のほかに，斜面に縦方向に走る溝状遺構を２条検出した。

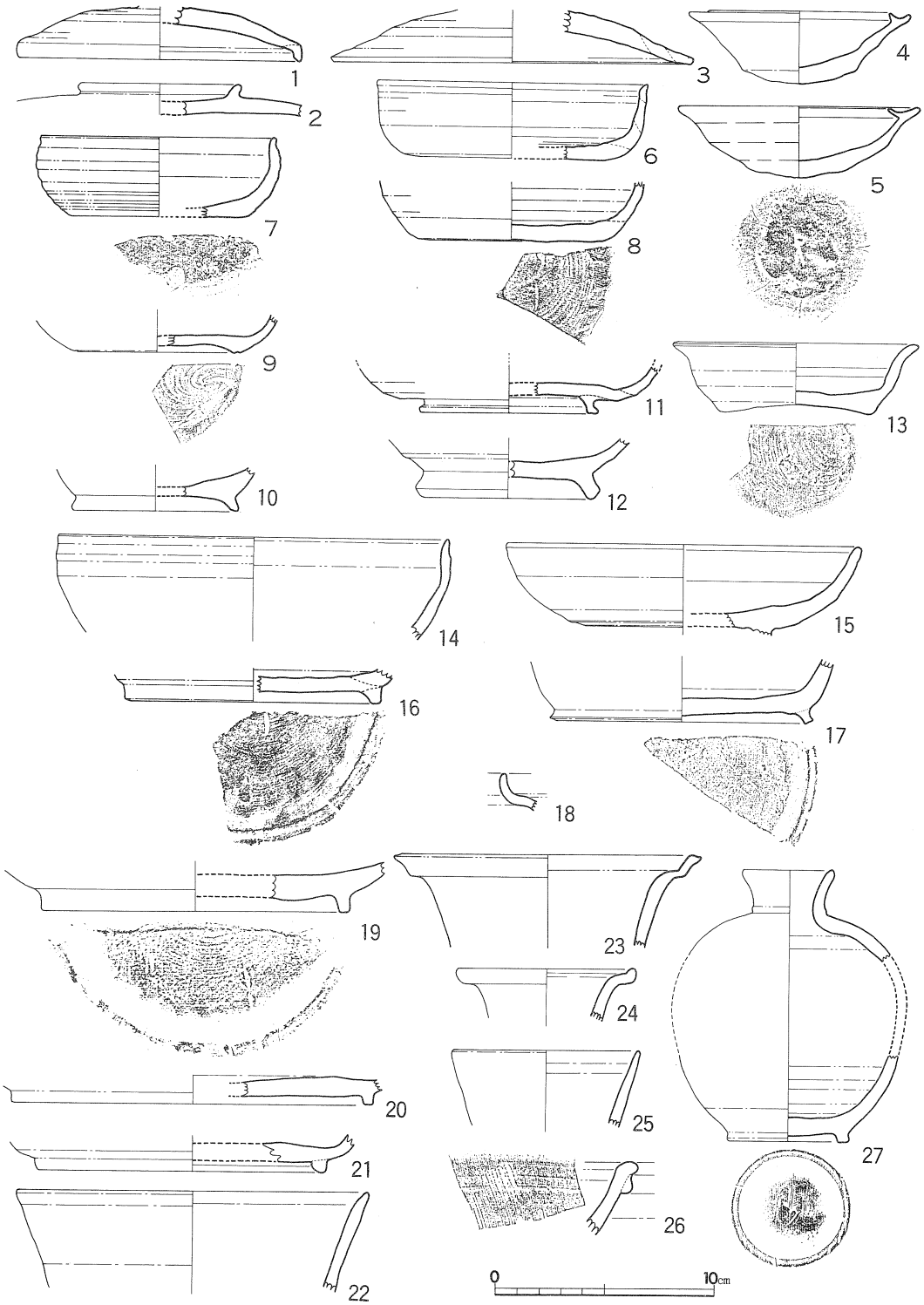
SD01　Ⅰ区のほぼ中央を，地山を掘り込んで逆Ｓ字形に緩やかに下る溝で，全長約21ｍを測る（第34図）。斜面の上半分は，幅約３ｍ，深さ約30cmの浅く幅広い溝で，SB03付近から下の半分は幅が70～80cmと狭くなる。溝内には暗褐色土が堆積し，SB03との前後関係等については把握しきれなかった。また溝に伴う遺物も発見されなかった。

SD02　SD01の南側，殿様道に沿うように検出された溝状遺構である。全長９ｍで，等高線に直交する形にまっすぐ斜面を下っている。上端は幅30cm程度だが，斜面を下るにつれて徐々に幅が広くなり，下端では２ｍを測る。横断面は浅い弧状になり，斜面下半では底面が階段状になっている（第40図）。溝状遺構東端は別な加工段につながっているが，加工段の詳細については不明である。SD01と同様に，遺物は出土しなかった。

Ⅰ区で検出した遺構とそれに伴う出土遺物は以上のとおりであるが，Ⅰ区ではそれ以外に，試掘トレンチや遺構群以外の斜面で，表土やその下層の暗褐色粘質土からも遺物が出土しているので，以下にその一部を紹介する（第55図）。



第54図　古曽志平廻田遺跡Ⅰ区SB-13実測図



第55図　古曽志平廻田遺跡Ⅰ区遺構に伴わない遺物実測図
(1・13・14・19～21・24；暗褐色土，9・11；黄褐色土)

1～3は蓋で，1・3はともにつまみ部を欠損するが宝珠状つまみが付くと考えられる。どちらも内外面回転ナデ調整を行ったあと，内面中央はさらに不定方向のナデ調整を施している。1の口縁は端部が直立し，内面屈曲部に沈線がはいるのに対し，3は端部に屈曲がなく，内面に沈線が施されるのみである。4・5は口縁に受け部を有する坏で，蓋坏がいわゆる小形化して蓋と身が逆転する段階のものと考えられ，蓋なのか身なのか判然としない。7世紀前半代のものである。内外面ともに回転ナデ調整で，底部（あるいは頂部）はヘラ切り後，ナデ調整を行う。6～9・13は坏類で，底面には回転糸切り痕が残り，体部は回転ナデ調整である。7の底部から体部にかけてが丸みを帯びるのに対して，6は若干直立ぎみになる。また，口縁端部は，7が軽くつまんで外反させるのに対して，6は同じ手法ではあるものの，内上面を平坦に作り出したものである。9・11は器厚が薄手の須恵器で，他の坏類よりも年代が新しくなると考えられる。13は口縁部の外反する坏で，今までの坏類の形態とは様相を異にする。14も坏の破片だが，口縁径が18cm程度の大形品である。高台付坏はいずれも破片で完形品は一点もなかった。11は薄手で直径の小さい高台が付く土器だが，高台の位置が他の坏類と比較して底部中央に近く，あるいは輪状つまみ付きの蓋の可能性もある。12は高台をやや厚手でしかも高く作り出したもので高さ約1cmを測る。高台の先端部は10・16のように丸く収めるものと，17のようにシャープに角を作り出すものとがあり，底面は回転糸切り痕をそのまま残している。19・20は盤と考えられる底部片で，上述の坏底部よりも高台径がひと回り大きい土器である。体部は丸く立ち上がり，端部は外反すると考えられる。

23は瓶の口縁部で，復元口径約14cmを測る。頸部は外反ぎみに立ち上がり，逆くの字形に屈曲して口縁端部に至る。端部は上面に若干の凹部があり，段状になる。古墳時代の遺物である。

24・25は提瓶または平瓶の口縁と考えられるもので，24が頸部から口縁端部までほぼ同じ器厚で作られているのに対し，25は口縁端部まで直線的に，しかも徐々に薄く作り出されている。どちらも黒色の微細な砂粒を含み，焼成も良好である。18は小形短頸壺の口縁部である。

27は小形の徳利形の土器で，推定で器高12.4cmを測る。8世紀代ごろのものであろうか。胴部はやや縦長ではあるがほぼ球形に近く，頸部は短く反転して口縁は単純に収める。底部には高さ3mmの高台が付き，高台内側には「見」あるいは「具」の刻字が認められる。島根県内で土器にヘラ書きの文字が発見された例は，出雲国庁跡出土須恵器をはじめ，松江市西忌部町湯峠窯跡・八束郡玉湯町史跡出雲玉造跡・大田市水上町白坏遺跡等の須恵器があり，8～10世紀代の坏類に多く認められる。当遺跡では小形壺に書き込まれており，また「見」あるいは「具」の文字も珍しい例といえる。

26は擂鉢の口縁部である。外面に丸い突帯を付け，擂目は一部口縁上端まで達する。時期は不明。

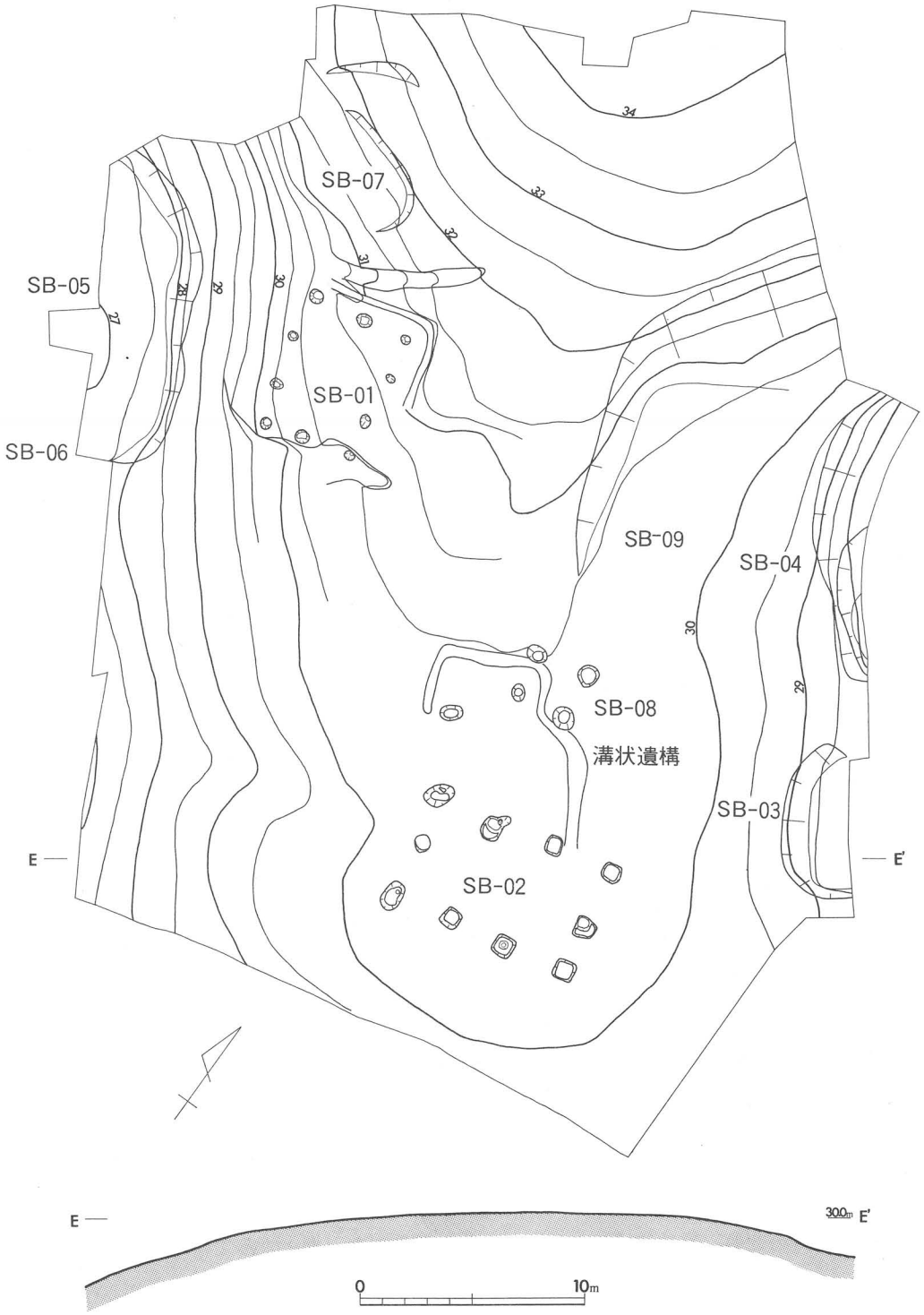
(2) Ⅱ区の調査

平廻田遺跡の南東端に位置し，尾根上の広い平坦面とその東西両側斜面から掘立柱建物跡や加工段を検出した。加工段は全部で７ヶ所でその内の１ヶ所から掘立柱建物跡を検出したが，その他では確認されなかった（第56図)。加工段すべてに建物があったとは考えられないが，ここでもⅠ区と同様に発掘調査時の遺構番号を踏襲し，発見順に報告する。

SB01　西側斜面の尾根頂部よりごくわずか下がったところに位置する。尾根の稜線に沿って長さ約７ｍ，幅約5.5ｍにわたって平坦面を作り出し，その北側には平坦面への水の流入を防ぐかのように深さ約15㎝の溝が，斜面に縦に長さ6.5㎝にわたって削り込まれている。平坦面の北辺および東辺には壁が廻り，東辺で高さ約40㎝を測る。また壁下には幅約30㎝の溝も廻っている。平坦面を削り出した後，床面に貼土を行っており，この溝もその際，土を貼らずに溝としたものである。貼床の上面で掘立柱建物跡１棟を検出したのみで，建て直しは行われなかったと考えられる。建物跡の規模は，縦行３間（約5.5㎝)×梁間２間（約4.5ｍ）で，柱穴の掘り方は円形である。柱穴の深さは約60㎝で，土層で観察される柱の太さは約25㎝である（第57図)。

建物跡内の東端の床面から焼土に伴って土製支脚と五徳石が，その他の部分から土師器片が出土した。また，流入土の暗褐色粘質土中からは蓋などの須恵器類も多く出土している（第59図１～10・12)。１～４は低い輪状つまみの付く蓋で，口縁部はかえりを持たず，直立するか若干内傾して屈曲する。外面上面には回転ナデ調整の前にヘラケズリを行った痕跡が残り，２の内面中央には表面が摩滅して滑らかになっているところがある。５～８は坏片で，５の底面は回転糸切り後，糸切り痕をナデ消してヘラ記号「×」を，８の底面は静止糸切り後やはり糸切り痕をナデ消してヘラ記号状の「ｋ」または「キ」の刺突を施している。このヘラ記号状の刺突は，長径７㎜，短径5.5㎜の楕円形を呈しており，その原体はちょうど現在の印鑑のようなものと考えられる。９は坏の脚部で坏部との接合部で割れており，脚高３㎝を測る。外面から沈線状の透しが施されている。10は壷の底部で外面はヘラケズリである。12の土製支脚は，腕を２本もち，小突起をもたないタイプで，胴部中央に一方向から孔を開けているのが特徴である。全体に強いナデ整形を行い，底部はドーム状のあげ底である。なお，床面出土土師器については，細片で図化できるものがなかった。

SB02　当遺跡内で最も大形の掘立柱建物跡で，遺跡南端尾根上の平坦部にあり，溝や加工壁を持たない。建物規模は桁行３間（約8.2ｍ)×梁間２間（約4.8ｍ）で，柱間の間隔は約2.7ｍと2.4ｍである。柱穴の掘り方は一辺60～90㎝の方形で，深さも60～90㎝である。なお，西側梁間中央の柱穴については，大きな切株があって調査不可能であった。10個の柱穴のうち６個で柱痕跡を確認したが，その太さは20～25㎝ほとであった。また，建物北西隅の柱穴では，床面から30㎝程度の深さのところに厚さ５㎝程度の炭化物層を柱穴全面で検出した。同層の下面はわずかながら焼けてお



第56図　古曽志平廻田Ⅱ区地形測量図

り，柱痕跡も認められないところから，建物が廃棄消滅したあと，その窪みを利用して火を焚いたことが考えられる（第58図）。床面からは土器や焼土など生活の痕跡を留めるものは出土しておらず，しかも総柱建物ではないにしろ，かなり大形の建物跡であることから，この掘立柱建物跡は集会所あるいは倉庫のようなものではなかったかと考えられる。

なお，SB02付近でも遺物を若干含んだ層があり，そこから須恵器が出土している。第59図11もそのひとつで，小片ながら壷の底部と考えられる。

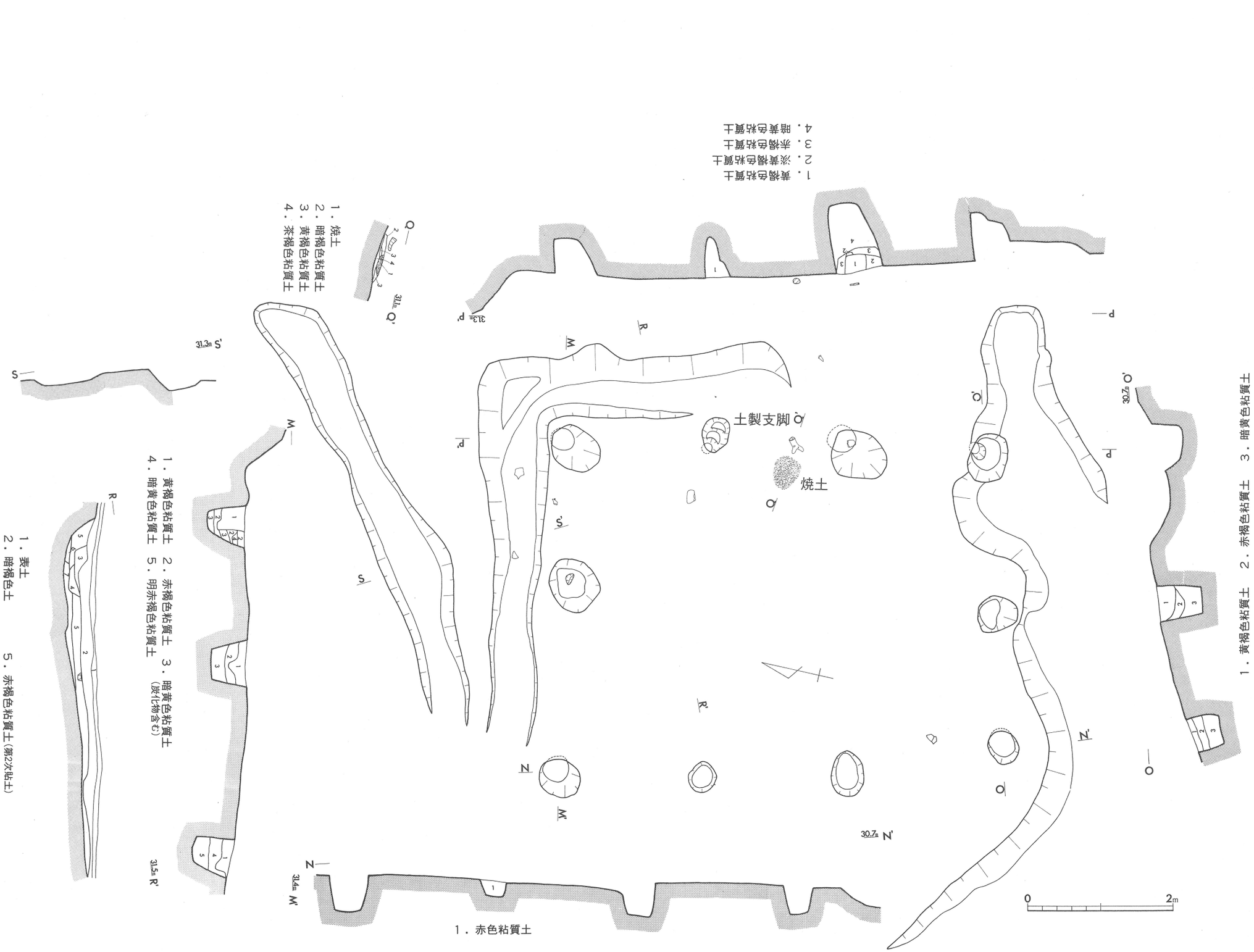
SB03・04　東側斜面のほぼ同じ標高で確認された加工段である。SB03は全長約７m，壁高約0.6m，SB04は全長約13m，壁高１～1.1mを測る長方形プランの加工段と考えられるが，調査区端のため柱穴は確認できなかった。しかし，SB03では床面に一度貼土を行っており，その上面から須恵器・土師器が出土している（第60図）。第61図１・２は須恵器蓋と甕の口縁部片で，小片のため全体を知るまでに至らない。３は土師器のカマド底部片と考えられる。底面が幅広で安定感があり，外面には縦方向に刷毛目調整痕が残る。同図４はSB04の遺物包含層出土の須恵器坏片で，底面は回転糸切り放しのままである。

SB05・06　尾根の西側斜面，SB01の下方に位置する。ほぼ同じ標高に，北側に05，南側に06とふたつ並んだ形で検出したが，掘り進むにつれ，つながっていることが判明した（第56図）。加工段の全長は約14m，壁の高さは約１mで，底面はすでに流出しており，平坦面はあまり残っていなかった。また柱穴等も確認されなかった。

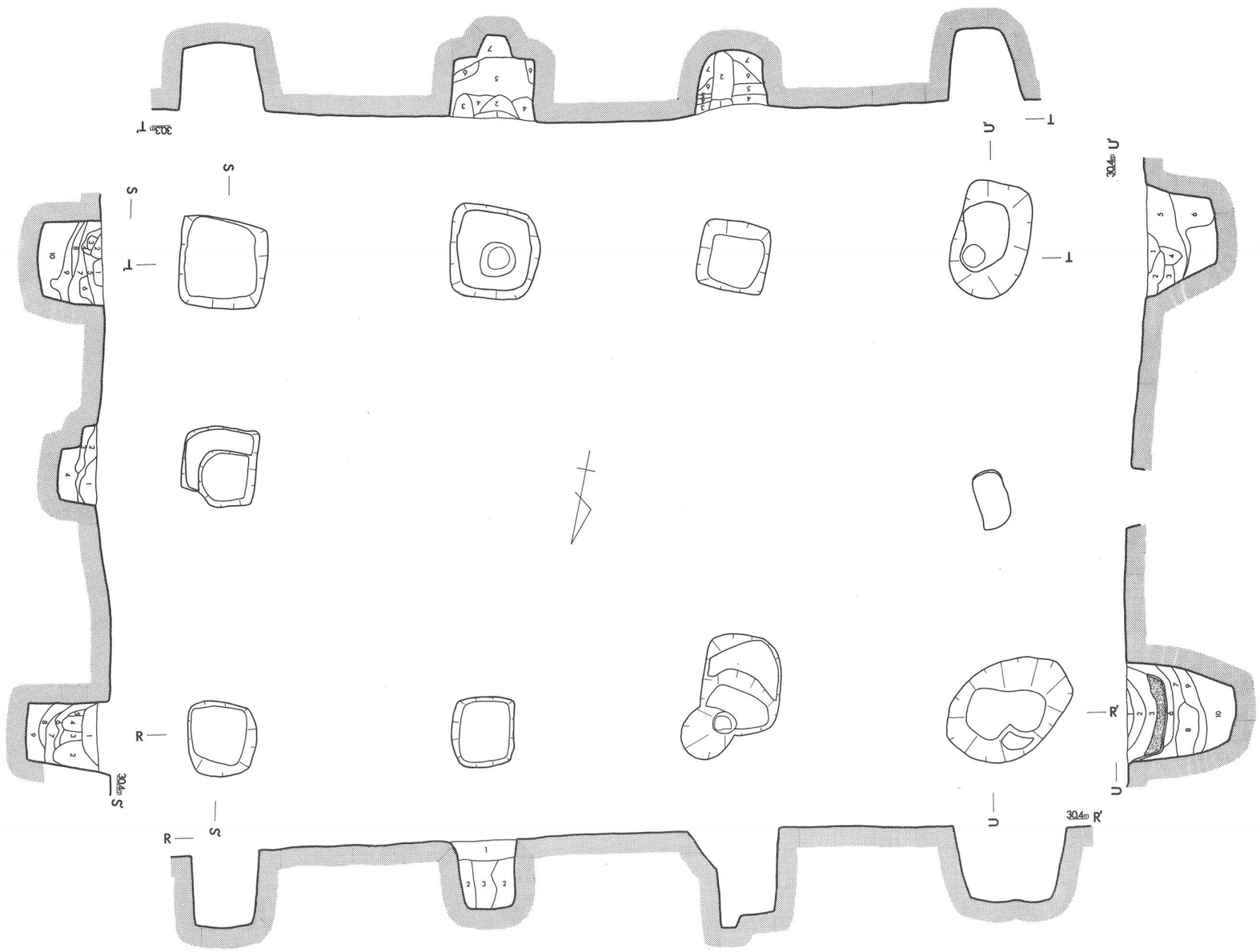
加工段に堆積した暗褐色粘質土から遺物が少量出土している。第63図１はSB05側から出土した須恵器壷片で，２～４はSB06側から出土した蓋坏類である。２は口縁端部が短く直立するもので，復元口径15.1cmを測る。３・４はともに回転糸切りののち高めの高台を貼り付けた坏で，４は丸く，３はやや直線的な体部である。２・４は奈良時代，３は窯跡の資料に近い時期と考えられる。

SB07　SB01の北側で検出した加工段で，長辺5.5m，短辺約３mにわたって鍵状に比高約20cmの段がつけられている。明確な平坦面はなく，柱穴等は存在しなかった（第56図）。加工段を覆う灰褐色粘質土から須恵器片が多数出土している（第63図５～10）。５は小形の壷の底部，７はかえりを持つ蓋の口縁部である。６と８は坏・皿の底部片で底面には回転糸切り痕が残っており，８の体部と底部との境には，沈線が２条廻っている。９・10は高台付坏片で，体部はともに内外面ともに回転ナデ調整である。７・８とその他と二時期に分けられる。

SB08　SB02の北側，尾根筋の傾斜がなくなり，平坦になったところで検出した遺構で，柱穴４個の１間×１間の建物跡と考えられる。柱間距離は2.6m×2.2mで，北東の柱穴のみ浅いのは，あるいは掘り足りていなかったものかもしれない。東南の柱穴底面には，直径20cm程度の礫を根石にしているのが観察された（第62図）。



第57図　古曽志平廻田遺跡Ⅱ区SB-01実測図



U
U'
R
R'
S
S'
T
T'
30.4m
30.3m
0
2m

1．赤褐色粘質土
2．赤灰色粘質土
3．暗灰褐色粘質土

1．暗褐色粘質土
2．淡黄灰色粘質土
3．赤黄灰色粘質土
4．炭化物
5．焼土
6．緑灰色土
7．赤色土
8．暗灰色土
9．赤黄色土
10．黄白色土

1．暗褐色粘質土
2．褐色粘質土
3．灰褐色粘質土
4．暗灰色粘質土
5．橙白色粘質土
6．黄白色粘質土

1．暗褐色粘質土
2．淡赤褐色粘質土
3．赤褐色粘質土
4．暗灰褐色粘質土
5．赤褐色粘質土
6．黄茶色粘質土
7．灰茶色粘質土
8．暗灰色粘質土
9．淡黄茶色粘質土

1．暗褐色粘質土
2．褐色粘質土
3．灰褐色粘質土
4．赤褐色粘質土

1．暗灰褐色粘質土
2．暗褐色粘質土
3．黄褐色粘質土
4．灰褐色粘質土
5．暗黄褐色粘質土
6．白黄色粘質土
7．暗灰褐色粘質土
8．赤黄褐色粘質土
9．桃色粘質土
10．灰黄褐色粘質土

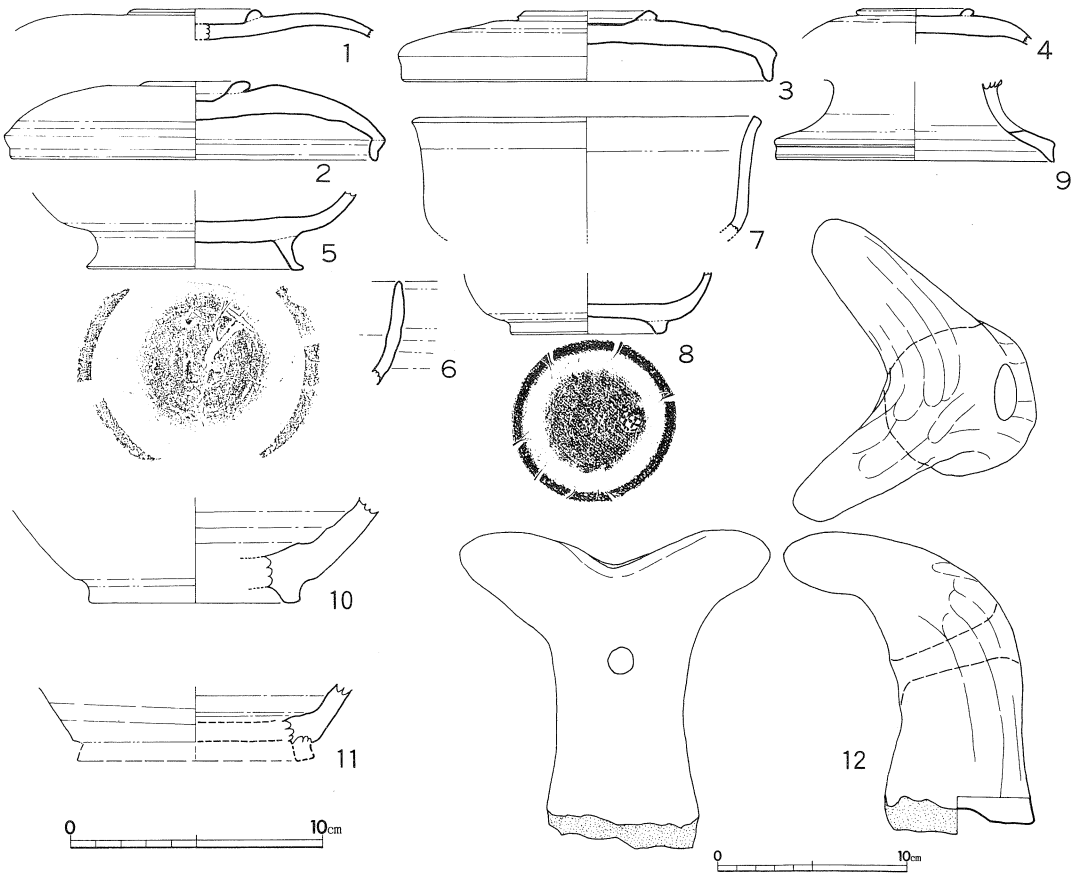
1．暗褐色粘質土
2．灰褐色粘質土
3．赤褐色粘質土
4．黄白色粘質土
5．灰褐色粘質土
6．暗赤褐色粘質土（黄白色粘質土混入）
7．暗赤褐色粘質土

1．暗褐色粘質土
2．褐色粘質土
3．黄色粘質土
4．赤黄色粘質土
5．暗灰褐色粘質土
6．黄白色粘質土
7．白黄色粘質土

第58図　古曽志平廻田遺跡Ⅱ区SB-02実測図

このSB08付近ではその他に鍵状に廻る溝と浅い土壙を１つ検出した（同図）。溝は幅40cm，深さ10～15cmのもので，内には暗黄褐色土が堆積するが遺物を含んでおらず，時期を知る手掛りがないが，後世に作られた可能性が強い。浅い土壙はこの溝の一端にあり，長径1.05m，短径0.75mの楕円形を呈する。土壙底面に焼土層と炭化物層が認められたが，用途は不明である。遺物は出土していない。

SB09　SB08の北側でSB04の斜面上方に位置する。尾根のくびれの部分にあたっており，北壁・西壁ともに長さ10m程度にわたり，大きく加工を施しているが，平坦面には柱穴等は観察されなかった（第56図）。ここで注目されるのは，この加工段と西側SB01との間の斜面で，ちょうど尾根の頂部に相当するところである。この部分には明確な加工はないものの，東西両側斜面を加工段で削り取られているため，この部分はちょうど，北西尾根方面からSB08やSB02へ向かうための陸橋のような働きをしていたと考えられる。

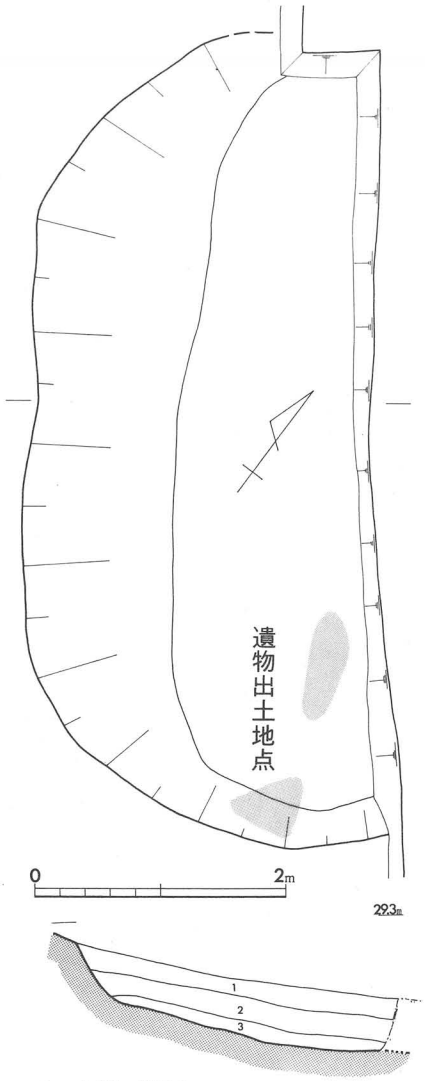


第59図　古曽志平廻田遺跡Ⅱ区SB-01・02出土遺物実測図（11のみSB-02，12は1/4）

Ⅱ区で検出した遺構とそれに伴う遺物は以上のとおりであるが，ここでも遺構に直接伴っていない遺物がかなり存在するので，その内の須恵器類をここで併せて紹介しておく（第64図）。

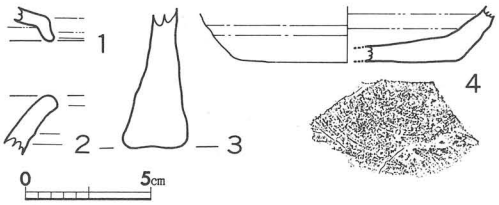
1～3は輪状つまみの付く蓋で，1は口縁部にかえりを持ち，外上面はヘラケズリを施している。2・3は調整は近似するが，つまみの形態に違いが認められ，7・8のように口縁部にかえりを持たず，短く直立する蓋も輪状つまみが付くと考えられる。一方，4～6は宝珠状つまみ付きの蓋で，外上面には回転糸切り後，つまみを付けて回転ナデ調整を行うが，糸切り痕が明瞭に残っている場合が多い。天井部は平坦で口縁に至る部分も直線的に作り出す。口縁端部は四角くし，内面に若干の凹部を廻らせて下端をわずかながら突出させるものが多いが，中には6のように全く平坦に作るものもある。9・10も宝珠状つまみの付く蓋である。11～14は坏で，体部は内外面ともに回転ナデ調整を行い，底部には回転糸切り痕をそのまま残す。高台付坏には，15のように体部がゆるやかに湾曲しながら立ち上がるものと，17・19のように直線的に開くものがある。18は小形の坏と考えられるもので，貼付部から高台を欠損する。器形の感じから小形の壷の可能性もある。26・27は盤だが，高台を26は断面M字形にして低く作り，27は丸みをもたせて高く作っているのが特徴的である。

20～25は壷類である。22・24は長頸壷で，22は

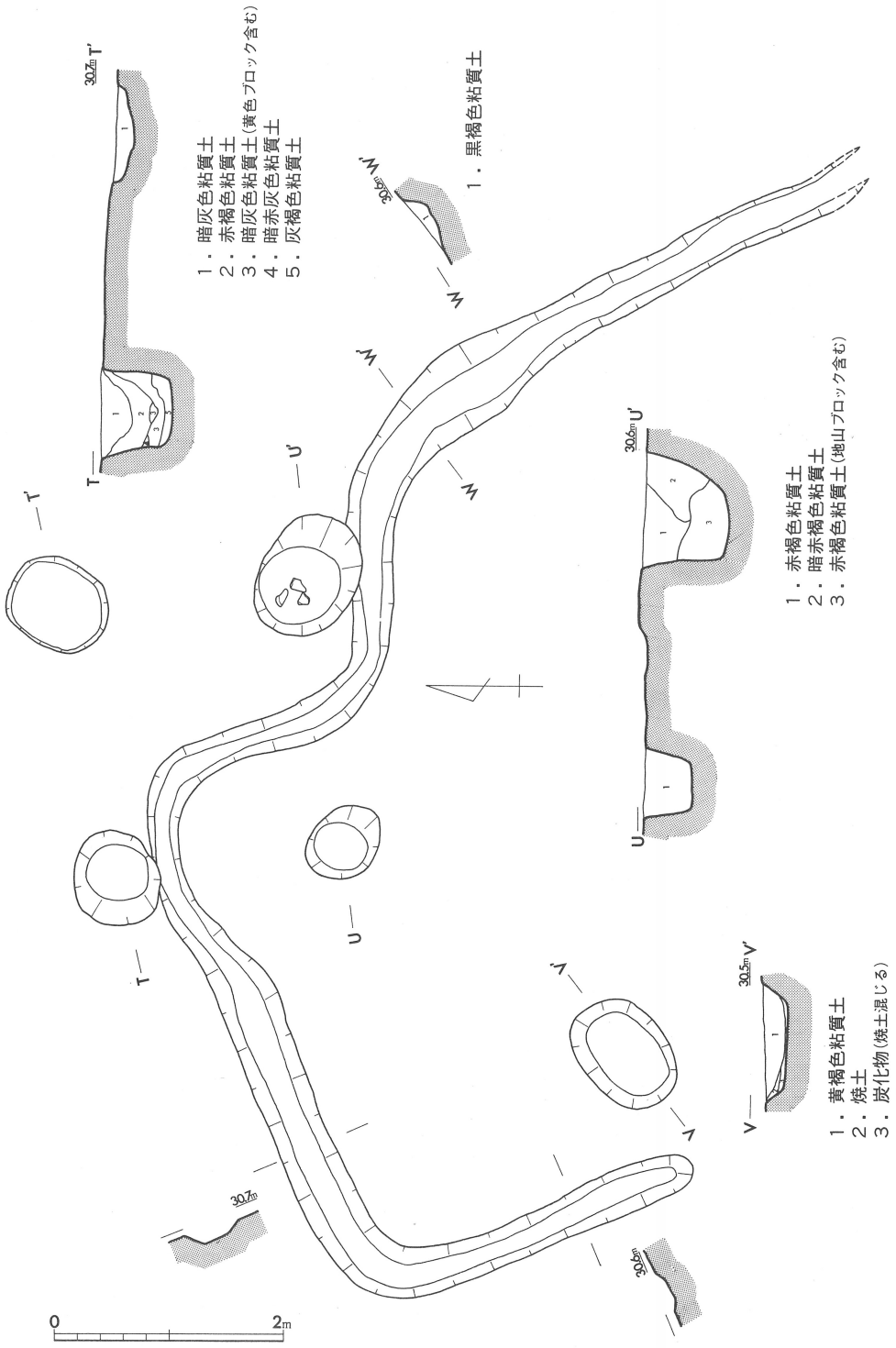


1．赤褐色粘質土
2．暗黄褐色粘質土
3．黄褐色粘質土

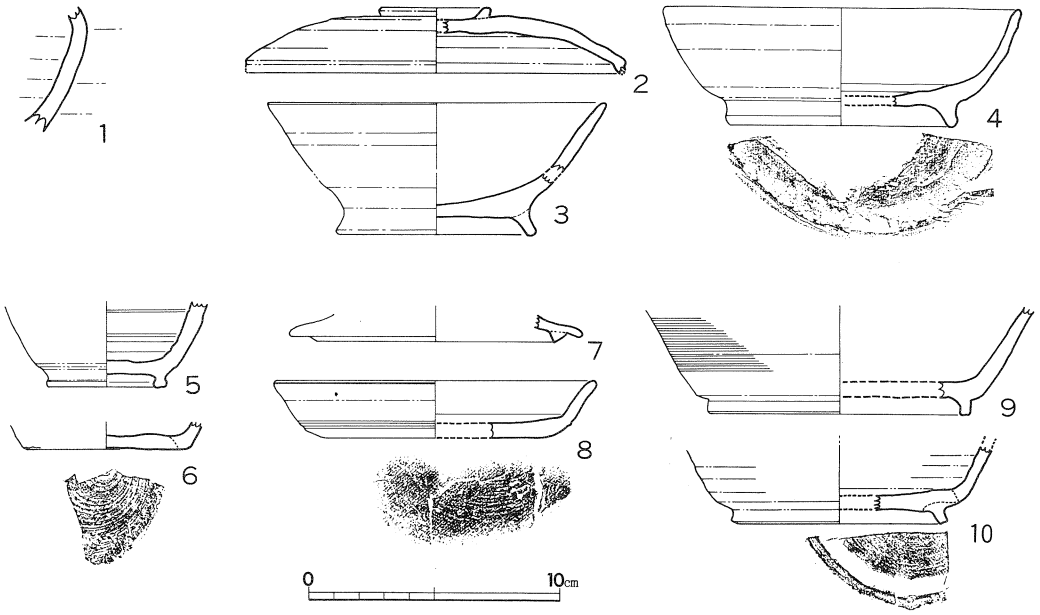
第60図　古曽志平廻田遺跡Ⅱ区
SB-03実測図



第61図　古曽志平廻田遺跡Ⅱ区
SB-03・04出土遺物実測図（4のみSB-04）



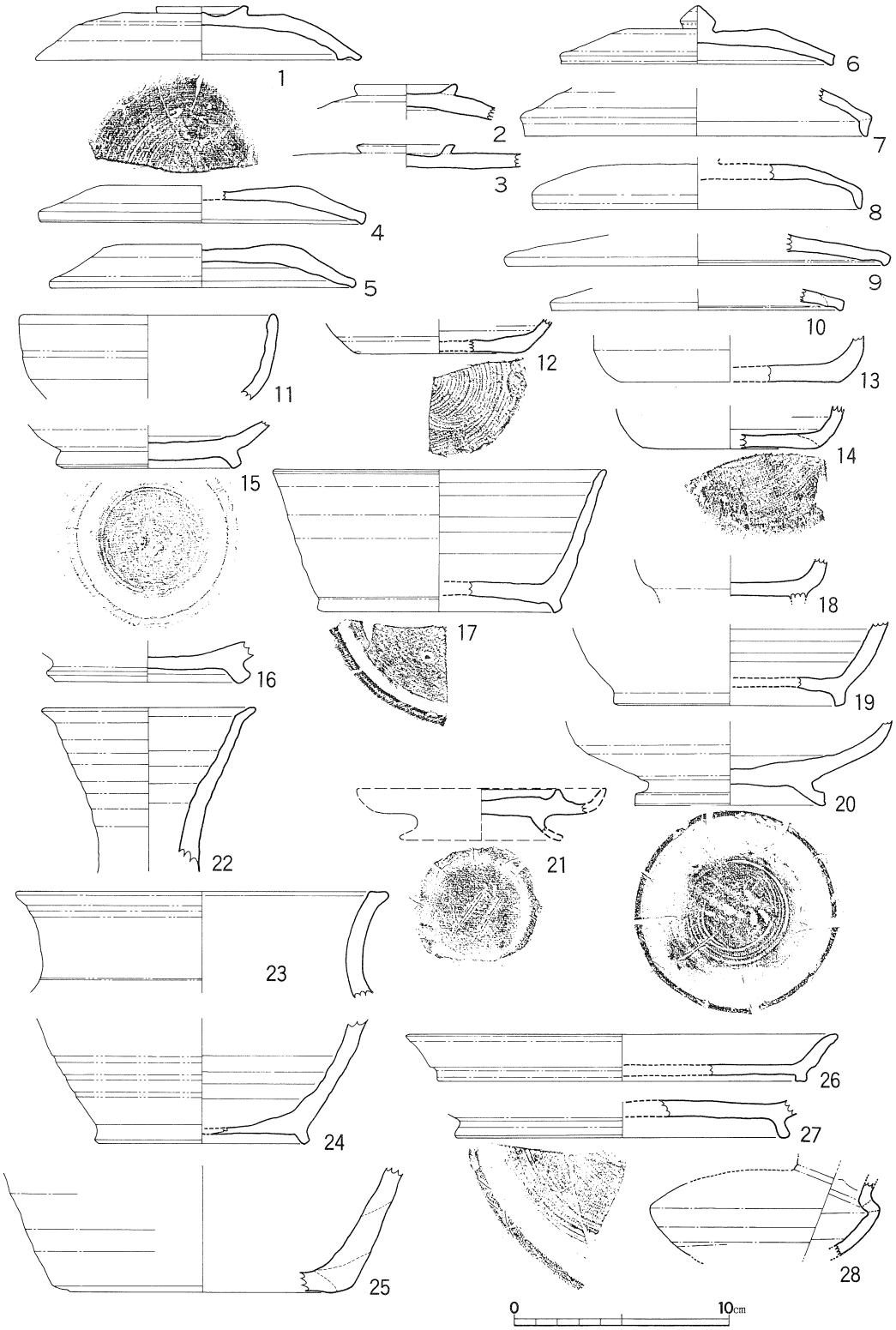
第62図　古曽志平廻田遺跡Ⅱ区SB-08と溝状遺構実測図



第63図　古曽志平廻田遺跡Ⅱ区SB-05～07出土遺物実測図
(1；SB-05，2～4；SB-06，5～10；SB-07)

頸部から口縁にかけて，絞り上げによる器壁の波が顕著で，口縁端部をさらに短く外反させている。24は内外面ともに回転ナデ調整で底面には回転糸切り痕が残る。20も長頸壷の胴部下半と考えられるが，24と違って胴部下半も膨んだものである。高台は外に大きく開き，端面を丁寧に作り出している。高台内面には「｜」のヘラ記号が施されている。23は短頸の壷の口縁で，復元口縁径は17.5cmを測る。頸部外面に文様はなく，端部は上面を平坦にしただけである。25は底面径約14cmで，胴部は内外面回転ナデ調整が施してある。胴部最大径が胴部のかなり上の方にくるタイプと考えられるが，その外に鉢形になる可能性もある。

21は円面硯である。陸部は直径6cm程度で陸部と海部の間には断面三角形の隆帯が廻る。隆帯と陸部との間もごくわずかながら窪んでいる。海部はやや幅広になると思われるが，周縁が欠損しているため正確な形は不明である。脚は短脚で大きく外反すると考えられる。墨の痕跡は残っていないが，陸部は使用によって摩滅したらしくかなり表面が滑らかになっている。また，裏側の底面には，沈線を2本並べた「‖」のヘラ記号が認められる。島根県内における陶硯の出土例は，松江市出雲国庁跡をはじめ，これまでに11遺跡・17例が知られており，中でも仁多町カネツキ兎遺跡出土の低脚附円面硯は当遺跡に近似したものである。また，松江市イガラビ遺跡では陸部と海部の間に隆帯を持つものの脚を持たないものが出土している。28は小形の平瓶で，胴部の復元最大径は約10.8cmである。口縁は胴部の一隅にかなり偏って，しかもかなり斜めに付けられている。頸部の接合部内面は指先で調整するのみで，その他は回転ナデ調整である。



第64図　古曽志平廻田遺跡Ⅱ区遺構に伴わない出土遺物実測図

(暗褐色土; 1～3・8・11・20・22・23・27、黄褐色土; 4～7・9・10・12・21・25・26・28、褐色土; 13・14・16・17・19)

(3) Ⅲ区窯跡群

平廻田遺跡Ⅲ区は，善坊遺跡の丘陵から派生する丘陵の付け根に近い斜面に当たる。この斜面は20～25°のやや急な角度で，南西向きの日当たりの良い部分である。調査区は斜面中腹から谷底にかけてで，調査区の上端は「殿様道」によって削平されていた。この調査区は分布調査，確認調査の段階には，遺跡の範囲外になっていた箇所であるが，60年９月にこの部分に作業用道路が付けられた際に，その断面に窯跡らしい焼土と炭化物層が発見されたため，急遽24ヶ所のトレンチを開けて確認調査を行った。その結果５基（全面調査の結果，最終的には３基と判明）の須恵器窯跡と，それに伴う灰原，段状遺構，遺物包含層が検出されたことを受けて，比較的標高の低い仮１～３号窯跡は現地に保存することで調整を行うこととなり，60年度に仮１～３号窯跡の周辺部分を除く約900㎡の調査を行った。

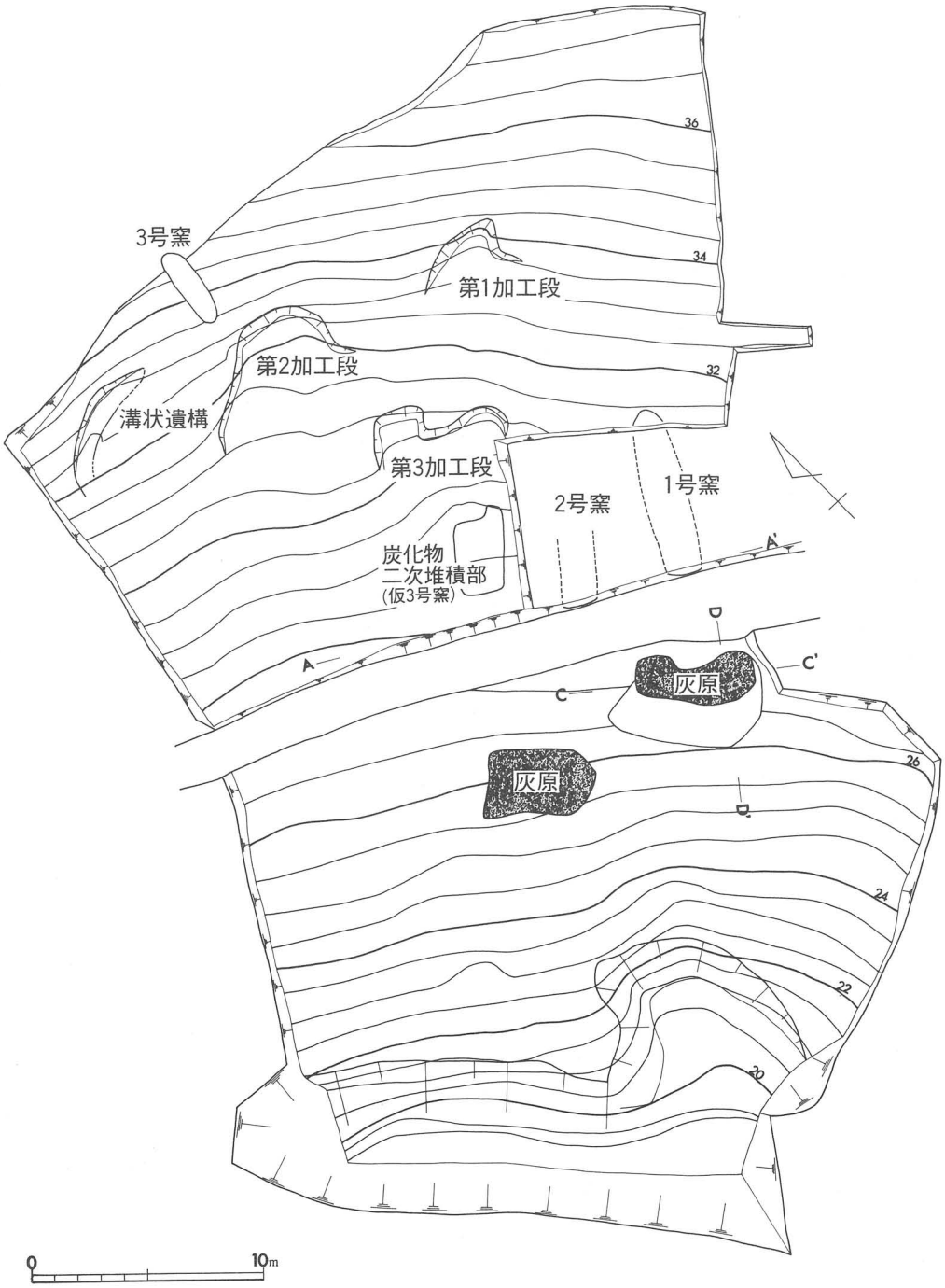
60年度の調査では，丘陵中腹から谷底にかけて発掘を行い，調査区の上方では当初２基の窯跡を推定していたが１基のみ検出され，仮に４号窯跡（後年度に仮３号窯が存在しないことがわかったため最終的には３号窯跡となった。）と呼んだ。この窯跡のすぐ下方斜面には，４ヶ所の段状遺構が検出された。この遺構の性格は不明だが，窯跡群に関連のあるものと考えられる。一方仮１～３号窯跡の下方には，大きく２ヶ所の灰原が検出され，さらにその下方斜面から谷底にかけて遺物が二次的に流入した包含層が検出された。ただ，全般的に流出が著しく，遺構の残存状況は良好とはいえなかった。

仮１～３号窯跡の取り扱いについては，島根県住宅供給公社，島根県土木部建築課と文化課の間で数度にわたり協議を行い，最終的に一部設計変更を行って，仮１，２号窯跡については現状保存をすることとし，仮３号窯跡は発掘調査を行って記録保存に留めることになった。その結果，62年度に仮３号窯跡周辺約50㎡の調査を行い，確認調査で検出された焼土や炭化物は２次的に堆積したものであったことが明らかになり，この仮３号窯跡は少なくとも現存はしないことがわかった。ただこれらの焼土等の堆積物は，窯跡に関連するものと考えられ，以前にはこの上方に窯跡が存在していたものと推定される。

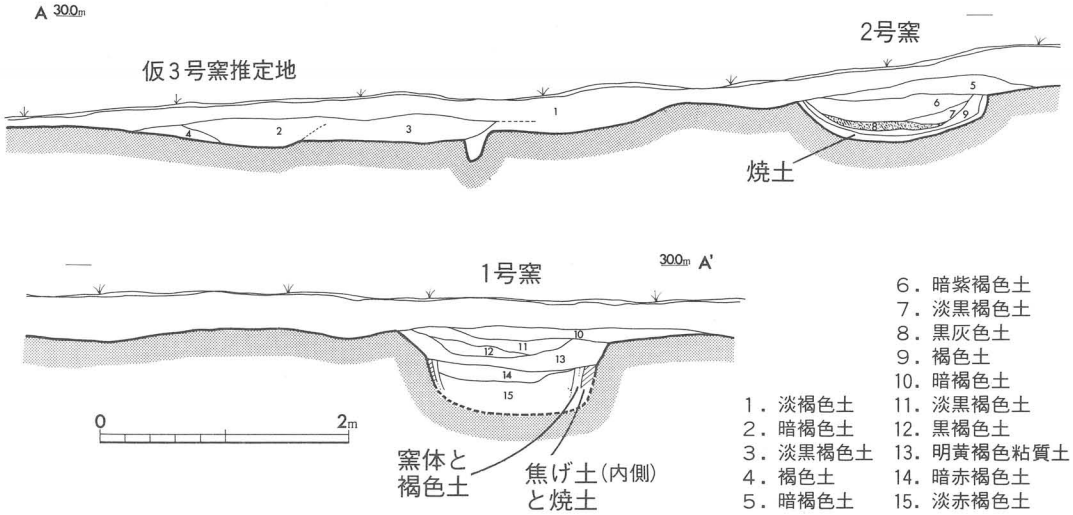
平廻田１号窯跡

調査区の東端，標高28mから31mにかけての斜面に存在する窯跡である。現地に保存されることになったため，発掘調査は行っていないが，60年の調査で煙道部分が確認され，また作業道の取りつけにより焚口部分が露出していたため，窯の規模についてはおおよそ推定が可能である。それによると，全長約7.6m，幅（焚口部分）1.3mの細長い形であったと考えられる。

焚き口部分は，作業道により切り取られ，道の断面及び道路面に遺構が露出したため，その部分



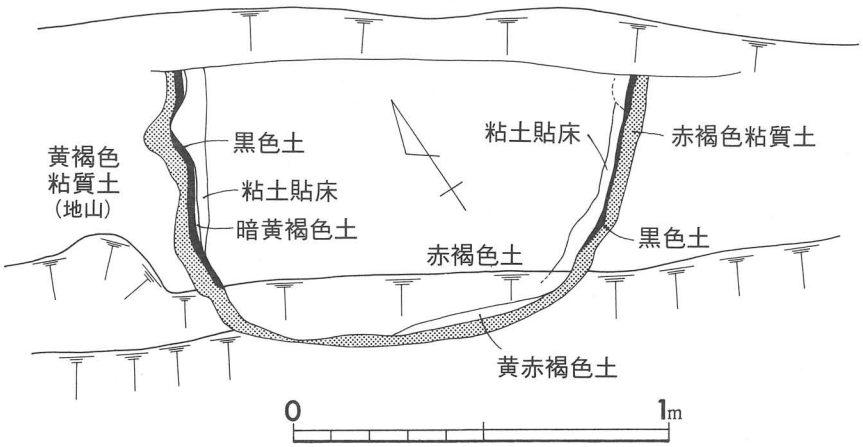
第65図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区地形測量図



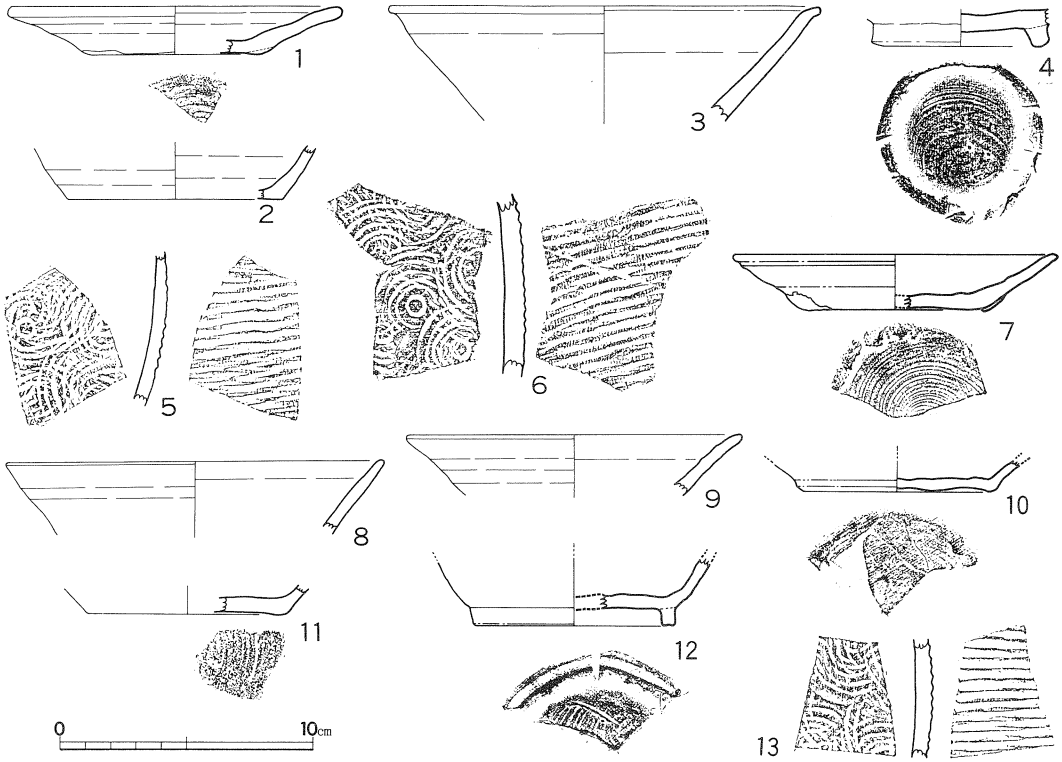
第66図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区１・２号窯跡焚口部横断土層図

を清掃し，記録を取る調査を行った。焚き口部分は長さ約75cmほど切り取られ，路面に窯の最下部が残存している状況であった（第66・67図）。窯体部分を観察すると，表面には３～８cmの厚さで，灰色に固まった粘土層が見られる。窯の表面に粘土を貼って窯体を整形したものと考えられるが，一般の須恵器窯跡に見られるような固く焼き締まったものではなく，粘土がブロック状に固まってぼろぼろした状況である。この粘土層の外側には薄い黒色の焦土層があり，さらにその外側は地山が赤変した焼土層が５cm内外の厚さでみられる。

内部には，焼土，窯体片，炭化物などが多く詰まっており，上方の焼成室，燃焼室から掻き出してきたものとも考えられる。その上方には炭化物層が見られ，遺物が包含されている。窯体は断面



第67図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区１号窯跡焚口窯体平面図



第68図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区1・2号窯跡出土遺物実測図
(1～6；1号窯跡，7～13；2号窯跡)

観察によると高さ50cm程しか残存しておらず，かなり土砂が流出または削平されているものと推定される。

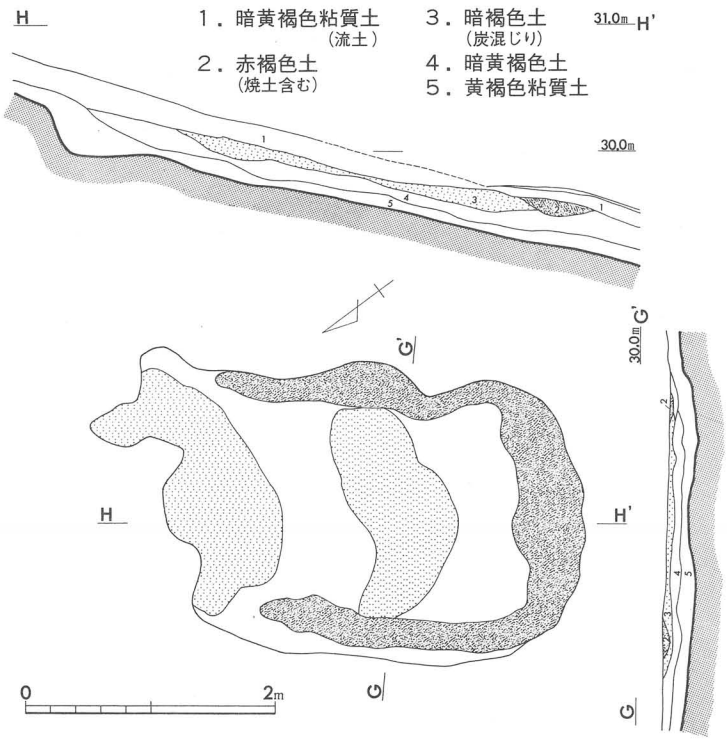
遺物は，坏，皿，壷の底部，甕の胴部が出土している（第68図)。皿，坏ともに口縁に向かって直線状に開く形態で，底部には高台の付くものと付かないものがあり，回転糸切り痕が残る。甕の胴部には，内面は同心円，外面には深い平行タタキが施されている。いずれも概して焼きがあまく，窯体の状況も考え合わせると，窯の温度はそう高温には上がっていなかったものと推定される。

平廻田２号窯跡

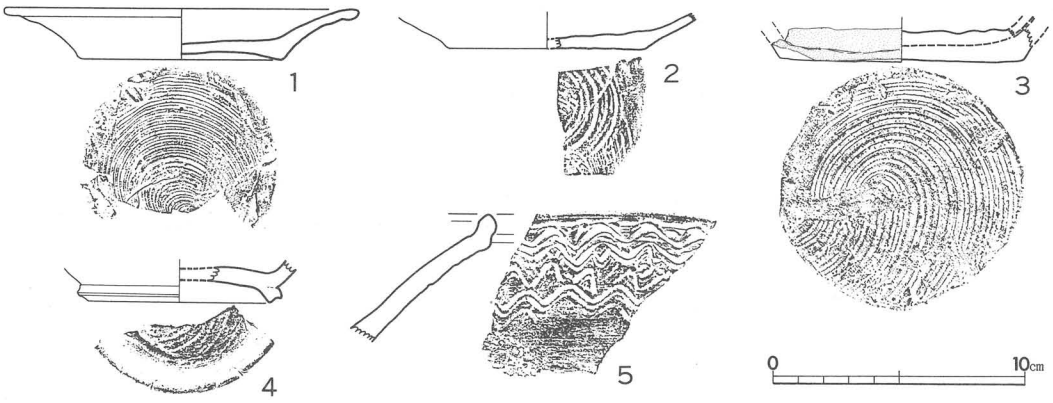
１号窯跡の西3.5mに隣接して存在する窯跡で，現地保存となっているため未調査である。作業用道路の断面に焚口部分がわずかに露出しているのみで，詳細は不明だが，１号窯よりは小型の窯跡である。断面観察によれば，焚き口部分の幅は1.5mで，１号窯とは異なって窯の表面に粘土層は見られず，周囲の地山が赤変しているのみである。内部には炭化物，灰が堆積した層がみられ，遺物も出土している。遺物は，皿，坏，甕等が見られ，基本的に１号窯跡出土のものと同様の特徴を備えている。

焼土，炭化物二次堆積部

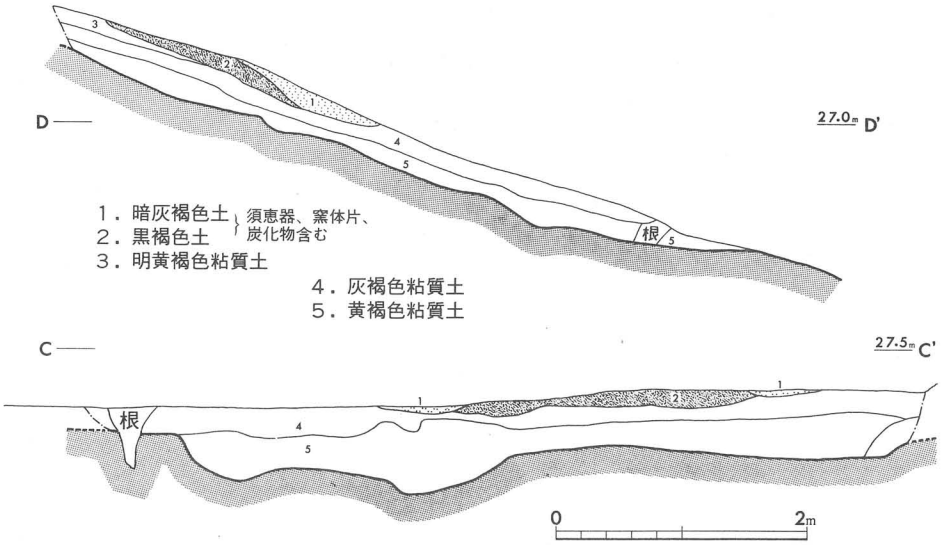
２号窯跡の2.5m西，確認調査により焼土，炭化物が検出されて仮３号窯跡とされた部分である。当初現地保存で調整を図ったが，設計変更によっても保存は難しく，止むなく62年度に発掘調査を行った。調査によって長さ約３m，幅2.2mのU形に焼土を多く含む赤褐色土が広がり，その内側に多量の炭化物が堆積している状況が確認された。しかし焼土は，その場所で焼けて赤変した状況ではなく，地山まで掘削して土層の確認を行った結果，わずかな地山の窪み（人工的なものかどうかは不明）に二次的に堆積したものであることがわかった。ただ，これらの焼土や炭化物の量が非常に多く，また遺物（窯変，窯着したものも含む。）もかなり出土していることから，上方にもう１基窯跡が存在していたものが削平され，その一部が堆積した可能性が強いと考えられる。



第69図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区炭化物二次堆積部実測図



第70図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区炭化物二次堆積地周辺出土遺物実測図



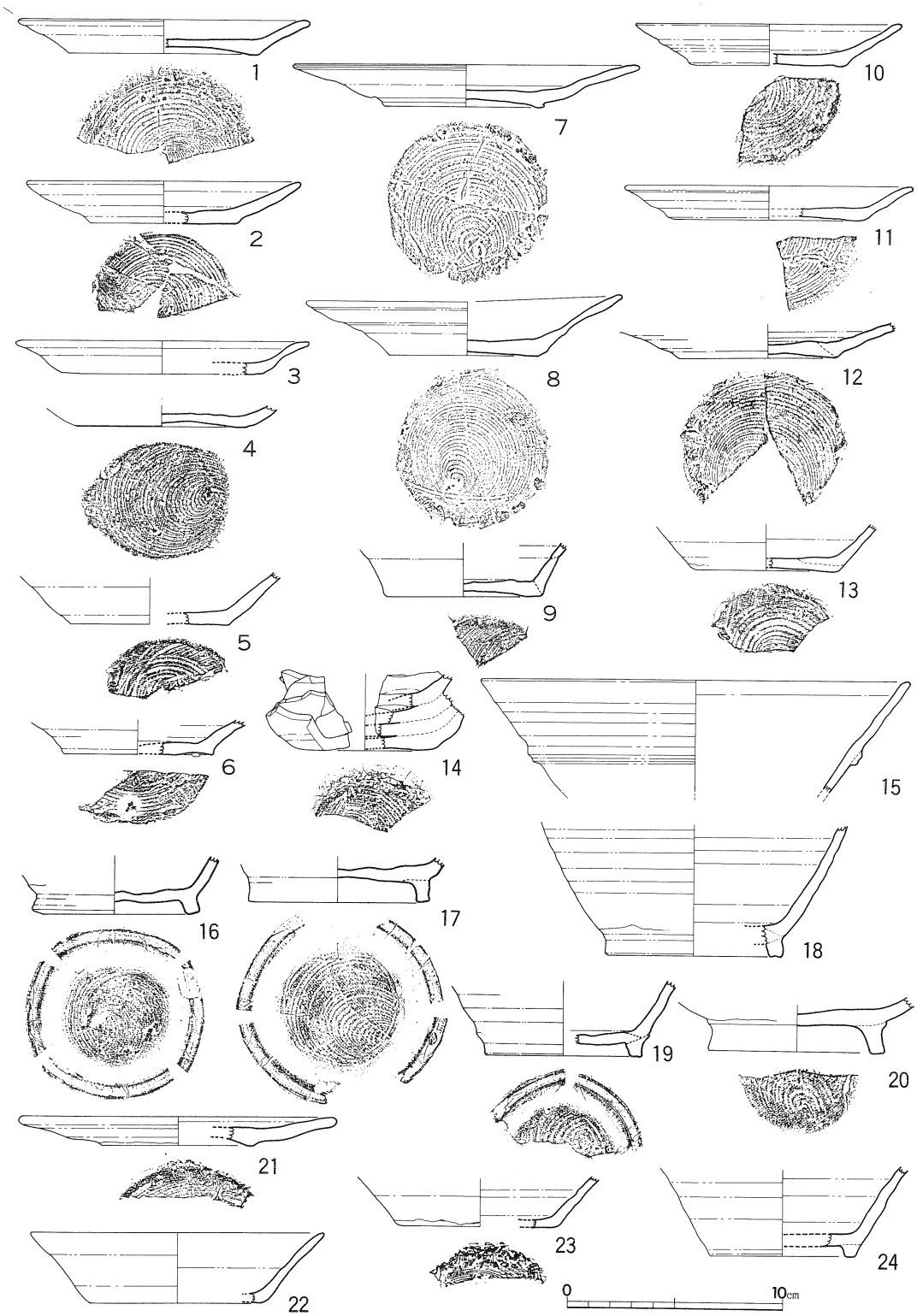
第71図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区1・2号窯跡下方灰原土層断面図
（断面の位置は第65図参照）

遺物は皿（もしくは坏），甕の口縁部が出土している（第70図）。皿（坏）はいずれも底部に回転糸切り痕を残し，高台が付くものもある。3は重ね焼きしたものが窯着した資料である。甕の口縁部は，口縁端をわずかにつまみあげ，外面に太くて粗雑な波状文を施したものである。また，旧石器時代の黒曜石製ナイフ形石器が1点出土しており注目される（第97図2）。

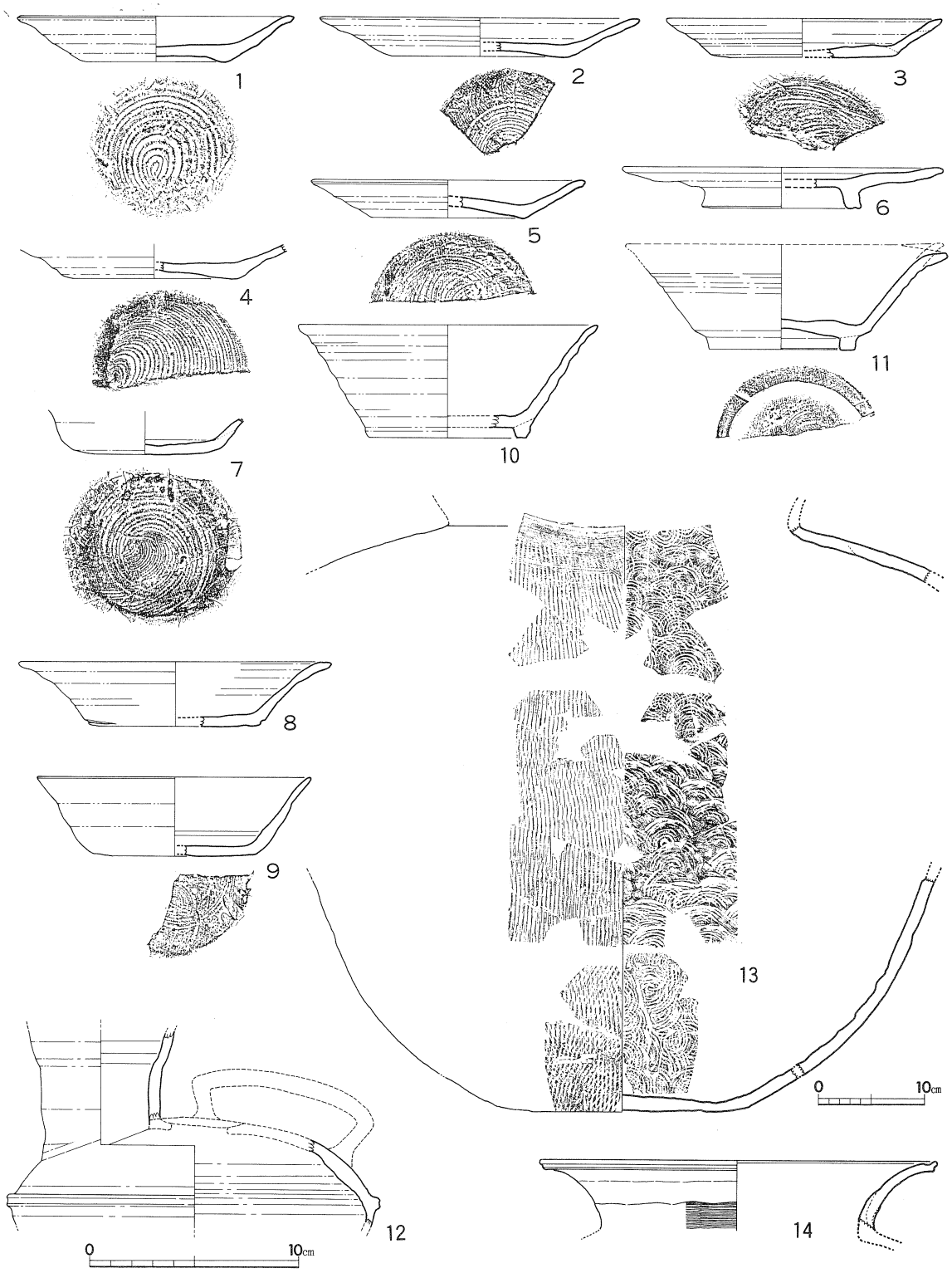
1，2号窯跡下方灰原　1号窯跡の下方3m，そして2号窯跡及び焼土炭化物二次堆積部の下方約5mの斜面に，須恵器や窯体片，炭化物等が堆積した灰原が検出された（第65図）。この2つの灰原は，この調査区全体が上面がかなり流出していることや，双方から出土した遺物が接合した例があることなどから考えて，元は一体のものであった可能性が強いが，概して上方の窯跡と位置的な関連性があると考えられるため，一応別個に記載をする。

東側の灰原は1号窯跡の下方に広がるが，一部2号窯跡下方にも広がりを見せている。この灰原の大部分は1号窯跡で焼成したものを廃棄した結果と考えられるが，西側には2号窯跡のものも含まれていると考えられる。

1号窯跡下方の灰原は，幅約5m，長さ約2mの密度の濃い部分があり，その下方に2mほどのやや密度の薄い部分が広がっている。いずれも厚さは10cm内外と薄く，かなり流出したことが窺えるが，下方の谷底にもさほど多くの遺物は見られないことから考えると，操業期間が短かったために一般の灰原にみられる程度まで厚い堆積はなかった可能性もある。

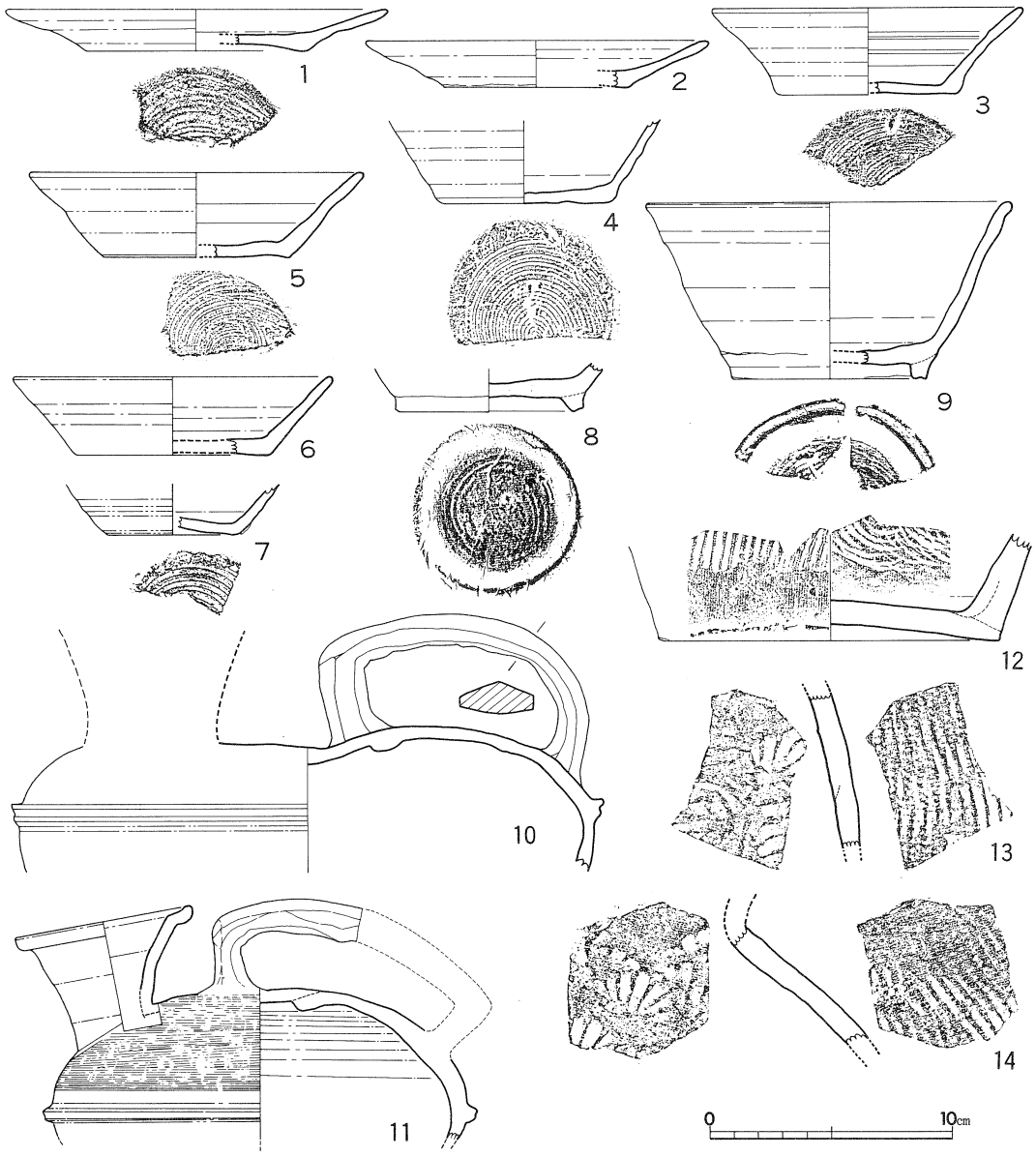


第72図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区1・2号窯跡下方灰原出土遺物実測図(1)(1～20; 東南半、21～24; 西北半)



第73図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区1・2号窯跡下方灰原出土遺物実測図(2)
(西北半.13のみ1/6)

遺物は，皿，坏，甕，平瓶等が出土している（第72・73図）。皿は概して底部に比べて口縁部の径が大きく，器面が浅いのが特徴で，いずれも底部は回転糸切り痕が残る。一部高台が付くものもある。坏は底部からラッパ状に開きながら直線状に立ち上がり，口縁付近でわずかに外反するのが特徴で，体部にはロクロ成形痕である凹凸がよく残る。底部には回転糸切り痕が残り，高台が付くものとそうでないものがある。第72図15のように，体部に貼り付け突帯がめぐるやや大形で特殊な

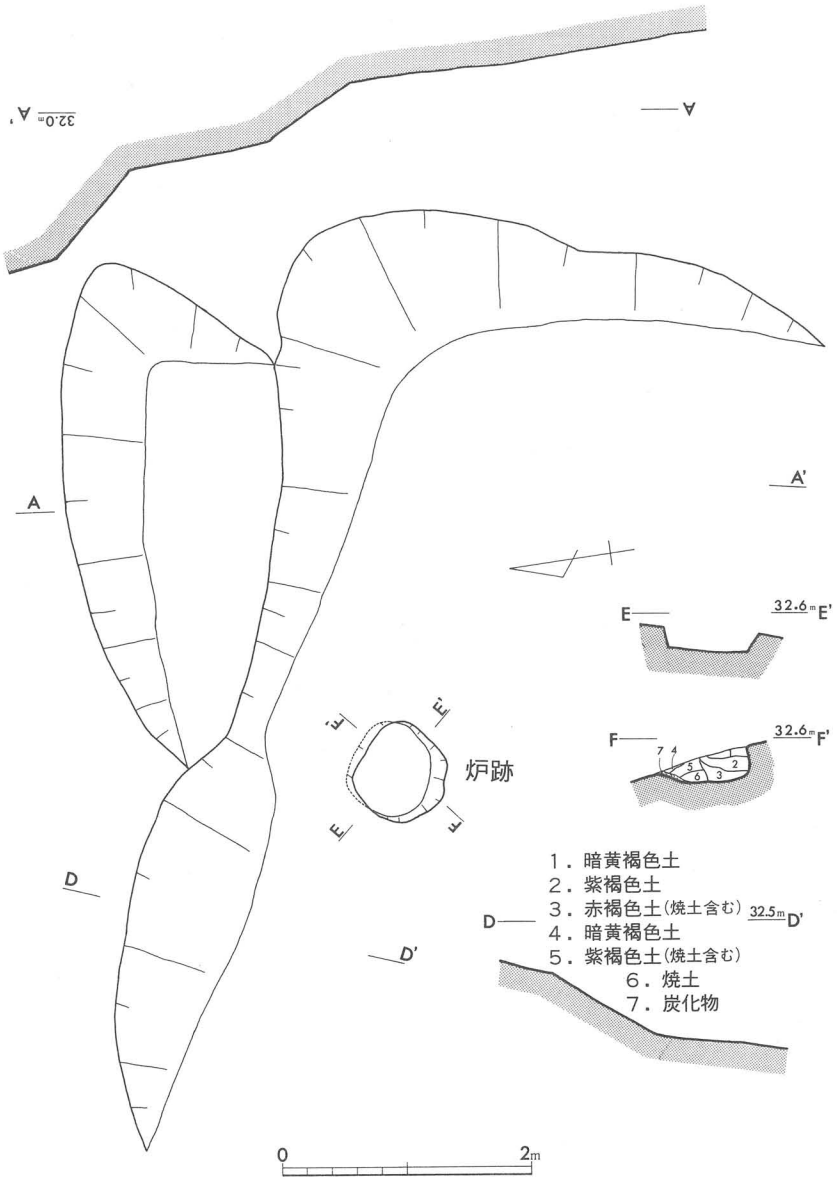


第74図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区炭化物二次堆積部下方灰原出土遺物実測図

坏もみられる。第72図14は窯着した個体である。

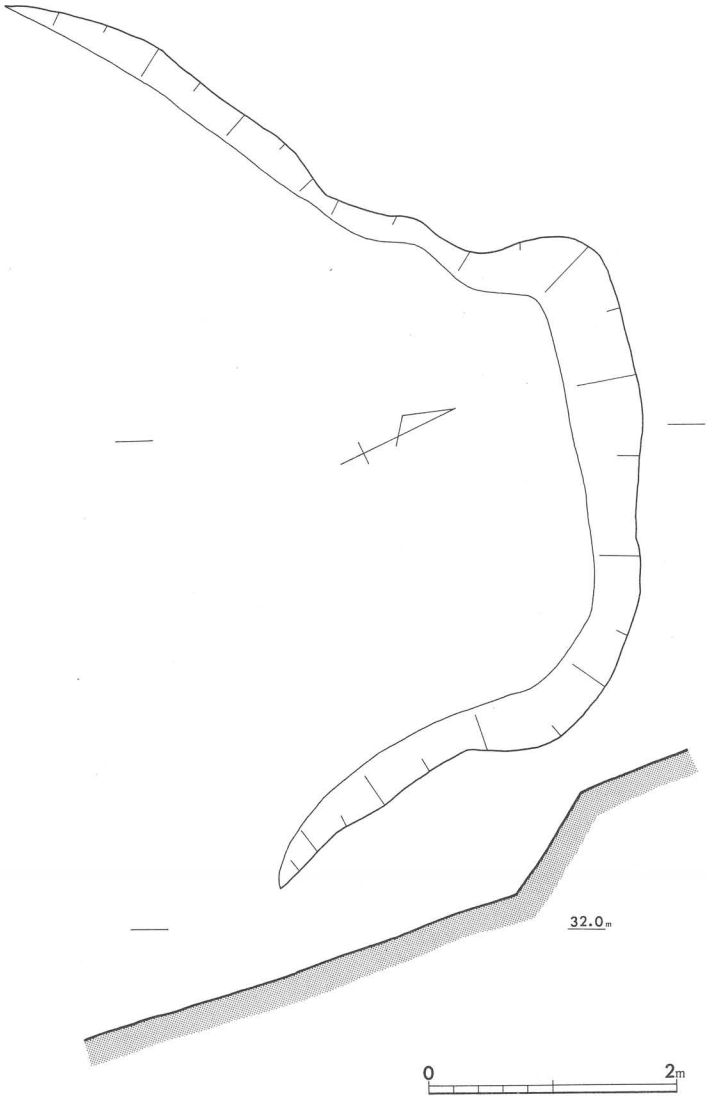
甕は胴部内面に同心円，外面に平行タタキを施すもので，口縁は外反して立ち上がる短い頸部に口縁端をわずかに上方につまみあげたものが出土している。平瓶は胴部最大径部分に突帯を貼り付けたもので，上部に把手が取りつくタイプと考えられる。

一方西側の2号窯跡，炭化物二次堆積部下方の灰原は4.7m×2.8mの範囲で，1，2号窯跡下方のそれに比し，やや密度が低い。この灰原は，2号窯跡と現存しない二次堆積を生じさせた窯で焼成されたものが廃棄された場所と考えられる。



第75図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区第1加工段実測図

遺物は，皿，坏，壷，甕，平瓶が出土している（第74図）。皿，坏は基本的に東側の1，2号窯下方灰原出土のものと同様の特徴を持つ。壷（12）は底部のみで全体の特徴は不明だが，広い底面を持ち，内面同心円，外面平行のタタキを施したものである。甕は，一般的なタタキのもの（図示し



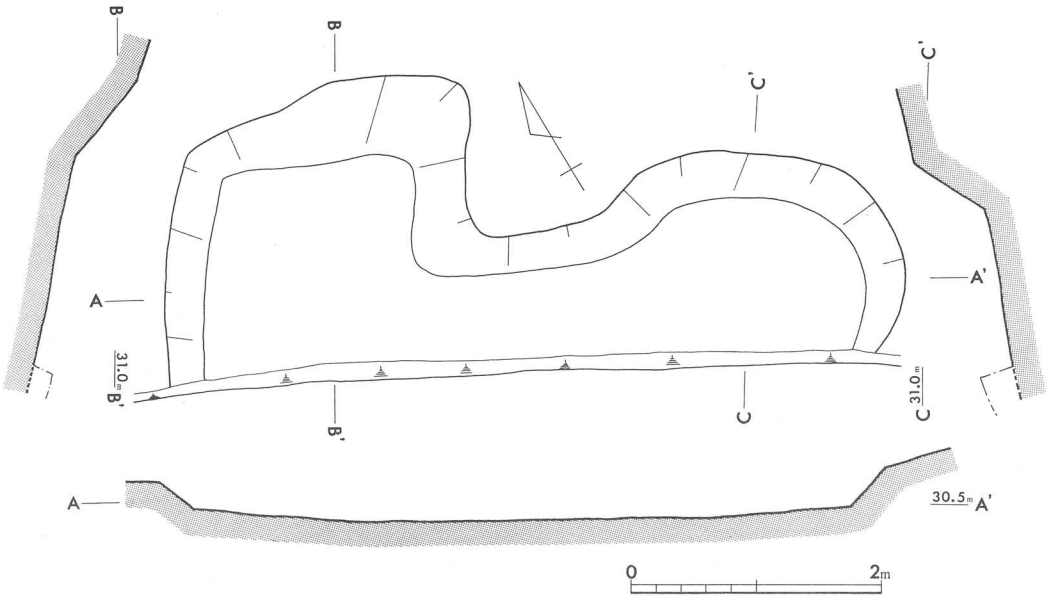
第76図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区第2加工段実測図

ていない）のほかに，内面に扇形に放射状となる特殊なタタキが見られるものが出土している。平瓶はロクロで成形し，最終的に円盤を充塡して形づくった胴部のかたよった位置に口縁を取りつけ，さらにヘラで削って成形した把手を貼り付けたものである。胴部最大径部分には貼り付け突帯をめぐらし，胴部上半にはていねいにカキメを施している。また，安山岩製のナイフ形石器も出土している。（第97図１）

第１加工段（第75図）

３号窯跡の東約10m，２号窯跡の上方約10mの斜面で検出された段状遺構である。斜面の上方を削り込んで２段の平坦面を作り出したものである。上段は平坦部の幅３mを測り，奥行き１mほどで下段により切られている。下段は７m×３mのＬ字形の切削面が残存している。平坦面はやや傾斜しており，下方に向かって明瞭な境界線をもたず自然地形と同化している。平坦面の中央壁よりには，一辺70cmの隅丸正方形の土壙が検出された。この土壙は，底の一部が焼けて赤変しており，火を使った遺構と考えられる。

第２加工段（第76図）　第１加工段の約５m西，３号窯跡の直下で検出された段状遺構である。段の上幅は約２mで，下方に向かってハの字状に開いている。平坦面は緩やかに傾斜し，下方で自

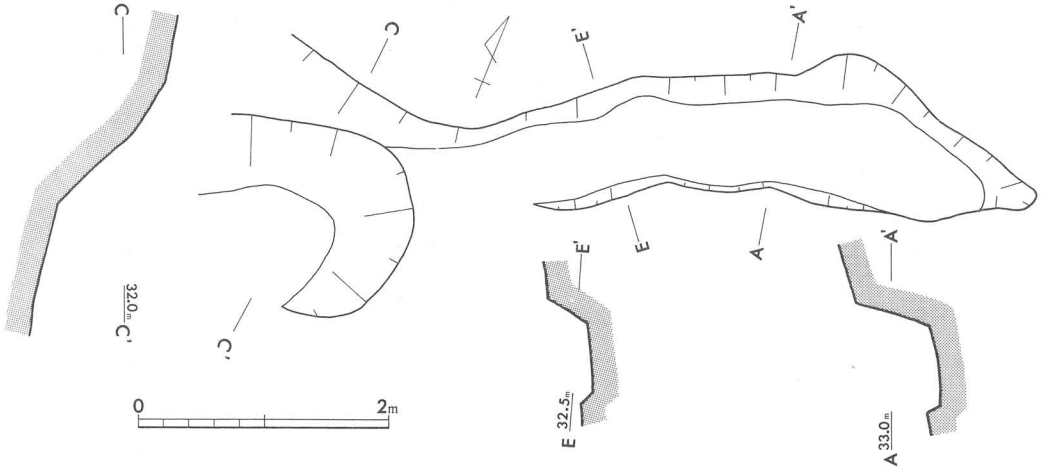


第77図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区第3加工段実測図

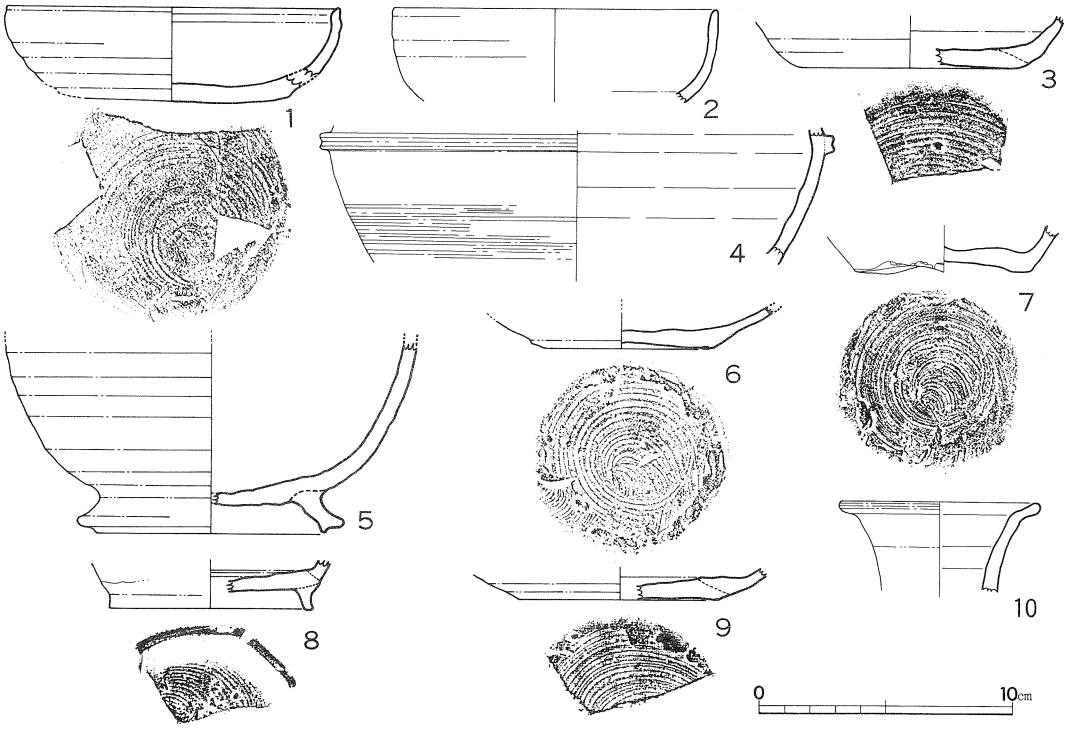
然地形に同化している。平坦面には何等遺構は検出されなかった。

第３加工段（第77図）　焼土，炭化物二次堆積部の直上に検出された段状遺構である。幅約2.5ｍで，段の上方は２つに割れている。平坦面は緩やかに傾斜している。

溝状遺構（第78図）　３号窯跡の西約３ｍの斜面で検出された遺構である。溝は上幅が約１ｍ，深さが深い部分で60cm，浅い部分で10cmを測り，長さは約５ｍまで検出された。溝は西側で小形の



第78図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区溝状遺構実測図



第79図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区遺構に伴わない出土遺物実測図
(1～4；1号窯跡上方，5；1号窯跡東側，7～10；谷底黒色土)

段により切られ，その段もすぐに自然地形と同化して消えている。

これらの段状遺構や溝状遺構の性格は，遺構に明確に伴なう遺物はなく，また遺構の残存状況が悪くピット等が検出されなかったため，不明といわざるを得ない。ただ，窯跡に伴う作業場等の建物があったことは間違いなく，これらがそうした建物の痕跡である可能性が高いと推定される。

遺構に伴わない遺物（第78図）　遺構に伴わない遺物は，主に窯跡群の周辺と谷底から出土している。谷底から出土したものは大部分が窯跡から出土するものと同様の須恵器であるが，窯跡群の周辺からは，窯と同時期のものに混じって奈良時代前後の遺物も出土している。窯跡群が成立する以前に，Ⅰ区，Ⅱ区で見られるような奈良時代の集落があった可能性がある。

1～3・5は奈良時代前後の須恵器である。坏は高台がなく，底部には回転糸切り痕が残る。口縁部は直立し，端部内面に平坦面を有するもの（1）と，特に手を加えていないもの（2）の二種類がある。5は壷の胴部下半で，やや高めの高台を持ち，外面はヘラケズリである。窯と同時期の遺物には，坏，皿とともに平瓶が出土している（4，10)。

3 号窯跡

調査区の上方，標高約34m～36mの斜面に１，２号窯跡と離れて単独の形で検出された窯跡である。検出された状況での窯の規模は，長さ3.62m，床面の幅は焚口付近で0.88m，燃焼部で１m，焼成部で最大1.19mを測る。平面形は焼成部付近がやや広がる細長い形だが，焚口方向から見て右側の焼成部付近が広がっているために左右非対称になっており，あたかも右足の靴底のような形を呈している。

窯の構造　窯の構造の大略は，焚口部分から燃焼部にかけてまず下に向かって約8°の角度で傾斜する。焚き口からこの最下部まで1.1mを測る。このもっとも低い部分に炭化物や灰が堆積しており，この部分を中心に燃料が燃やされたものと考えられる。

この最下部から，床面は次第に傾斜を急にしながら上がっていき，焼成部にいたる。焼成部の角度は約29°を測り，この部分で４層に重なって須恵器が出土している。焼成部から煙道に向かってはさらに角度をあげ，最奥部付近では約45°の傾斜となる。床面が最奥部に達すると，折り返すように天井が焚口方向に向かっており，煙出しの煙突は奥壁からやや焚口方向に寄って設置されたようである。

横断を見ると，床面から壁面にかけては円弧を描いて天井に達するが，燃焼部付近では床面から高さ25cm程のところでさらに壁が広がっている。この変曲点の高さが，須恵器焼成３面目の床再生レベルとほぼ同じことから，床面再生の際に窯の幅を広げた可能性もある。窯体の最大幅は，燃焼部で1.28m，焼成部で1.34mを測る。天井の高さは落盤しているため不明だが，壁面のカーブから見て，70～80cm程度の低いものだったと推定される。

窯跡の内面には，粘土等を貼り付けた痕跡は見られず，ただ２～４cmの厚さで床面と壁が焼土化し赤変しているのみである。また窯体内に天井を形成しうるような窯壁は出土していない事から考えて，窯はトンネル状にくり抜いた地下式であった可能性が強い。

遺物出土状況　須恵器の焼成面は，少なくとも３回再生されており，当初の１面と合わせて，４つの面で須恵器が出土している。焼成面の再生は，粘土を焼成した窯壁様の小粒を盛ることによりなされており，３面目の再生では厚さ20cmに及ぶ。そして，それぞれの焼成面に対応する形で，４枚の炭化物，灰層が検出されている。以下，それぞれの焼成面ごとに須恵器の出土状況について記述したい。

第１面（最下層　第81図右）　最も下の焼成面，すなわち窯そのものの床面直上に置かれた須恵器群である。炭化物層はＤ層が対応する（80図）。須恵器は焚口の先端から1.65～3.15mの間の焼成部から出土しており，規則的に並べられた状況が窺えることから基本的に焼成時の配列と考えられる。配列状況を見ると，最も煙道に近いものを頂点として⌒状に並べ下りていったと想定される。

置かれた須恵器は大部分が坏で，一部伏せて重ねられた状況も見られた。床面に密着した個体は，いわゆる焼台と考えられ，中には底部を台として水平に保つために体部から口縁部にかけてを斜めにカットして傾斜面に据えたものも見られた。また焼台として土師器甕を利用したものもある。この須恵器の出土状況は，第１面の最終利用時に，比較的焼成の良好な個体を搬出した後の状況と考えられ，下方の個体の配列が乱れているのはこの搬出作業によるものであろう。

第２面（第80図）　第１面にｃ層を盛って形成された面で，炭化物，灰層はＣ層が対応する。炭化物，灰層は比較的厚くまた広く堆積しているが，第２面形成層であるｃ層が堆積している範囲は狭い。したがって遺物も窯の中央部に数点出土したにすぎない。

第３面（第81図左）　ｃ層，Ｃ層上に乗せられた窯壁様小粒層（ｂ層）の上面で，窯中央部付近を中心に多くの土器群が規則正しく並べられた状態で検出された。並べ方は第１面と同様，中央部の須恵器から両側壁に向かってわずかずつ下にずらしながら〜状に並べている。須恵器は基本的に伏せて重ねられているが，一部上向きに置かれているものもある。最下部の床面に密着したものは，焼台と考えられ，第１面同様水平にするためにカットしている個体が多い。

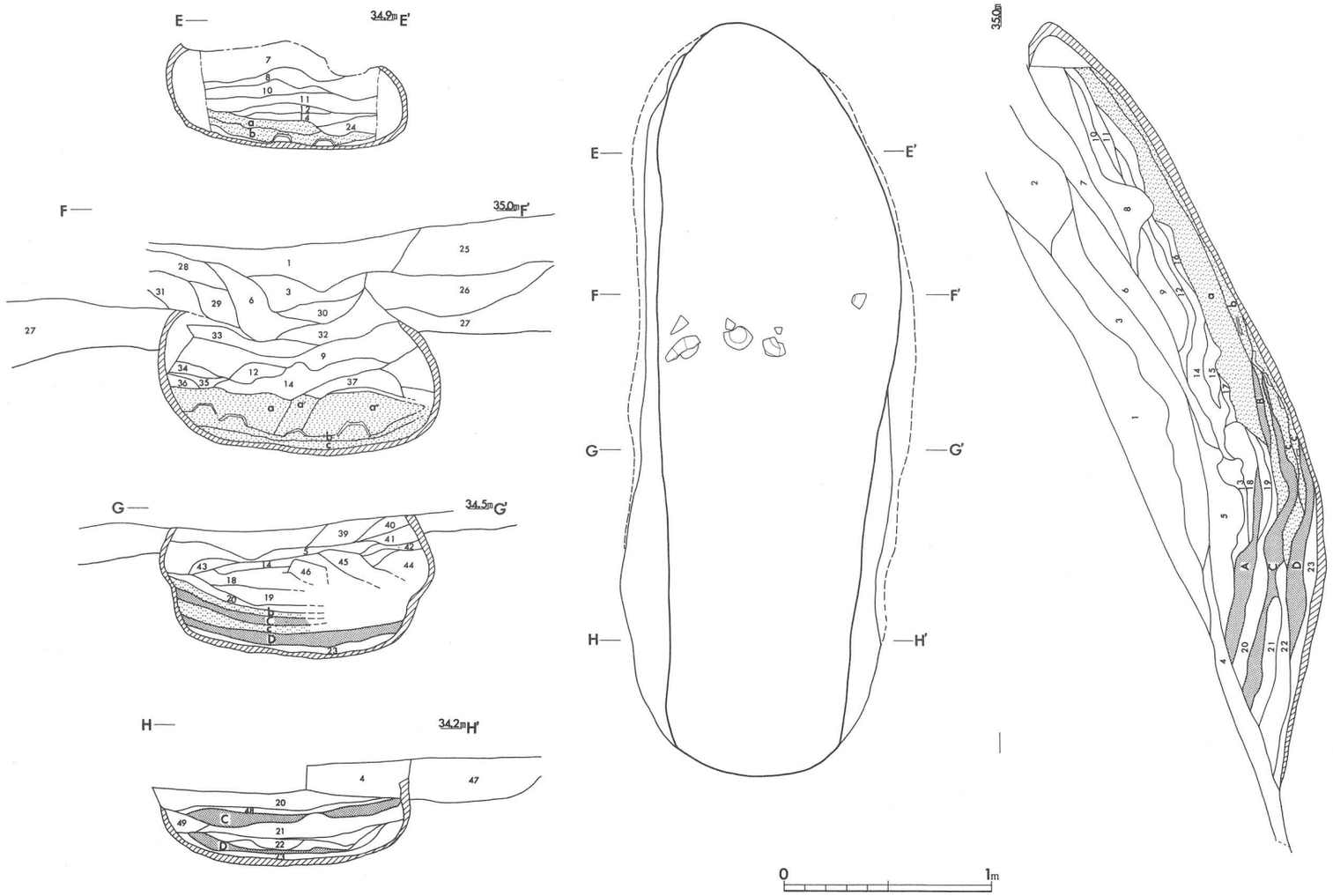
第４面（最上層　第82図）　窯内崩落土層の直下から検出された須恵器焼成面である。形成層（ａ層）は下層のｂ，ｃ，ｄ層に比して厚く，焼成層はＡ層が対応する。窯中央部付近を中心に須恵器群が検出された。器種としては第１，２，３面に比べて皿の割合が高い。

遺物　３号窯跡で焼成された須恵器は，基本的に坏と皿のみである。坏と皿は共に高台の付くもの（Ｂ類と呼ぶ。）と付かないもの（Ａ類と呼ぶ。）とに大別できる。これらの須恵器類の共通の特徴として，焼きが悪いことがあげられる。色調も須恵器特有の青灰色のものはなく，薄い灰色や褐色のものが多い。中には黒斑様の黒変部が見られるものもある。これは，窯に焼きの悪い個体を残した結果とも考えられるが，窯壁もさほど強い火力を受けた形跡がないことから，もともとあまり高温では焼成していなかったものと推定される。以下焼成面ごとに詳説したい。

第１面出土遺物（第83，84，85図）　皿は，高台のないＡ類のみが少量出土している。いずれも口径が15㎝内外で，口径と底径の比率はおよそ２：１である。底部には回転糸切り痕が残る。

坏Ａ類（第83図６〜第84図18）は，形態が回転糸切り痕の残る平坦な底部から，外方にほぼ直線的に立ち上がり，口縁端はそのまま丸くおさめる。体部の立ち上がりは概して鈍角で，口縁径と底部径の比率は1.7：１内外のものが多いが，中には口縁径の大きい個体（第83図14）も見られる。口径は12〜13㎝，深さは３㎝前後のものが大部分であるが，やや大型の個体も存在する（第84図１・２）。体部には，回転ナデによる凹凸が明瞭に見られるものもある。

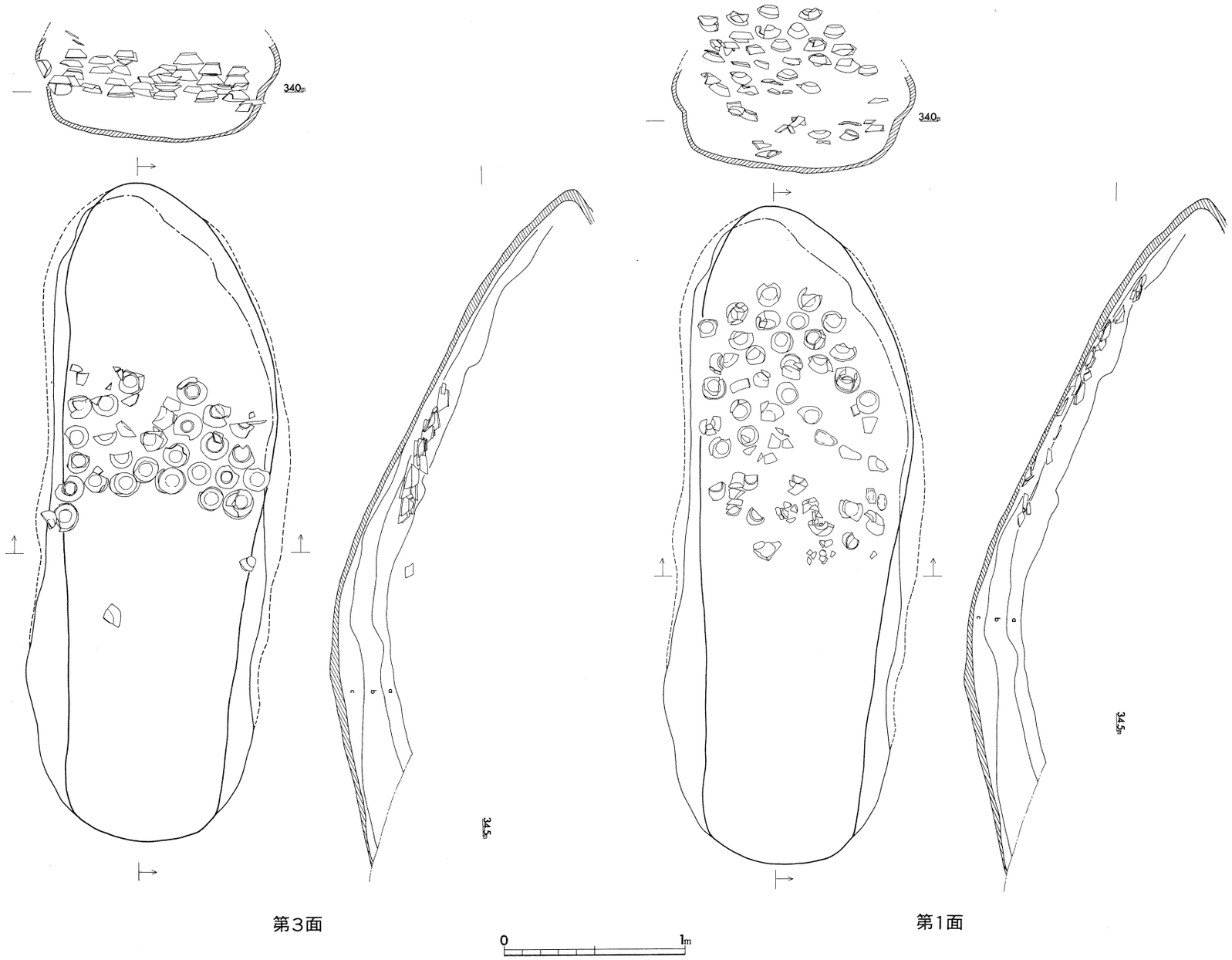
坏Ｂ類（第85図１〜８）は，口径が約15㎝，深さが４〜5.5㎝とＡ類に比べて大形である。また１，４は口径と底径の比率がおよそ２：１でＡ類に比べて体部が鋭角に立ち上がる。高台は，底部と



A. 黒褐色土(炭化物多量) 第4面須恵器焼成炭化物層　a. 暗黄灰色土 第4面置き土
B. 黒色土(炭化物多量) 第3面須恵器焼成炭化物層　b. 黄灰色土 第3面置き土
C. 黒色土(炭化物多量) 第2面須恵器焼成炭化物層　c. 黄灰色土 第2面置き土
D. 黒色土(炭化物多量) 第1面須恵器焼成炭化物層　d. 暗灰色土 第1面置き土

1. 淡黄褐色土
2. 黄褐色土
3. 黄褐色粘質土
4. 淡黒褐色土
5. 暗褐色土
6. 黄褐色粘質土
7. 淡褐色粘質土
8. 黄白色粘質土
9. 暗黄褐色粘質土
10. 黄褐色粘質土
11. 暗赤色土(焼土多く含む)
12. 淡黄褐色粘質土
13. 黄褐色粘質土
14. 暗褐色粘質土
15. 黄白色粘質土
16. 暗灰色粘質土(焼土窯体片多い)
17. 黄白色粘質土
18. 暗赤色土(焼土の二次堆積層)
19. 暗黄灰色土
20. 暗灰褐色粘質土(焼土少量)
21. 暗赤色土(焼土含む)
22. 黄白色粘質土
23. 灰色土(窯体片多い)
24. 赤色土(焼土多い)
25. 褐色土
26. 明褐色土
27. 明黄褐色土
28. 黄褐色土
29. 暗褐色土
30. 淡黒褐色土
31. 褐色土
32. 暗褐色土
33. 暗褐色土
34. 暗赤灰色土(焼土含む)
35. 暗黄色土
36. 暗赤灰色土(焼土含む)
37. 黄白色粘質土
38. 暗赤色土(焼土)
39. 暗褐色土
40. 暗黄褐色土
41. 暗赤褐色土(焼土、炭化物)
42. 灰褐色土
43. 黄白色粘質土
44. 暗黄褐色土
45. 明黄白色土
46. 明黄白色土
47. 淡黄褐色粘質土
48. 橙色土
(須恵質化していない窯体)
49. 暗灰褐色土

第80図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区3号窯跡土層断面図および第2面遺物出土状況



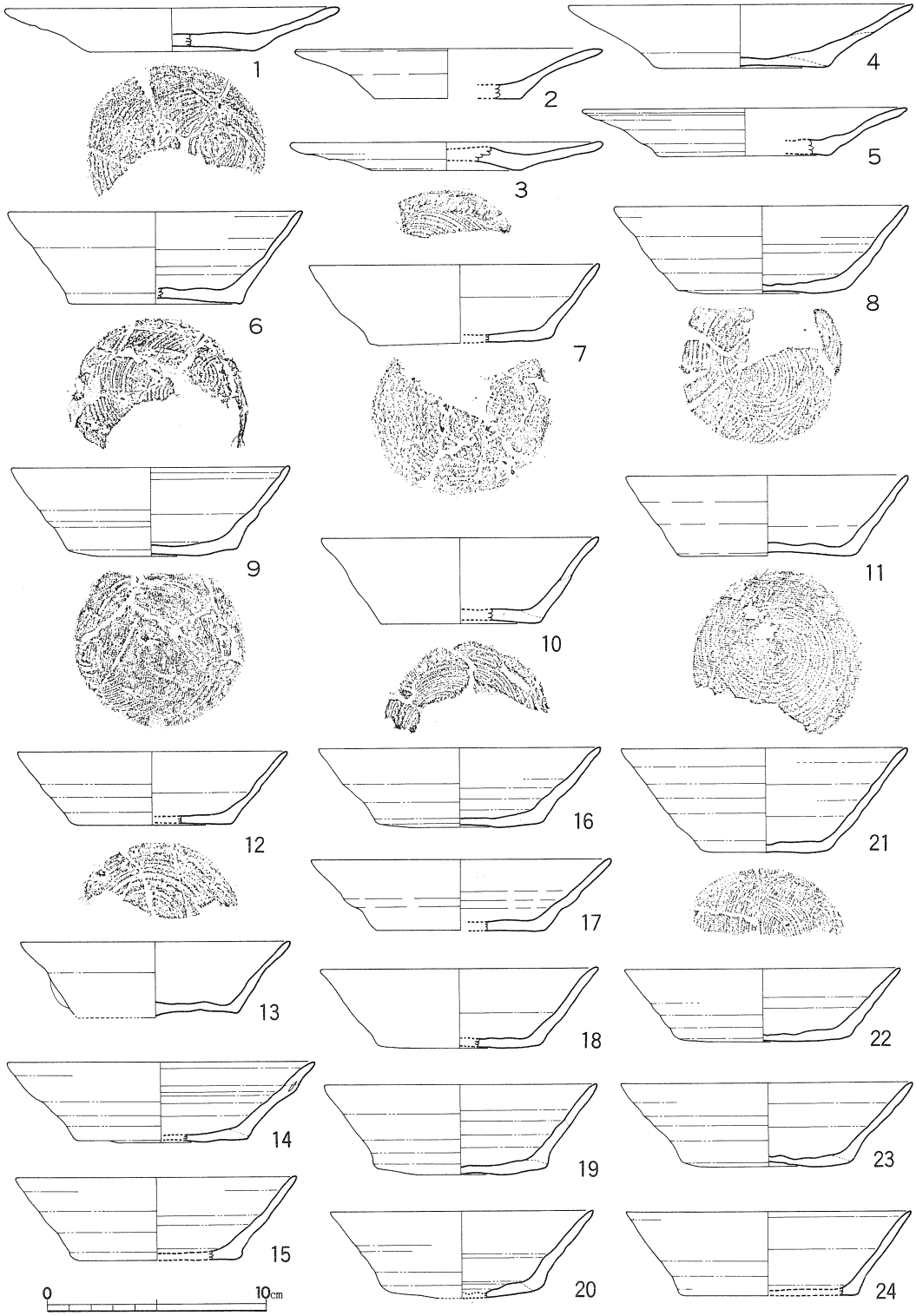
第81図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区3号窯跡第1・3面遺物出土状況

第82図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区3号窯跡第4面遺物出土状況

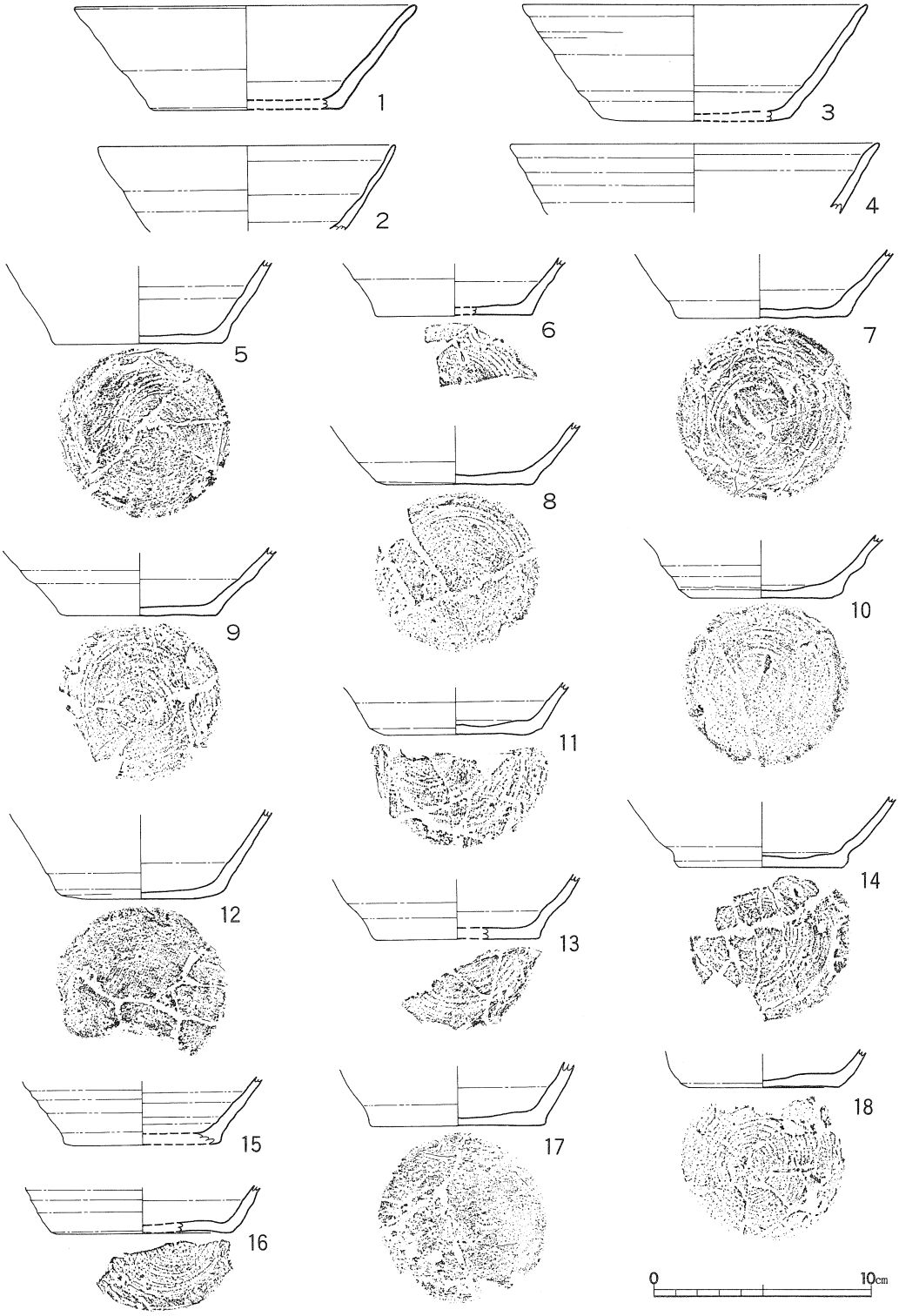
体部の境（屈曲部）に貼り付けられており，断面は台形状を呈する。高台底部はまったく平坦なものとわずかに凹線状のくぼみを入れたものがみられる。第84図9は，土師器甕で，焼き台として使用されたものである。

第2面出土遺物（第86図）　1・2・4～6・8・9が坏A類である。特徴は第1面出土のそれとまったく同様である。7は底部が失われているが，形態から見て高台が付くB類であろう。3はやや深めのⅢA類である。10・11はこの3号窯跡出土の他の遺物とは趣を異にする個体である。10は明らかに窯跡より時期がさかのぼるもので，焼台として使われたものか混入品と考えられる。

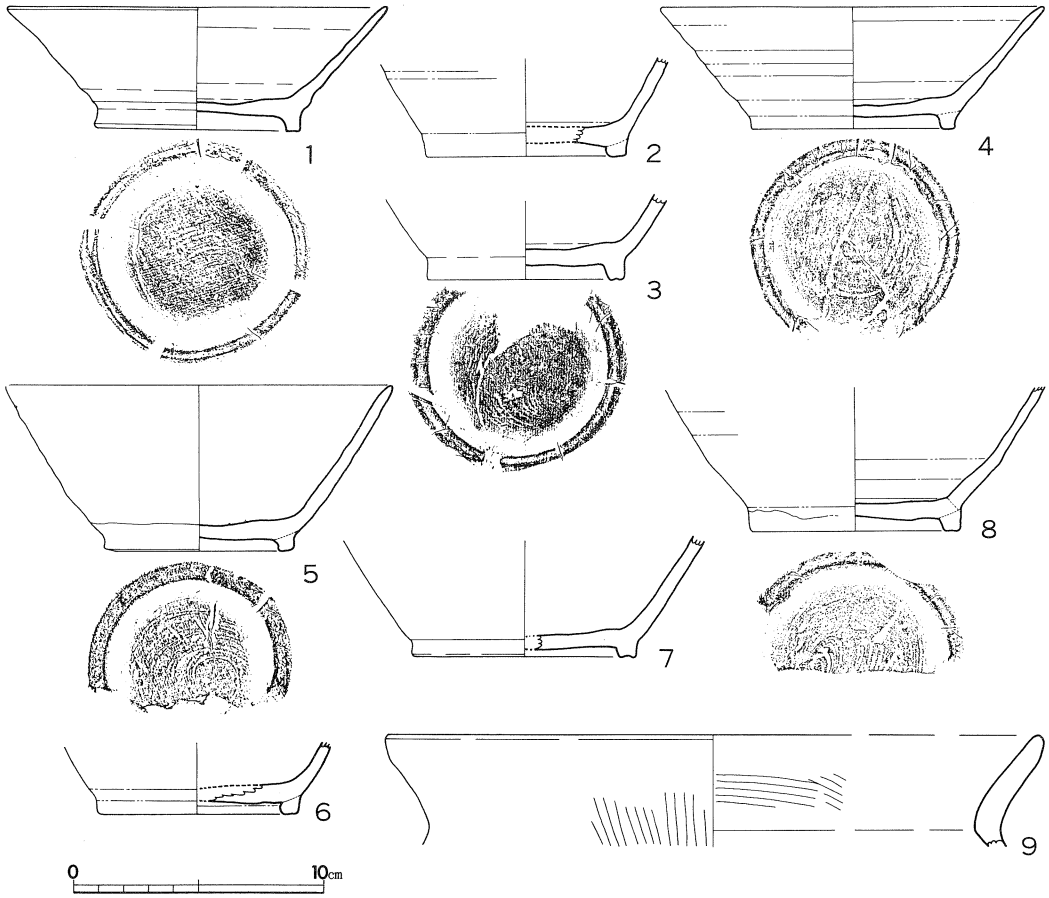
11は鉢形の土器である。最大径24.3cmで，口縁はわずかに内傾し，端部はつまむような強いナデ調整により細く仕上げられている。



第83図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区3号窯跡第1面出土遺物実測図(1)



第84図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区3号窯跡第1面出土遺物実測図(2)



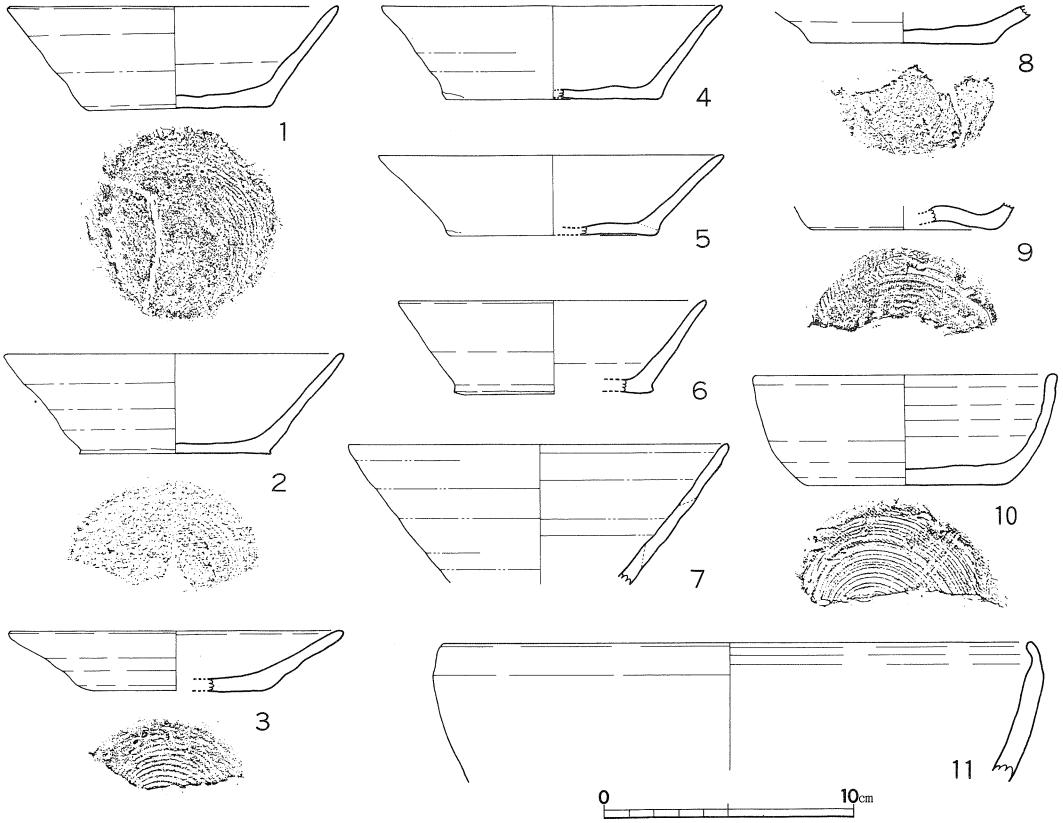
第85図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区3号窯跡第1面出土遺物実測図(3)(9のみ1/4)

第3面出土遺物（第87，88，89図）　もっともまとまって遺物が出土した面で，皿A，B類，坏A，B類いずれも出土している。

皿A類（第87図1～4）は，口径が13.6～15.3cm，高さが2～2.5cmで，回転糸切り痕の残る平坦な底部から，やや外反ぎみに開きながら体部が立ち上がる。

皿B類（第87図5～7）は，基本的に体部の特徴はA類と同様であるが，A類に比して口縁端部を外方につまみ出す傾向がみられる（6・7）。高台は，底部の外縁（7）もしくは底部外縁のやや内側（5・6）に貼り付けられ，断面は正方形に近い台形を呈する。ただ，7のように非常に浅いものがあり，このB類は皿ではなく蓋である可能性も否定できない。

坏A類（第87図8～16，第88図，第89図1～6）の大部分は，第1～2面出土のそれと基本的に同様の特徴をもつ（第87，88図）。すなわち，回転糸切り痕の残る平坦な底部から斜め上方にほぼ直線的に体部が立ち上がり，口縁端は薄く丸くおさめる。器壁は概して薄く，口径12～14cm，深さ



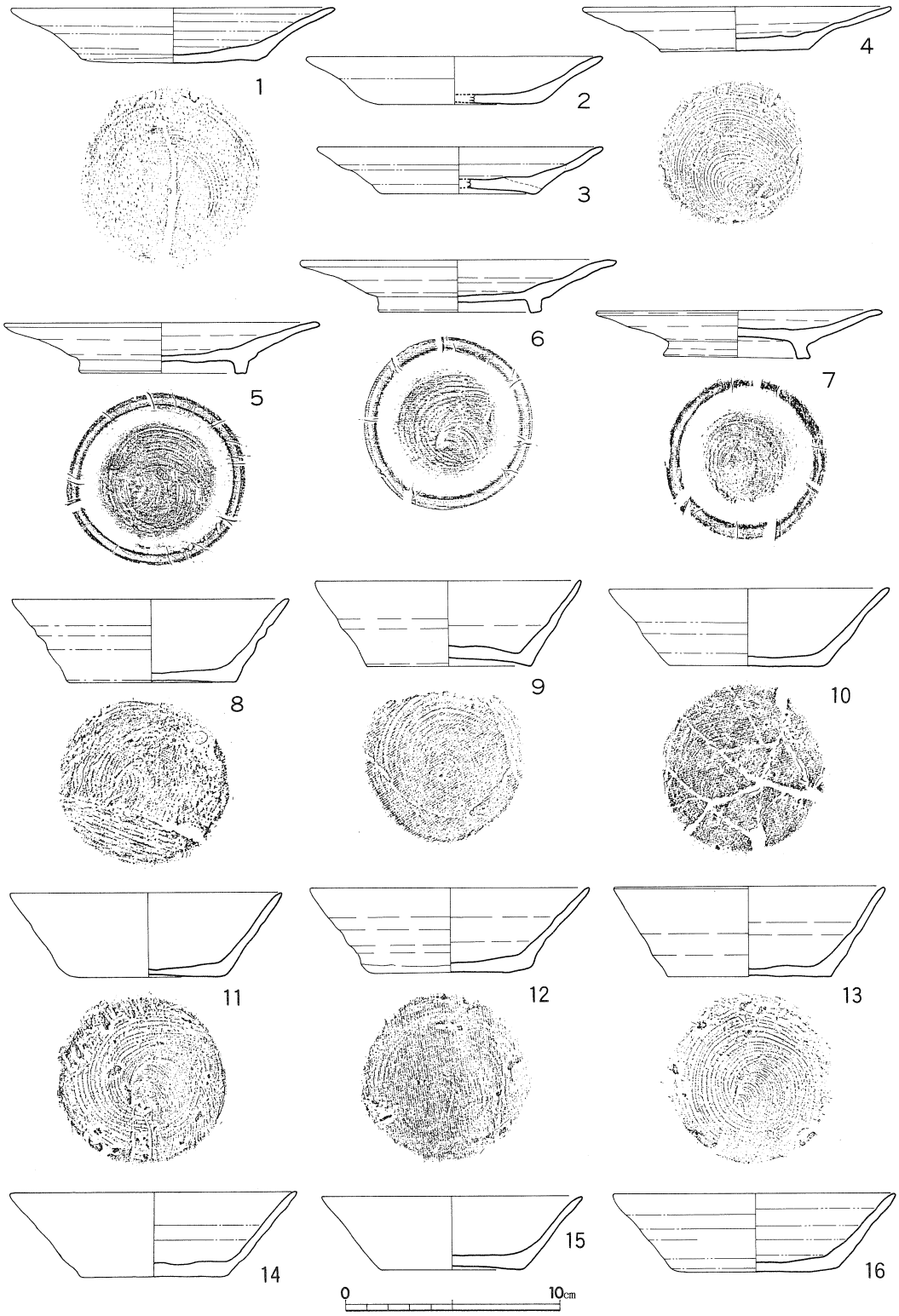
第86図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区3号窯跡第2面出土遺物実測図

3～3.5cm，口径と底径の割合はおよそ1.7：1前後のものが多い。一方，第89図1・2の2点（A'類と呼ぶ）は，坏A類のなかで異なった特徴をもつ。口径がおよそ15.5cm，深さが4.5cmと明らかに大形で，底径に比して口径の割合が大きい。形態的にも口縁端部が外方につまみ出され，体部には回転ナデによる意図的で規則的な凹凸がみられる。

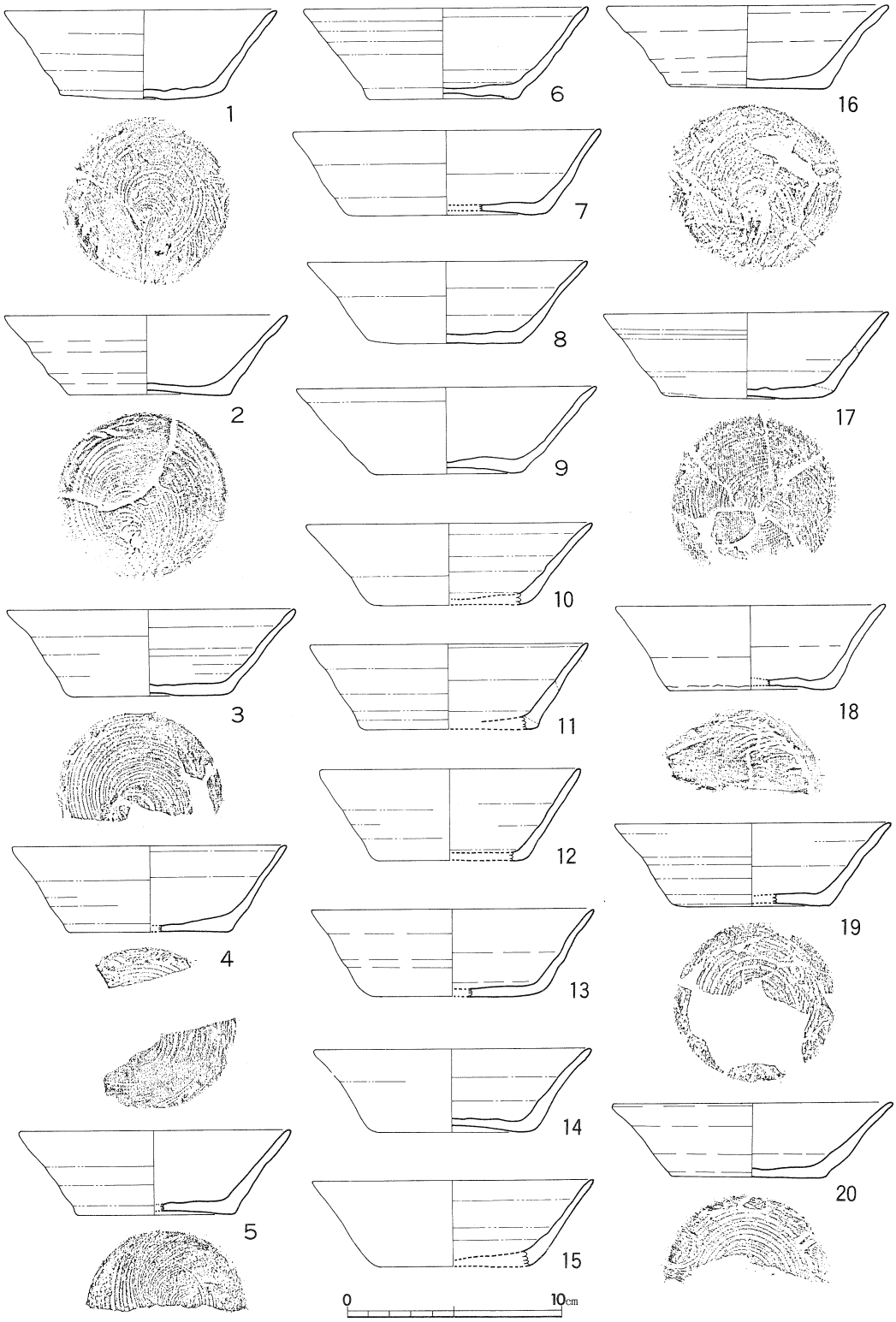
坏B類（第89図7～17）は，A類と同様，2種に細分できる。7・8は坏A'類の底部に高台が付いた形で，高台は底部外縁に貼り付けられ，細く高いのが特徴である（B'類と呼ぶ）。一方，9～17は，B'類に比して容量が大きく体部の開きもさほど大きくはない。体部の極端な凹凸もみられず，高台の断面形は正方形ないし台形を呈す。

第4面出土遺物（第90図）　皿，坏が出土しているが，第1，2，3面に比べて皿の比率が高いのが特徴である。皿はA類のみが出土しており，概して底径の口径に対する比率が高いといえる。体部はやや内湾ぎみに立ち上がるものと外反ぎみに立ち上がるものの両種がみられる。

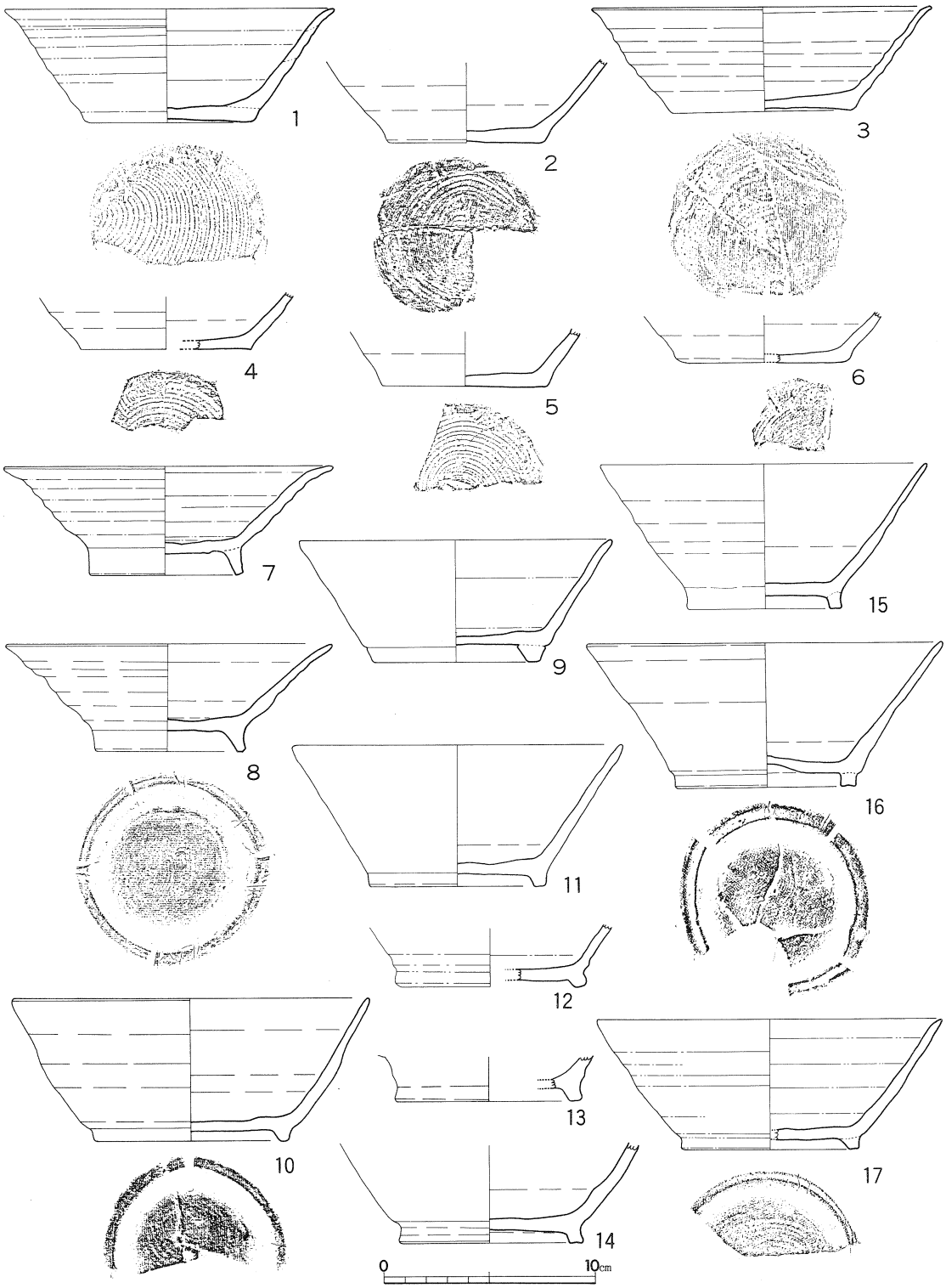
坏は他の面のものと基本的に同様である。



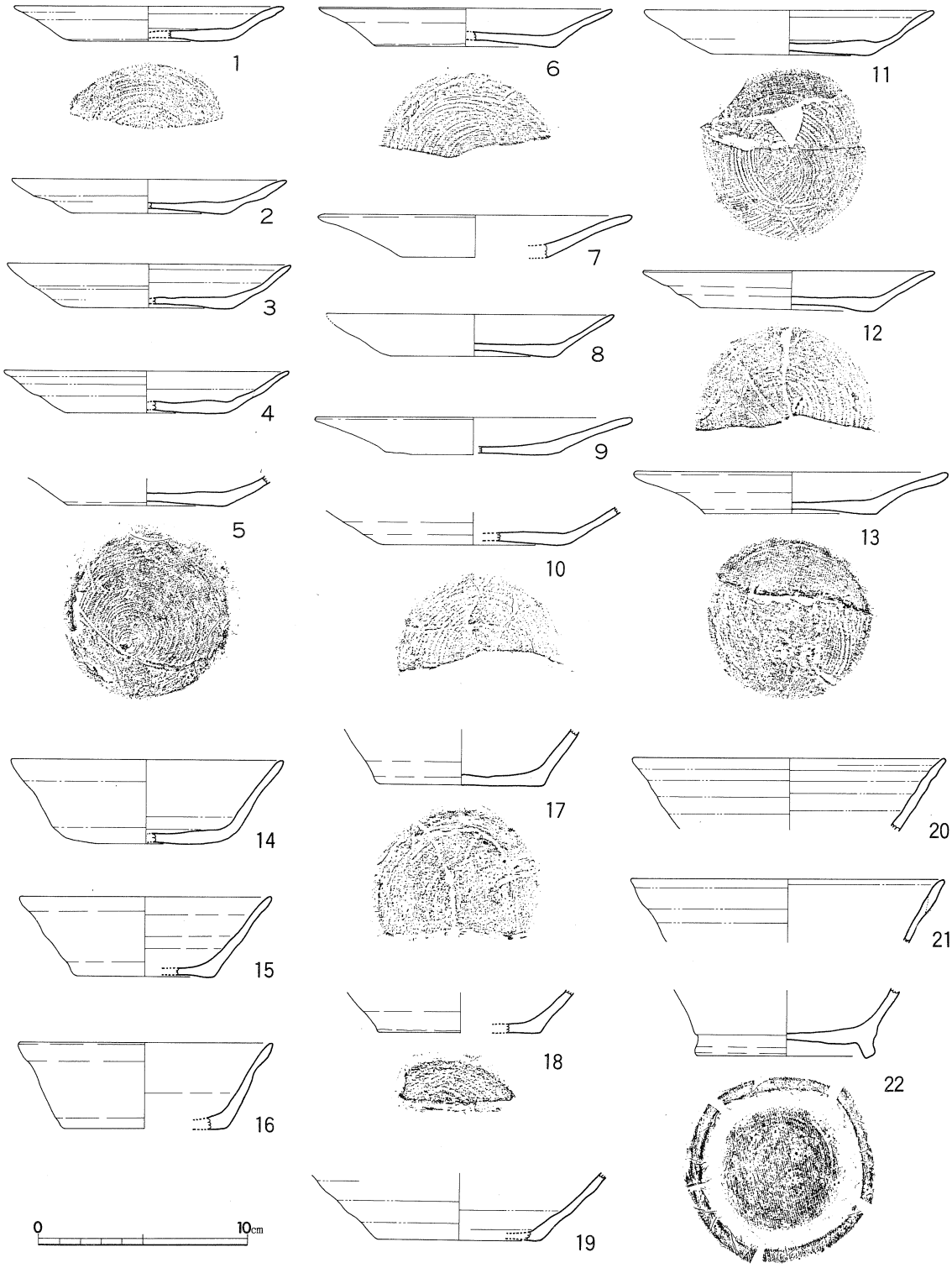
第87図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区3号窯跡第3面出土遺物実測図(1)



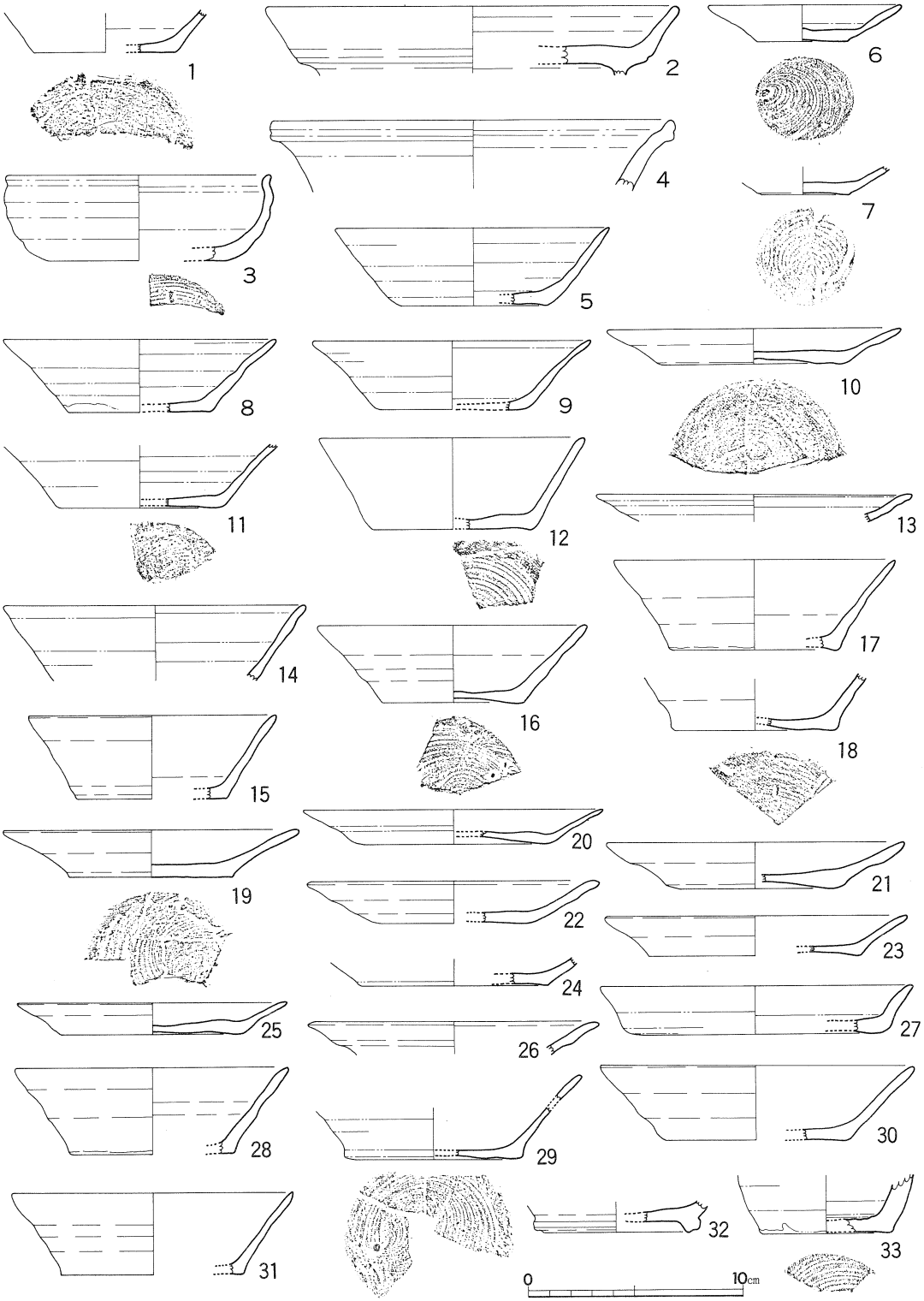
第88図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区3号窯跡第3面出土遺物実測図(2)



第89図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区3号窯跡第3面出土遺物実測図(3)



第90図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区3号窯跡第4面出土遺物実測図



第91図　古曽志平廻田遺跡Ⅲ区3号窯跡その他の出土遺物実測図
〔1～4；焚口付近、5；下方灰原、6･7；焚口入口付近、8･9；12層
10～14；a層、15～18；b層、19～33；窯内流入土･崩壊土内〕

(4) Ⅳ区の調査

平廻田遺跡Ⅳ区はⅢ区の向い側，すなわち平廻田遺跡の中心が広がるⅠ～Ⅲ区の尾根と，古曽志善坊遺跡のある尾根が合流し，さらに南に伸びていくところの東側斜面に位置する。試掘調査の結果，遺構が２ヶ所に分かれて検出されたことから，調査区も２地区に分けて設定した。北区では，東向き斜面の標高26～32mの間に，加工段４，溝状遺構１，土壙１，ピット群等と遺物包含層を検出し，南区では加工段とピット群，土壙等を検出した（第92図）。

以下に各遺構ごとに説明を加えていくが，Ⅳ区の加工段はⅠ～Ⅱ区で検出したような平坦面や掘立柱建物跡を伴わないことから，特に記号は用いず，第１，第２……加工段というふうに呼称する。

第１加工段　北区の両端に，斜面に対して斜め，すなわちハの字状に削り出した加工段のうち南側のもので，北端は第２と第３加工段の間を抜ける。全長約18mの細長い段で，ほぼ中央あたりでくの字状に折れ曲っている。壁の高さは40～50cmで，壁下の平坦面は幅狭である。

第２・第３加工段　第２加工段は第１加工段北端の斜面上方にあり，全長約５mである。壁の高さは25～40cmで，壁面は直線的でなくかなりの凸凹がある。平坦面は比較的緩やかに傾斜している。第３加工段は北区のほぼ中央にあり，長さ約６mにわたって弧状にきれいに加工されているが，壁の高さは約30cmとやや低く，しかもかなりなだらかなカットである。第２・第３加工段ともに平坦面に柱穴等は発見されなかった（第93図）が，これらの加工段に堆積していた茶褐色土中から遺物が少々出土している。第96図１～５がそれで，いずれも須恵器である。１・２は宝珠状つまみの付く蓋で，１はつまみ高が1.3cmもあり，稜線が鋭く，先端は逆に丸味を帯びている。口縁端部は若干直立させる。２もほぼ同じ作りだが，端部はやや内側に，つまみ出すように短い突起をつける。１には内面ほぼ中央に「×」印のヘラ記号が施されている。３・５は高台付坏の底部片で，底面には回転糸切り痕をそのまま残すが，５は摩滅が著しい。４は横瓶の口縁部である。胴部外面には平行タタキ目文が残るが，内面はナデの部分しか残っていない。頸部から口縁にかけてラッパ上に開き，端部は短くつまみ上げて直立させる。

第４加工段　Ⅳ区北端の加工段で壁の長さは約８mである。斜面を斜めにカットするため段差がやや大きく，壁高はだいたい40～45cm程度である。やはり柱穴等は発見できなかった。なお，第４加工段付近では，その斜面上方から加工段下方にかけて，それぞれ厚さ15cm程度の淡黒褐色土とその下層の暗茶褐色土の２枚の遺物包含層があり（第92図），これらの層から須恵器壷類などがまとまって出土した。第96図10・12・13・16がその第４加工段の斜面上方淡黒褐色土から出土した須恵器類である。10は小形の短頸壷である。胴部最大径が肩部近くにあり，肩部で一度大きく内傾したのち直立して口縁に至る。口縁端部は若干肥厚させ，その先端は尖っている。12は断面M字形の高台に直線的に開く体部をもつ坏で，体部と底部の境が明瞭に折れ曲がるものである。13は底部のか

なり厚い坏と思われる。16は胴部が球形に近くなる壺で，頸部から口縁にかけてはラッパ状に開き，口縁外面のやや下側には突線を１条廻らす。遺存状態が悪く，器表面の摩耗が著しいが，胴部外面は平行タタキ目文ののちカキ目，内面には同心円文が観察される。８世紀後半以降と考えられる。

第５加工段　南区中央で検出した加工段で，全長2.8m，壁高約30cmの小形のものである。壁の中央付近で直径約50cm，深さ約30cmのピットを１個検出したが，加工段との関係は不明である。また，遺物も出土していない。

北区ピット群　第１加工段の南半付近の斜面から10数個のピットを検出した。直径15～40cm，深さ10～30cmとかなりばらつきがあるが，いずれも内部に暗褐色土が堆積し，柱穴の可能性の強いものである。ただし，建物跡と考えられるような並びは確認できず，特にそれと断定することはできなかった。

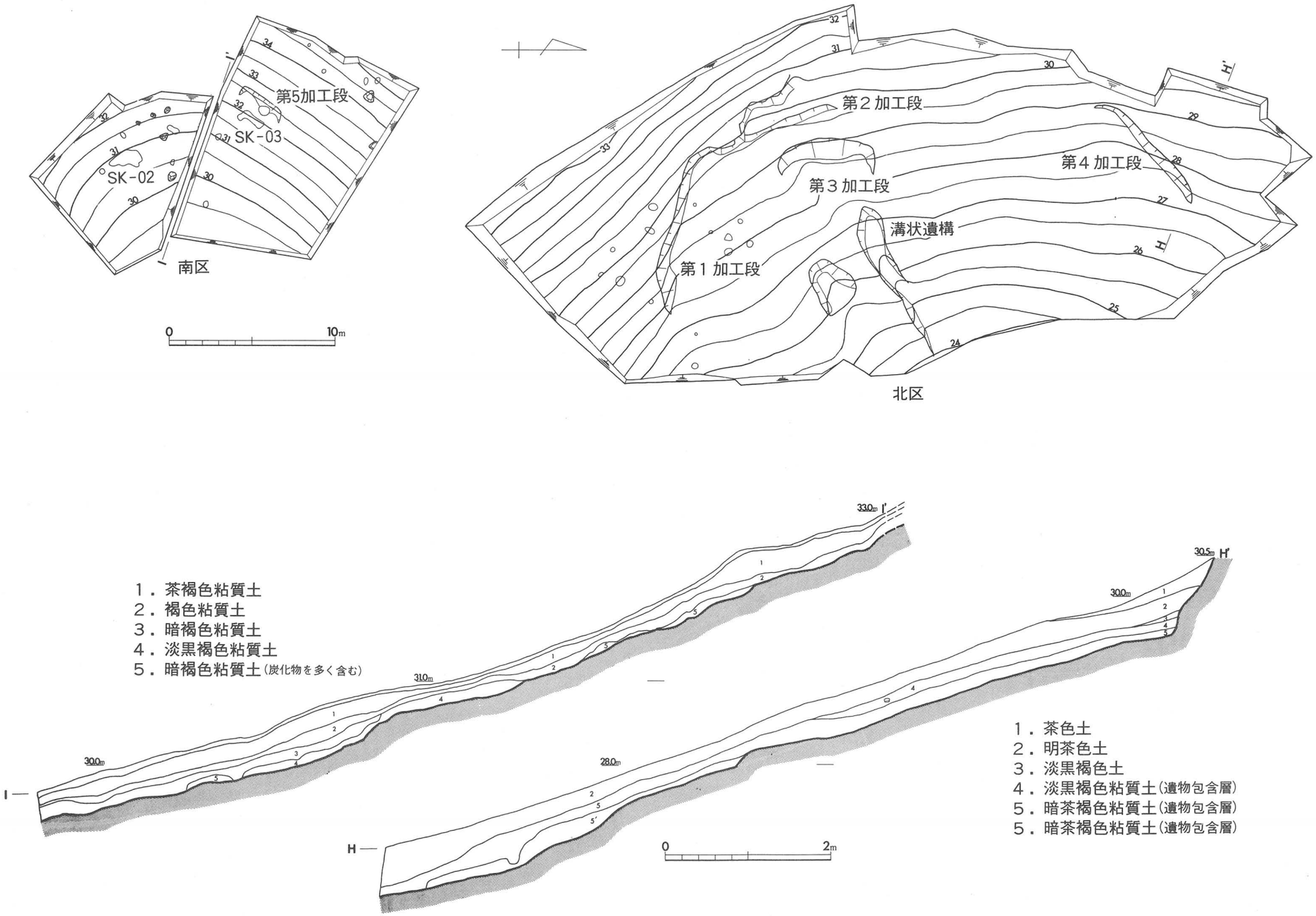
南区ピット群　南区のピットは調査区南半および北端で検出したが，集中するのは南半である。直径は20cmから50cm程度のものまでかなり幅があるが，深さは10～20cmである。その中に１棟だけ掘立柱建物跡として組めそうなピット列がある（第95図)。桁行２間（2.9m)×梁間１間（1.3m）分しか残っていないが，小形の掘立柱建物跡と考えられる。

土壙　全部で３個検出した。SK01は北区中央の溝状遺構南側で確認した土壙で，長径約３m，短径2.5mの平面楕円形を呈するものである（第94図)。底面は，斜面の上端部分が最も深く，下方に緩やかに傾斜し，下端では壁の立ち上がりが観察されない。SK02は南区南半に検出した土壙で，北側で２個，東側に１個ピットが接しているが，もともとは，長径1.4m，短径0.7mの楕円形の土壙と考えられる。底面は二段になっており，西側の段が浅く広い。最も深いところで深さ30cmである（第95図)。遺物は伴っていない。SK03は第５加工段のやや下方にあり，長さ1.5m，幅約0.6mの隅丸長方形の土壙である。深さは約15cmで，内部には暗褐色土が堆積するが遺物は認められなかった（第92図)。

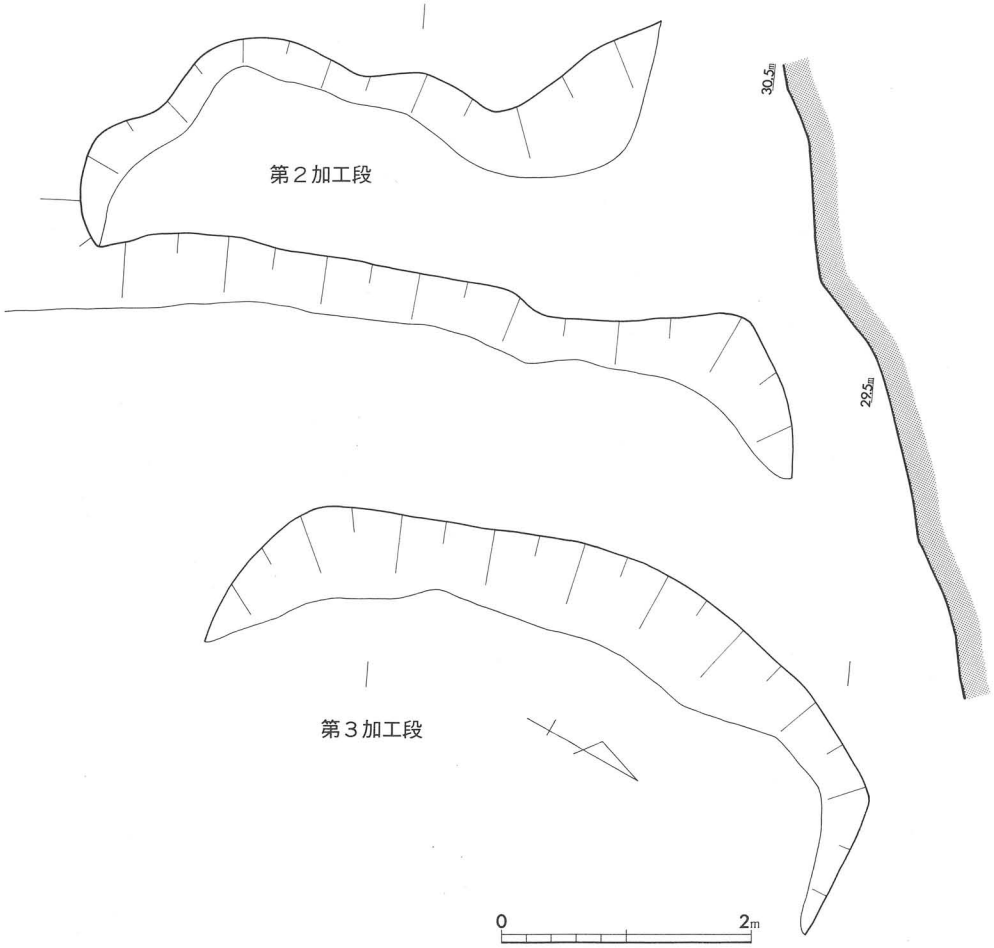
溝状遺構　北区中央で検出した遺構で，斜面に縦に掘り込まれており，全長約10mを測る。深さは上端で20～25cm程度で，下半でも南側では20cm程度の段差が認められるが，北側では緩やかに自然地形へと移行している（第94図)。

Ⅳ区における遺構の検出状況は以上のとおりであるが，その他に，南区中央のベルト付近で焼土を混入する炭化物層を検出したが，遺構等は確認できなかった（第92図土層図参照)。

なおⅣ区でも，遺構に伴わない遺物が若干出土している。第96図６～９・11・15はそうした須恵器類で，７は体部が外湾ぎみに開く坏でⅢ区の窯跡の資料に近似する。８・９の皿には，底面に回転糸切り痕が残り，内底面は若干摩滅して滑らかな感じがある。15はSK01の周辺から出土した壺である。肩部がやや尖り，その上下体部は直線的に作り出されている。肩部には太めの沈線が廻り，



第92図　古曽志平廻田遺跡Ⅳ区地形測量図および土層実測図



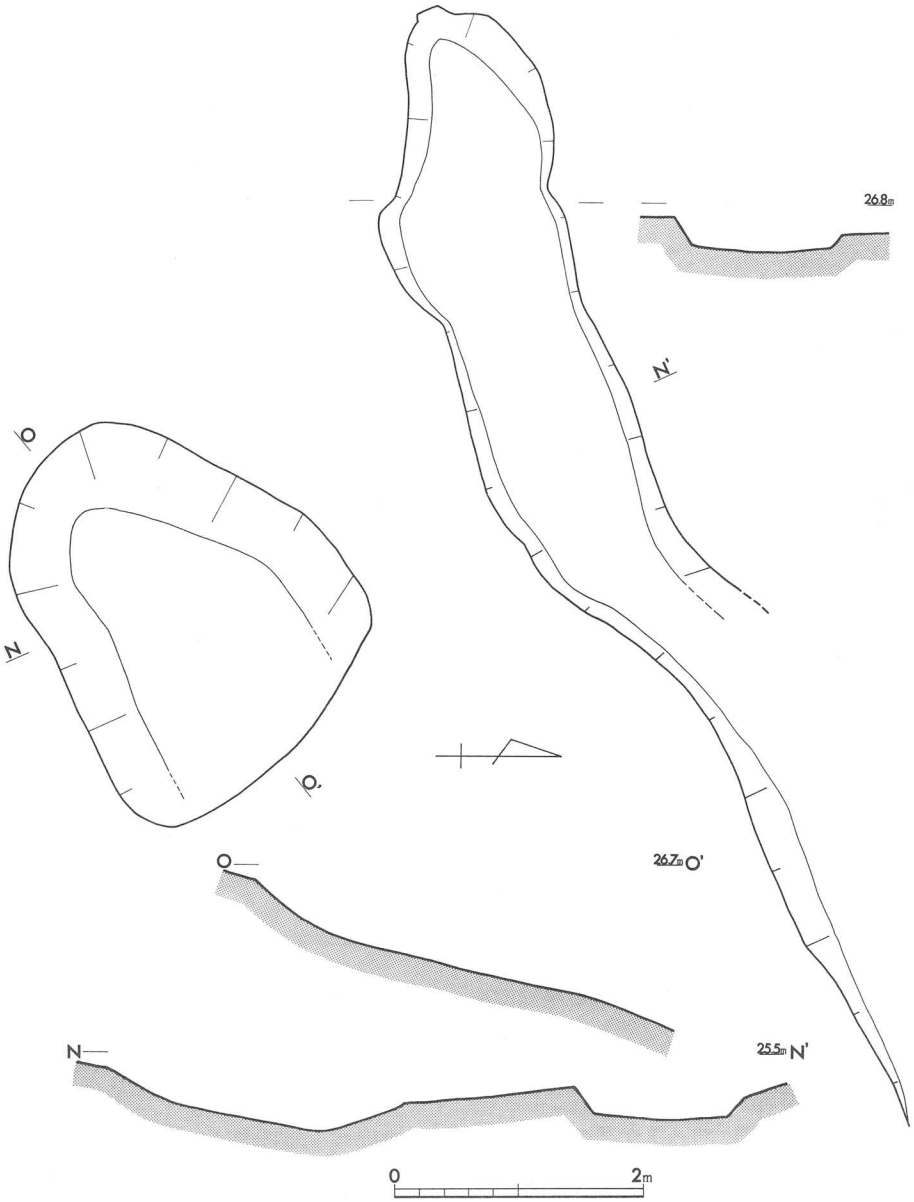
第93図　古曽志平廻田遺跡Ⅳ区第2～第3加工段実測図

頸部内面にも沈線状の凹みが１条認められた。口縁は大きく開口し，端部は水平になるくらいに外反する。外面頸部以下にはヘラケズリを行ってから回転ナデ調整を施している。14は広口壷の頸部で内外面ともに回転ナデ調整である。

以上，Ⅳ区の遺構・遺物は，Ⅲ区の窯跡関係の須恵器も若干含まれているものの，総じてⅠ・Ⅱ区とほぼ同じ時期のものと考えられるが，第96図10の小形短頸壷や８・９のⅢ類など他区とはやや違った遺物を含んでいることも注目される。

(5)　古曽志平廻田遺跡出土の石器

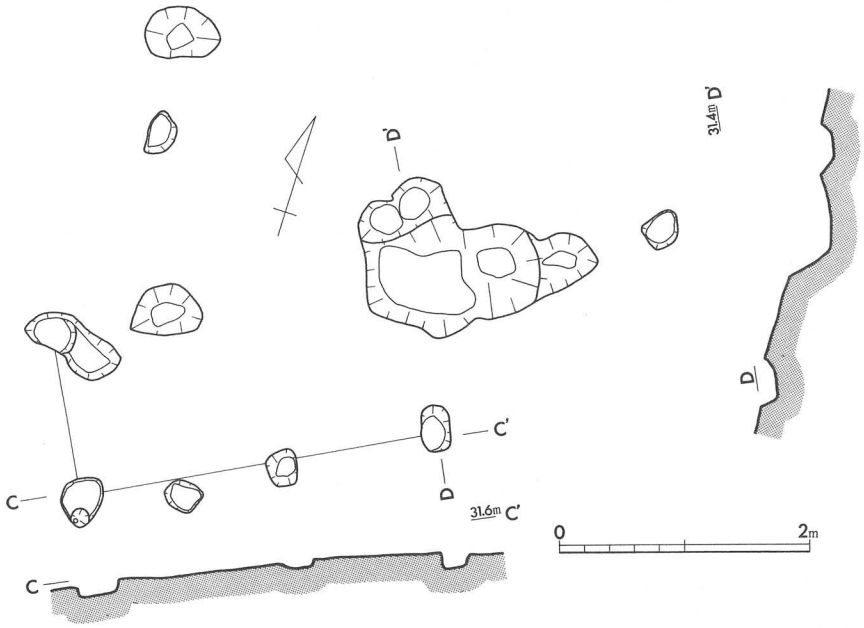
当遺跡では歴史時代の遺物に伴って，旧石器時代から縄文時代にかけての石器類も採用された。出土点数はさほどなく，石器以外の遺物も発見されていないうえ，遺構もはっきりしないことから



第94図　古曽志平廻田遺跡Ⅳ区SK-01・溝状遺構実測図

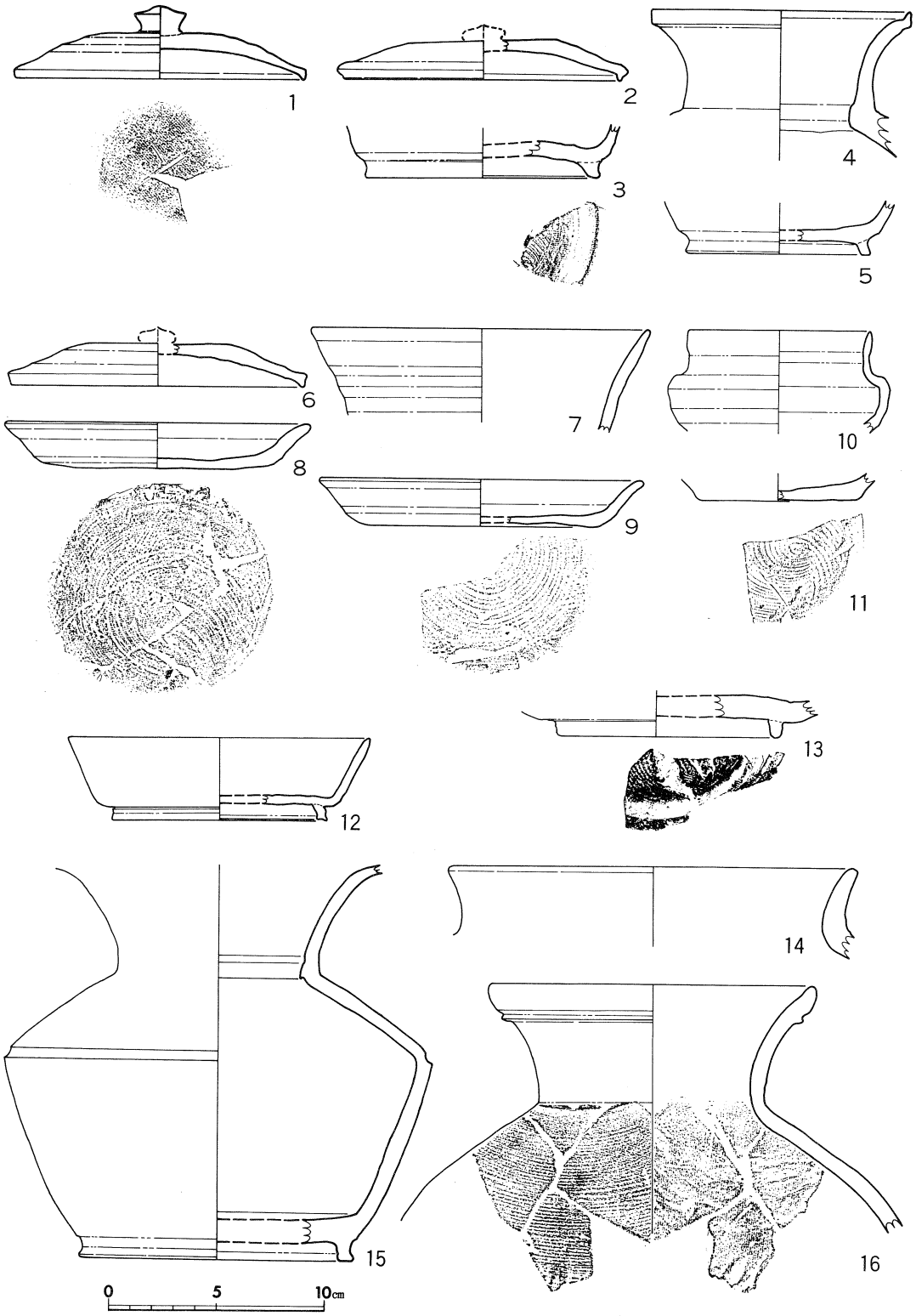
全く遊離した遺物である（第97図）。

1・2はⅢ区で出土した旧石器時代のナイフ形石器である。2は現存で長さ3.3cm，幅1.85cm，黒曜石製で横長の剝片の打面側側縁に，主要剝離面側から背潰しの加工を行っている。背面はネガティブで主要剝離方向と同方向の剝離面で覆われ，石核の底面は見られない。剝片剝離の際，剝離角が小さくなり，前段階の剝離面まで達してしまった結果であろう。両端は欠損し，刃部は新しい剝離



第95図　古曽志平廻田遺跡Ⅳ区南ピット群実測図

で不明な部分が多いが，刃部上方には細かい二次加工が見られる。1は現存長6.55cm，幅2.4cmの安山岩製ナイフ形石器である。極めて風化が進んでおり，細部の状況は不明だが，横長の剝片を素材に，打面側側縁全体と刃部側の下部に背潰し調整を行う。背面は，石核の底面と考えられる平坦な面が大きく占めているが，一部腹面と同方向の剝離面も観察される。刃部には細かい剝離痕が見られる。3～7は黒曜石製の石鏃で，3がⅣ区，6がⅢ区，その他はⅠ区から出土した。3はやや透明感のある石材で両側辺はやや内湾ぎみである。4は漆黒色を呈する石材を用い，6と同様に，押圧剝離によって大形の剝離面が奥深くまで達している。5はわたぐりをもたない小形の鏃で，一側辺と基部に細かな調整痕が見られる。7にも細かい剝離調整が見られ，形もきれいに整っている。8は全長3.2cmの安山岩製の尖頭器である。風化が著しく細部までは判りづらいが，大きめの調整剝離を行い，片面には主要剝離と考えられる広い平坦面を残している。9はⅣ区で出土した安山岩製石匙である。横長の剝片を用いた横形のもので，つまみが一方に片寄っている。つまみ部と刃部に両面とも細かい剝離調整が見られる。10は磨製石斧である。敲打ののち全面磨研したものだが，欠損しており原形は不明である。欠損後再度刃部調整を加え，再利用したと考えられるが，研磨は施していない。灰色の緻密な石材を用いている。

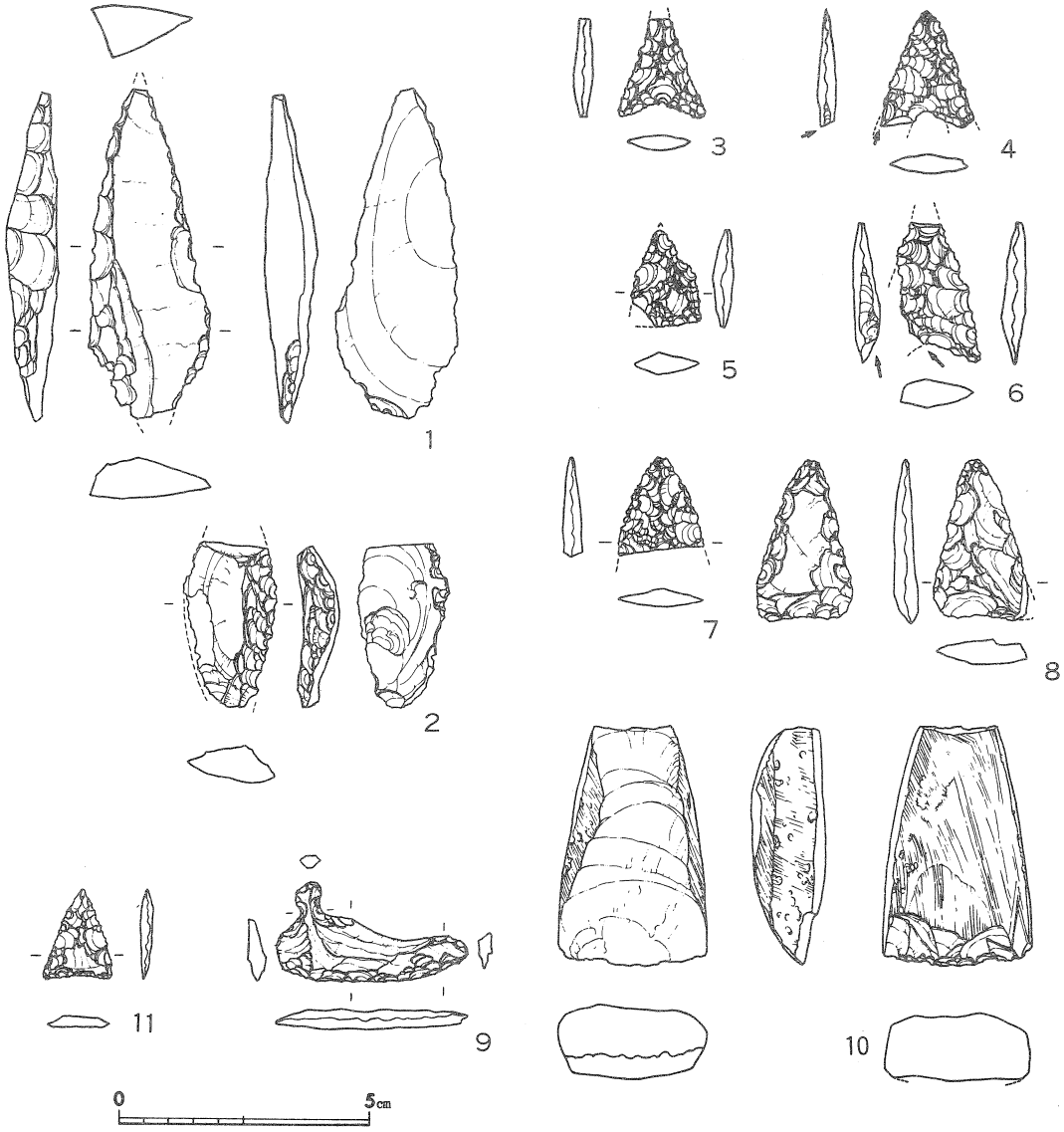


第96図　古曽志平廻田遺跡Ⅳ区出土遺物実測図
（1～5；第2～第3加工段，10・12・13・16淡黒褐色土，その他はその他の包含層）

第２表　古曽志平廻田遺跡出土石器計測表

（単位 cm）

挿図番号	器　種	全長	幅	厚さ	石　質	特　徴	出土地区
1	ナイフ形石器	6.55	2.4	1.0	安山岩	風化著しい	Ⅲ　区
2	〃	3.3	1.85	0.7	黒曜石	両端欠損	〃
3	石　鏃	1.95	1.75	0.4	〃	凹基式	Ⅳ　区
4	〃	2.3	1.85	0.35	〃	〃	Ⅰ　区
5	〃	1.9	1.4	0.45	〃	平基式	〃
6	〃	2.7	1.7	0.5	〃	凹基式	Ⅲ　区
7	〃	1.95	1.7	0.4	〃	不明	Ⅰ　区
8	尖頭器	3.2	1.9	0.5	安山岩	平基式	〃
9	石　匙	3.8	2.0	0.4	〃	横形	〃
10	磨製石斧	4.75	3.0	1.45	不明	欠損後再加工	〃



第97図　古曽志平廻田遺跡および古曽志大谷1号墳出土石器実測図（11のみ1号墳）

第４節　古曽志大谷古墳群

古曽志大谷古墳群は，松江市古曽志町字大谷根智の丘陵上に存した。丘陵の最高所に１号墳が位置し，そこから南に延びる尾根の先端部に２号墳，１号墳の北東の谷をはさんだ尾根上に３，４号墳が位置する。

１．古曽志大谷１号墳

(1)　立地及び調査前の状況

大谷１号墳は東西南北５方向（南側は２方向）に延びる尾根が集約した丘陵最高所に位置する。標高は現存墳丘の最高所で44mをはかり，周囲の丘陵ではもっとも高いため，非常に眺望のよい立地である。南西には宍道湖の湖面が広がり，その対岸には中国山地の山並を見通すことができる。眺望のよい日であれば，『出雲国風土記』に「佐比売山」と記された三瓶山や大山を望むことができる。現在１号墳の真下には干拓農地が広がるが，これは昭和の干拓地であり，古墳時代には，真下まで宍道湖が迫っていたことは言うまでもない。

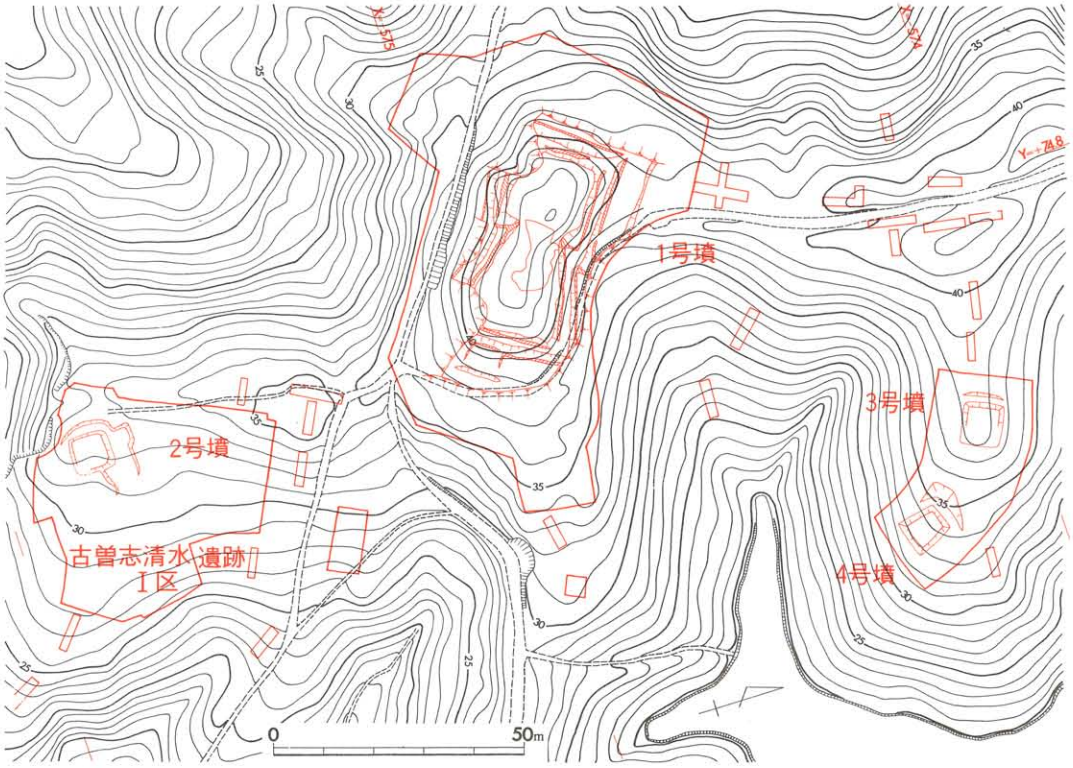
北には，『出雲国風土記』記載の「神名火山」に比定される朝日山がそびえ，その西には北山山地が続き，さらにその先端には「多夫志烽」（旅伏山）を望むことができる。一方東から北東にかけては，古曽志町の平野がひかえ，その先には「布自枳美烽」（嵩山）を望む地である。

調査前の状況は以下のとおりである（第99図）。墳丘の北東南には，古墳を取り巻くように近世以降の幹道（通称殿様道）が通り，またその他の二次的な加工等によってかなり墳丘周辺を傷めている。後方部北東側は，墳裾から墳外の平坦部にかけて比較的残りが良いが，北西側は墳裾付近から下が段状に加工されていた。後方部西隅は地滑りにより大きく崩壊し，南西辺も墳裾下付近から殿様道造成によりカットされていた。

くびれ部は，北東側は比較的残りが良く，調査前においてもかすかに確認ができたが，南西側は流出により不明確であった。前方部は東隅が殿様道により切られ，南隅が後世の加工によって大きくカットされていた。

(2)　調査の経過

古曽志大谷１号墳の存在が明らかになったのは，昭和59年，島根県住宅供給公社の依頼を受け朝日ヶ丘住宅団地予定地内の分布調査を実施した際である。かなりの規模で明らかな人為的加工が認められ，しかも立地条件に恵まれていたこの部分は取扱いに注意を要する地点として考えられたがこのときは，周囲の改変が大きかったことや深いブッシュに阻まれて，明確に古墳であるとの判断をすることができず，「台状遺構」と報告するに留まった。



第98図　古曽志大谷古墳群位置図および調査区配置図

この「台状遺構」が明確に古墳，しかも大形の前方後方墳であることがわかったのは，昭和60年である。この年から県教委は本格的に朝日ケ丘住宅団地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査を開始し，同時に造成工事も着手された。調査はまずトレンチによる確認調査から開始され，それに応じて調査地点の伐採を行い，この「台状遺構」を覆っていた深いブッシュが取りはらわれた時点で前方後方墳であることが明らかになったのである。

これを受けてまず墳丘の測量を行い，全長約46mの前方後方墳であることがわかった。さらに同年秋，古墳の状況のさらなる把握のため，墳丘の要所にトレンチを入れる試掘調査を行った。その結果，○二段築成であること，○斜面に葺石を葺いていること，○埴輪を持つこと，○前方部先端に造り出しを付設すること，○後方部の崩壊が予想以上に大きく，主体部が既に失われている可能性が高いこと，等が明らかになった。

試掘調査によりほぼ古墳の輪郭がつかめたことから，その後その取扱いについて住宅公社と協議を重ねたものの，合意にはいたらず，最終結論は本調査に待つこととなり，翌61年に全面調査を行った。その結果古墳の全貌が明らかになるとともに，新たに前方部に主体部が存在することなどがわかった。調査に並行してこの年の春頃から，この古墳の保存を求める声が研究者の間から上がり，

やがてこの古墳の取扱いは大きな社会問題にまで発展していった。

秋に終了した本調査の結果をもとにさらに住宅公社との協議は続けられたが，最終的に現地での保存は断念するという結論に達し，昭和62年春から墳丘の断ち割りを行う最終調査を開始した。調査開始後，住民による土地買い上げ運動の動きが出たため一時中断したが，６月には調査を再開し最終的に62年７月にすべての現地調査を終了した。

(3) 調査の結果

① 墳丘の概要

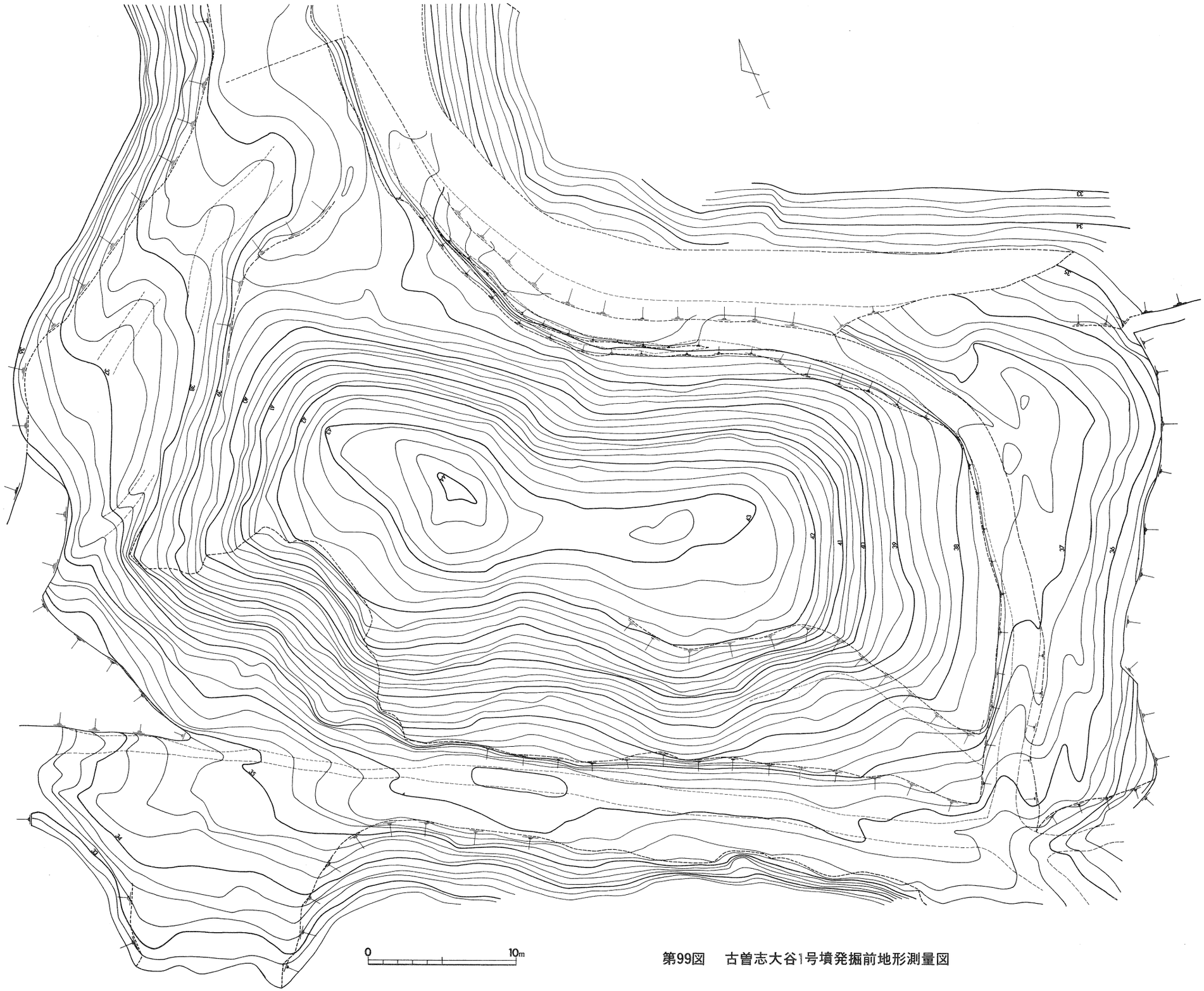
規模・形態　墳丘は後方部西コーナーの大規模な流出，前方部南及び東コーナーの改変等，傷んでいる部分が多く，明確な規模を割り出せない部分も多いが，調査によって知りえた墳丘の規模は次のとおりである。造り出しを除く全長は中軸やや北東よりの部分で45.7mである（造り出しを含めると約52m)。ただ後方部先端辺は南西に向かってやや開いており，また前方部先端辺は造り出しから北東先端部に向かって長さが窄まる形となっており，測点によってその数値は若干異なってくる。

後方部は，長軸に沿う北東辺の基部長が25m，幅が中軸横断で24m，くびれ部近くで23mとなる。南西辺は後方部先端に向かって開いており，後方部の先端部幅はかなり広がると考えられる。

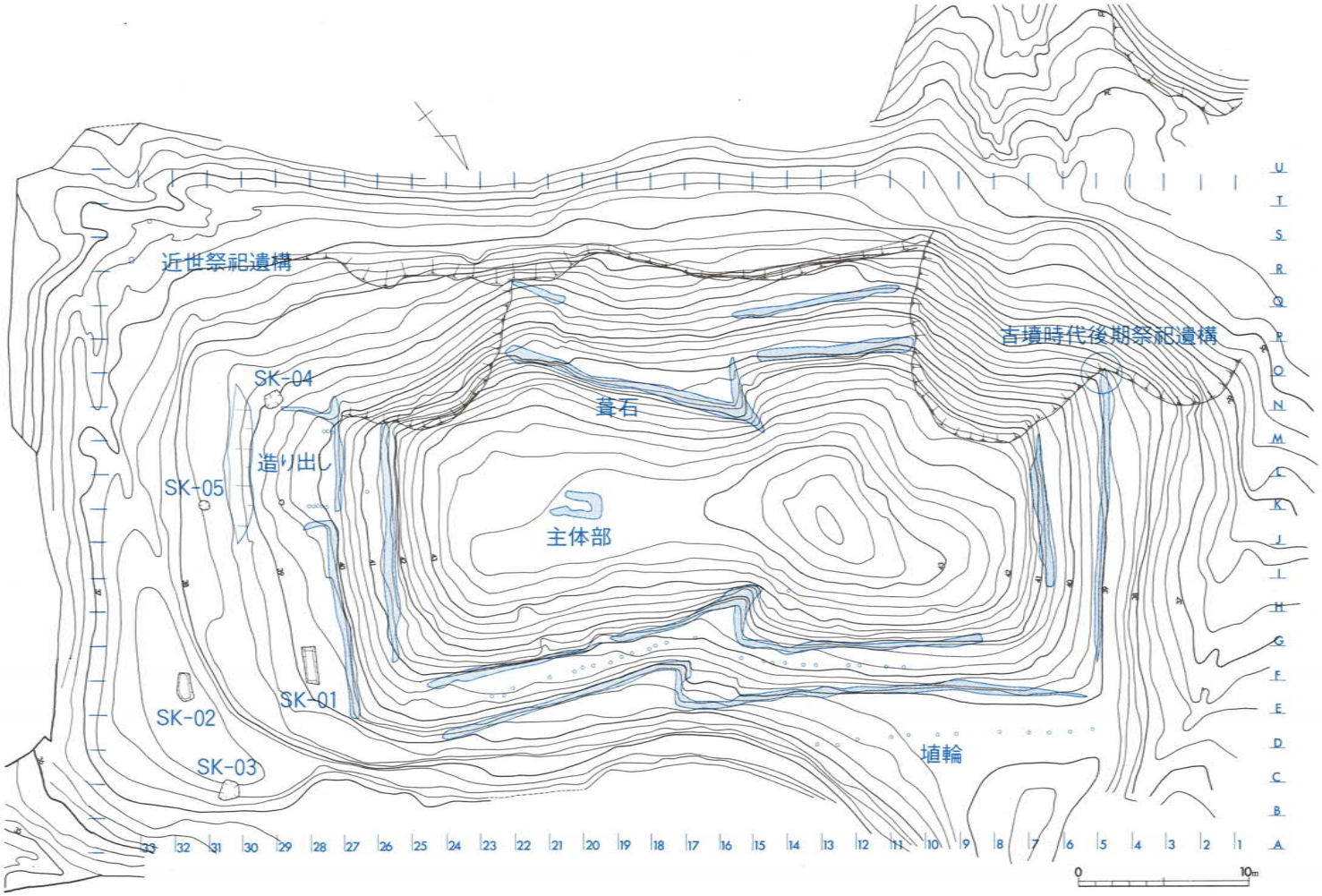
前方部は，くびれ部から中軸付近先端部までの長さ20.5m，幅はくびれ部，先端部とも測定不可能だが，くびれ部でおよそ21m前後になるものと推定される。よってくびれ幅は２mほどで，くびれの少ない形態といえる。くびれ部から先端部に向かってはかなり開いており，幅30m前後になるものと推測され，かなり前方部が発達した形態といえる。

墳丘は２段築成で，墳裾からの高さ1.5～1.7mの部分に幅およそ1.2～1.5mの平坦面がめぐる。斜面は概して急峻で，40～45°に達する部分もある。平坦面より上の上段部の規模は，長さ39m，うち後方部18.4m，前方部20.6mを計る。後方部の幅は横断中軸で18.2m，くびれ部で17m，前方部の幅はくびれ部で11.6mを測る。

前方部頂上は，後方部境界からやや低くなったのち，先端部に向かってわずかながらではあるが高くなっており，上面には拳大よりやや大きい角の取れた礫が敷かれていた。後方部との境には，葺石の根石が１列残存しており，後方部が前方部頂からさらに一段高かったことを示している。調査中には，後方部に前方部頂上平坦部から引き続いて平坦面がめぐり，後方部は三段築成であった可能性も考えていた。しかしくびれ部と前方部境の葺石との関係から復元をすると，後方部に平坦面がめぐる余地はなく，また調査中平坦面がめぐると考えた根拠の一つである後方部中段の埴輪（第100図Ｉ－14付近）も，周囲の流出状況から考えて原位置を保っているとは考えられないため，後方部も前方部同様二段築成である可能性が高いと判断するに至った。



第99図　古曽志大谷1号墳発掘前地形測量図



第100図　古曽志大谷1号墳実測図（A～U・1～33はグリッド設定線）

墳丘の高さは，流出しているうえ墳裾のレベルが一定でないため測点により異なってくる。前方部の現状の高さは先端辺を基準にすると4.5m（前方部側から見た高さ），北東くびれ部を基準にすると4.3mとなる。後方部は先端辺を基準にすると4.8m（後方部から見た高さ），北東くびれ部を基準で測ると5.3mとなる。元の高さを推定できる材料は少ないが，後方部は主体部が失われている状況からして，まだいくらかの高さがあったものと推測される。

② 墳丘の築成

築成の概要　大谷１号墳の墳丘は，基本的に尾根頂上の地山を削り出し，さらにその削った土を盛り上げることによって築成している。墳丘の高さのうち，地山部分の高さは後方部で3.5～４ｍに達しており，盛土の流出を考慮に入れても，墳丘の過半は地山で構成されているといって差し支えないであろう。大略としては削り出しにより墳丘の形と墳外周囲の平坦面を整えたうえで，それにより生じた「残土」を盛り上げて形を完成させるという合理的な築成法といえる。

盛土構成土　盛土は前項で述べたように基本的に古墳周辺の地山を削り出した土であり，大きくいえばすべてが同一の土といえるものである。よって土層をその土の持つ基本的性状の違いにより分層することはできないが，地山の色等に変化が見られるため盛土にもその変化が反映しており，それをもとに分層が可能であった。

各層の説明を行うためにまず，大谷１号墳周辺の「地山」の状況について簡単に説明する。地山の表層には赤褐色の粘質土が堆積している。ローム二次堆積層で間に黄味がかった粘土を介しながら，厚い部分では５ｍに達するが，この付近では１～２ｍの堆積である。この土層の下には，白～灰白色の軟質の地盤が見られる。この層は削ると細かなブロック状に分かれる特徴が見られる。この白色土層の下およそ５～６ｍで，地山の基盤である暗灰色の風化泥岩層に達する。

盛土は以下のような種類に分かれる。

１層　流出土，二次堆積土層

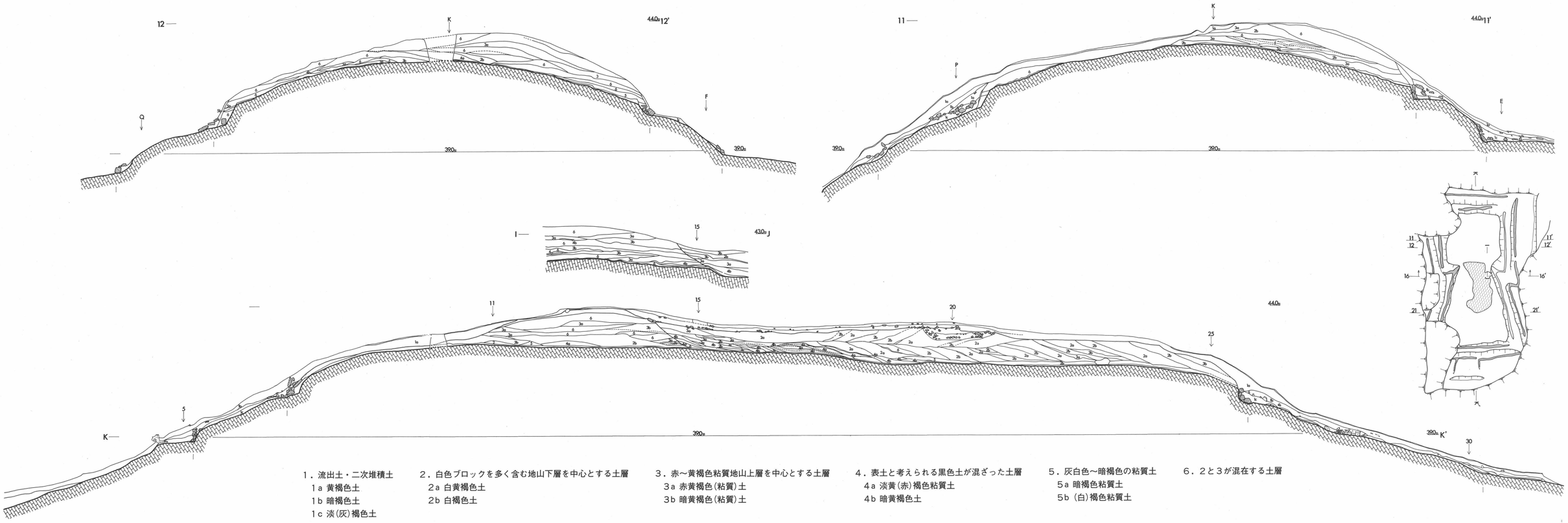
２層　白色ブロックを多く含む白を基調とした土層 —— 地山下層の土を中心とする土層で，若干の色調の違いによりａ，ｂ２層に細分される。

３層　赤褐色を基調とする粘質土層 —— 地山表層のローム二次堆積層を中心とする土層で，ａ，ｂ２層に細分される。

４層　黒色土が混ざった土層 —— 主に表層ローム層（３層対応）に旧表土と考えられる黒色土が混ざった土層である。

５層　２層，３層の色が濁った色調の土層 —— ２層，３層の土が何らかの理由で汚れた土層。

６層　２層，３層が混じりあった土層 —— ２層，３層が混合しており，地山削り出し後，そのまま墳丘に盛ったのではなく，どこかに仮置きされたために混合したものか。



1．流出土・二次堆積土
　1a 黄褐色土
　1b 暗褐色土
　1c 淡(灰)褐色土

2．白色ブロックを多く含む地山下層を中心とする土層
　2a 白黄褐色土
　2b 白褐色土

3．赤～黄褐色粘質地山上層を中心とする土層
　3a 赤黄褐色(粘質)土
　3b 暗黄褐色(粘質)土

4．表土と考えられる黒色土が混ざった土層
　4a 淡黄(赤)褐色粘質土
　4b 暗黄褐色土

5．灰白色～暗褐色の粘質土
　5a 暗褐色粘質土
　5b (白)褐色粘質土

6．2と3が混在する土層

第101図　古曽志大谷1号墳縦横断土層実測図